丈月城

Illustration シコルスキー

カンピオーネ! V

Campione

剣の巫女



スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

V　剣の巫女

丈月　城

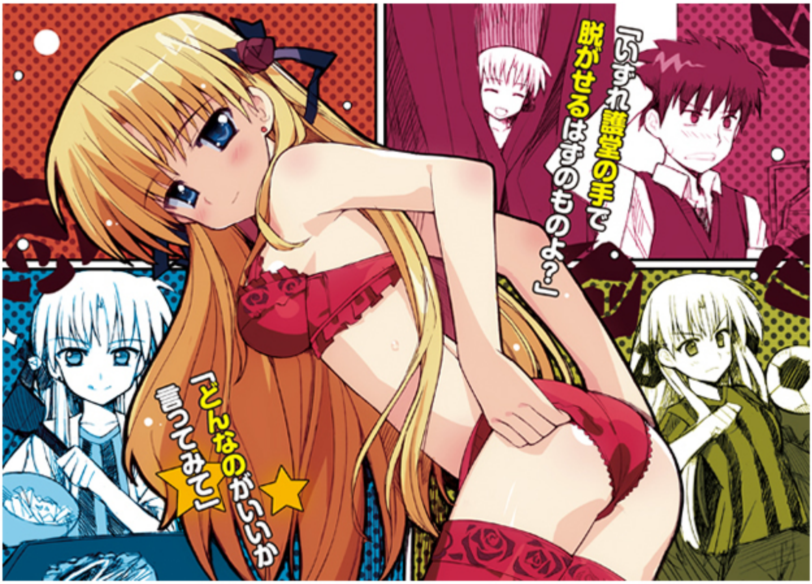
この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。



丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
剣の巫女
Campione
V


馨
静花
護堂
ヤキソバ
リリアナ
恵那
エリカ
祐理


「いずれ護堂の手で
脱がせるはずのものよ？」
「どんなのがいいか
言ってみて」


「天叢雲剣よ。
願わくば我が身を贄とし、
荒ぶる御霊を鎮め給え」
言霊が巫女の唇より漏れ出る。
儚く敬虔なささやき。
そして、その瞳に宿る
凶猛な殺気と闘志。
エリカはくずおれた。
全身に力が入らず、
呼吸もせわしなくなる。
このままでは斬られる。
ゆっくりと歩み寄る
清秋院恵那と
天叢雲剣を見つめながら、
エリカは絶望しかけた。
今の弱った体で打てる手は――。
必死で考えても、妙案は浮かばない。
どうしようもないのか。

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

当代随一とされる「太刀の媛巫女」。

沙さ耶やの宮みや馨かおる

正史編纂委員会東京分室室長。

甘あま粕かす冬とう馬ま

正史編纂委員会のエージェント。

草くさ薙なぎ静しず花か

護堂の妹。祐理の茶道部の後輩。

Contents

イラスト / シコルスキー


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
剣の巫女
Campione V

序　章

　エリカ・ブランデッリは、抜群に目立つ少女である。

　王冠のように輝く赤みがかった金髪と、まばゆい美び貌ぼう。蠱こ惑わく的てきなボリュームと芸術的な均衡美きんこうびを両立させる、いまだ成長期の肢し体たい。それらが勝手に衆しゆう目もくを集めてしまう。

　しかも、彼女は『外人』なのだ。

　この閉へい鎖さ的てきな島国では、それだけで人目を惹ひく理由になる。

　もっとも、彼女が今いる青あお山やま近辺は他よ所そよりも外国人が多い。若じやつ干かんではあるが、いつもより目立つ要因はすくないと言えた。

　夜の一〇時過ぎ。青山通り沿いにあるカフェのオープンテラス席。

　黒のレザーパンツにカットソーを合わせたエリカは、そこで約束の相手を待っていた。

　まだ九月がはじまったばかり。これが昼間ならサングラスをかけるところだ。

　一六〇センチ半ばの身長以外はどんな美貌のモデルにも負けない容姿をひけらかしつつ、エリカは無む為いの時間を過ごしていた。

「申し訳ございません、エリカさま。お待たせいたしました」

「遅かったわね、カレン。あなたらしくもない不ふ手て際ぎわだわ」

遅れて現れた待ち合わせ相手に、エリカは優ゆう雅がに答えた。

カレン・ヤンクロフスキ。

エリカのライバル、リリアナ・クラニチャールの専属メイドであった。

ただし、今はいつものメイド服ではなくキャミソールに半はん袖そでのカーディガン。夜遊びに出かける途中という風ふ情ぜいの服装である。

「出がけにリリアナさまにつかまってしまい、どこへ行くのかと訊きかれたものですから」

「上う手まくごまかしてきたのでしょう？」

「それはもう抜かりなく。相手はリリアナさまですもの。あの方を丸め込む程度なら、児じ戯ぎにも等しい課題だと言えますわ」

旧きゆう友ゆう兼けんライバルと女主人をこきおろす少女たちは、毒のある微笑を交わし合う。

欧おう州しゆう出身の彼女たちであったが、多くの日本人にとってなじみ深いシーンをみごとに再現していた。つまり、越えち後ご屋やと悪あく代だい官かんの密談である。

「あなたも悪い女の子ね、カレン。とても頼もしいわ」

「いえいえ、エリカさまにはかないません。……で、これがお約束の品です」

卓についたカレンが、コピー用紙の束を差し出す。

『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』の異い名みようを持つ少女は優美な手つきで受け取り、中身をたしかめた。

リリアナが数年前より書きつづけている創作ノートの最新号。

内容は恋愛小説、ポエム、随ずい想そうなどだ。それをこっそりカレンがコピーし、エリカが高値で購入。ここ一年ほど定期的に行われている商取引だった。

「あら。リリィったら、今回はいつにもまして叙じょ情じょう的てきで乙女おとめね」

「そりゃもう、人生初の恋愛に浮かれきっている時期ですもの。仕方ありません。……ああ、この話題はエリカさまにとっては少々不ふ愉ゆ快かいでしたでしょうか？　申し訳ございません」

　しれっと言ってのけるカレンに対して、エリカは肩をすくめてみせた。

　愉快な話題ではないが、それを顔に出すほど彼女は素直でも粗そ忽こつでもない。あくまで品よく、微妙な皮肉をほのめかす程度にとどめた。

「ナポリではあなたたちにしてやられたけど、もういいわ。これ以上つけ込ませる隙すきをわたしが見せなければいい話だし。……それにカレン。あなたともあろう人が、このわたしを相手にしてリリィに勝機があると思っているの？　これは剣の勝負ではないのよ？」

「そこはたしかに懸けん案あんなのですが、まあ、わたくしもついていることですし」

　半なかばエリカの指摘を認める形で、カレンは言った。

「リリアナさまに足りないところは、周囲のスタッフが埋めるしかありません。……大体、この問題に関してはエリカさまが卑ひ怯きようなだけです。女としての魅力に加えて魔力と政治力、智力までお持ちなのですから。ハンデをくださってもいいのでは？」

「仕方ないわ。それら全すべてをひっくるめてエリカ・ブランデッリなのですもの」

　賛さん辞じと恨うらみ言ごとの両方に、エリカは悠ゆう然ぜんと微笑ほほえんだ。

「ああ、あと誉ほめるなら、わたしのような女と巡めぐり合った護ご堂どうの強運も誉めてあげて。あの人、自覚がないけど本当に果か報ほう者ものなんだから！」

「草くさ薙なぎさまですか。……あの方もしかして、女に振り回される方がお好きなのですか？」

「嫌いではないはずだけど、どうして？」

「いえ、あれだけリリアナさまに尽くされても、あまり情にほだされている気配がありませんので。積極的に尽くす女よりも、わがままで自分を振り回す女がお好きなのかな、と……。あの若さでその境地に達しているのなら、将来は相当な色好みになりそうですね」

　考え込みながらカレンは言う。最近のリリアナの行動を思い出しているのだろう。

　エリカはくすりと、勝者の微笑を見せた。

「いくら尽くしたところで『騎き士しとして～』とか言ってたら、あの朴ぼく念ねん仁じんは額面通りに受け取るだけよ。リリィの積極性は認めるけど。祐ゆ理りなんかは逆に、もっと自分から行動を起こすべきよね。あのふたりを足して二で割ったら、ちょうどよくなりそうだわ」

「ああ、あの日本の巫み女こですか。——そうそう、巫女といえば」

　急にカレンが話題を変えた。

「媛ひめ巫み女こ、というのはどういう手合いの者なのでしょう？　何とか委員会とかいう組織もそうですが、日本の魔術師社会はかなり独特ですよね」

　欧州の魔術師からすれば、無理もない感想だ。

　エリカはうなずいた。彼女たちの所属する《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》と《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》。

　どちらもイタリア、ミラノを本拠地とする結社で、世界的にも名門である。

　主要都市、歴史ある古都にはひとつ以上の魔術結社が存在し、一般社会とは異なる魔術師の世界を裏で形成する。それがヨーロッパでは当たり前なのだ。

　ところが、日本に魔術結社はすくない。

　その多くは仏ぶつ教きようをベースとする宗教団体で、都市に根

づく集団ではない。

　都市に住む呪じゆ術じゆつ師したちは目立った組織を形成せず、『正せい史し編へん纂さん委員会』なる国家直属のグループに管理・統とう制せいされている。そして、問題の媛巫女だ。

「そうね。祐理なんかは何度かヨーロッパに行ったことがあって、あちらでも知る人ぞ知る存在みたいだけど……。彼女が『媛巫女』と呼ばれるグループに所属する事実はあまり知られていないわ。媛巫女とはね、正史編纂委員会が懇こん意いにする一族からスカウトして、英才教育を施ほどこした女性の霊力者——ということらしいの」

　媛巫女についての情報はすくない。おそらく正史編纂委員会によって統制されている。

　彼女たちが何人おり、それぞれどのような霊力を所有しているのか。《赤銅黒十字》の組織力で調査しても、詳細はいまだ定かではないのだ。

「多分、媛巫女を生み出すカラクリの秘密は血筋にあるのだと思うわ。特殊な霊力者が生まれやすい家系を委員会は常に把は握あくし、その血筋が絶えないよう、薄まらないよう監視と保護を行い、生まれた霊力者を媛巫女として抜ばつ擢てきする……そんなところみたい」

　霊視のように特殊な霊的資質は、男よりも女の方に発現しやすい。

　欧州における『魔女』の素質と同じだ。こと呪術や魔術に関しては、女性の方がすぐれた資質を持つ可能性が高いのだ。

「万ま里り谷や祐理のように特殊な能力者が、他にもゴロゴロしていると？」

「ゴロゴロはしていないようだけど、幾人かはいるみたいね。わたしの方でつかんだ情報によると。祐理は媛巫女の中でもかなりの上位者らしいから」

　この三カ月とすこし、エリカも日本で遊んでいたわけではない。

　護堂がうるさいので学校をあまりサボらないようにしつつも、カ

ンピオーネに仕つかえる騎士としてさまざまな根回し、調査も行ってきたのだ。

「じゃあ、わたしはこれで。お礼はいつものように口座へ振り込んでおくわ」

　例のコピー用紙をバッグに入れて、エリカは立ち上がった。

　カレンが澄まし顔で、恭うやうやしく礼を言う。

「いつもありがとうございます。気前のいい取引相手を持てて、本当に助かります」

「いい商品に相応の代価を支払うのは、当たり前のことよ。……もし《青銅黒十字》の重要機密なんかがついてくるなら、さらに気持ちよく支払いを済ませるところだけど」

「お気持ちだけで十分です。わたくし、まだ裏切り者として粛しゅく清せいされたくはありませんので」

　危険は最小限かつ笑い話で済む範囲に留とどめる。カレンはそう言いたいのだ。

　妥だ当とうな返答に、エリカは貴婦人らしく微笑んだ。

　長く取引をつづけたい相手は、こうであって欲しいものだ。

　適切な潮しお時どきを見み極きわめられない者はどこで破滅するか、わかったものではない。

　その点でカレンは、共犯者にはもってこいの人材だった。彼女なら引きつづき、女主人の個人情報を長期にわたって提供してくれるだろう。

「わかったわ。じゃあ、いずれまた。ああ、リリィの面白い情報があったら、これとは別口で高く買うわよ」

「かしこまりました。そのときは必ずご連絡いたします。——よい夜を」

　カレンの挨あい拶さつに送られて、エリカは席を離れた。

まだ夜は長い。しなければならない用事をたくさん抱えているのだ。

結局、エリカが自宅の近くまで帰ってきたのは深夜の三時近くだった。

東とう京きょうに強力な魔術結社は存在しない。だが、それでもすくなからぬ数の呪術師がいる。

カレンと別れたあと、エリカはとあるホテルへ赴おもむき、その一室で彼らが開催するオークションに参加してきた。呪じゆ具ぐ、魔ま導どう書しよの類たぐいを売りさばく秘密の会だ。

正史編纂委員会に見つかれば、即没ぼつ収しゆうになる物品もあったらしい。

エリカがこれに参加したのは、希少な呪じゆ物ぶつが入手できるかもしれないという期待と、委員会に関係のない呪術師たちとの人脈を作る目的のためだった。

めぼしい品はなかったので購入は控えたが、もうひとつの目的は上う手まくいった。

今夜も存分に名前と顔を売ってきた。

日本に来て三カ月。イタリアから来た天才魔術師にして、魔王カンピオーネの愛人！　今や、この東京で彼女の存在を知らない『業界人』は稀まれにさえなってきた。

——タクシーを降りたエリカは、マンションまでの短い道のりを歩き出す。

夜も遅く、人ひと気けはまったくない。

にもかかわらず、不穏な気配を感じてエリカは足を止めた。

勘かん……ではない。夜の空気に混じる匂においのせいだ。

かすかに鼻び腔こうを刺激する、鉄の匂におい。それを感じた直後に、襲撃が来た。

空くうを斬きり、飛来する鉄の塊かたまり。刀だ。

緩ゆるやかなカーブを描く刀身は、古式ゆかしい日本刀のもの。ただし柄つかはない。

それが四本、根本のところで溶接されていた。

刃先の部分で反そりも強くなっており、まるで『卍まんじ』の文字だ。この奇怪な刀が操あやつる者もいないのに宙を飛び、こちらへ突っ込んでくる。高速で回転までしている。

とっさに跳びのきながら、エリカは愛剣を魔術で呼び出した。

クオレ・ディ・レオーネ。

優美な細身の刀身と、清せい冽れつな銀の輝きを宿す獅し子しの魔剣。

これでエリカは、空飛ぶ刀を打ち落とそうとした。しかし、『卍』に迎え撃たれる。扇風機のように回転する刀身が、クオレ・ディ・レオーネを主の手から跳はね飛ばしてしまう。

丸腰になったエリカ。

そこへ再度襲いかかる『卍』の刀。

しかし、エリカは華か麗れいな微笑で美しい口元を飾り、口こう訣けつを唱となえた。

「アルゲス、ステロペス、ブロンテス！　我が剣に雷らい霆ていの加か護ごを授さずけ給たまえ！」

その刹せつ那な、宙に舞い上がっていたクオレ・ディ・レオーネが紫むらさきの火花を散らした。

天降る一いつ閃せん。

獅子の名を持つ魔剣は稲いな妻ずまをまとって急降下し、『卍』を上方から刺さし貫つらぬく！

今度は弾はじき飛ばされず、四振りの刀が組み合わさる中央部をみごとに貫き、そのまま地面に深く突き刺さる。『卍』の刀剣は

粉々に砕け散ってしまった。

「ゴーレム、ガーゴイルの類たぐいにしては造りが単純すぎる……。これもやっぱり、メイドインジャパンなのかしらね？」

　つぶやきながら、エリカはハンカチを取り出した。

　砕け散った破片の一部をそれで包み、回収する。どうやら、自分の身に新たな危険が迫っているらしい。——望むところだ。

　冒険心を刺激されたエリカは、軽やかな足取りで家路をたどっていった。

第１章　嵐の予兆

1

　文ぶん京きよう区くの湯ゆ島しまにある神社といえば、やはり湯ゆ島しま天てん神じんである。

　近くにはこれまた高名な神かん田だ明みよう神じんもある。だが今、彼女がいるのはそういったメジャーどころではない。湯島の路地裏にひっそりと建つ神社。普段は神かん主ぬしや巫み女こも常じよう駐ちゆうせず、ご近所の氏うじ子こが持ち回りで管理をするような、小さなお社やしろだった。

　彼女はこぢんまりとした拝はい殿でんの扉を開け、なかに上がり込んでいた。

　近きん隣りんの人間が見かければ、奇妙に思ったかもしれない。

　普段は閉ざされている扉が開け放たれ、半はん袖そでの制服を着た女子高生が図ずう々ずうしく占せん拠きよしているのだから。だが、不法侵入ではないので文句を言われる筋合いはない。

　それに今は早朝の五時。通行人もほとんどいなかった。

「わかってるって、おじいちゃま。大丈夫だよ、多分。……うるさいなー。そりゃ男の子とつきあったことなんてないけど。誰のせいでそうなったと思ってんのさ？」

　彼女は拝殿の床に行ぎよう儀ぎよく正座しながら、携帯電話で話し込んでいた。



　外ではすさまじい強風が吹き荒れていた。

　風が唸うなりを上げ、小さな社を吹き飛ばさんばかりに揺らしつづける。空には暗あん雲うんも立ちこめ、今にも雨が降ってきそうだ。

「え、男のたぶらかし方？　……そんなのおじいちゃまから教わったって、役に立たないに決まってるよ。どうせ時代遅れのやつでしょ？　自分で勉強する」

　彼女は片手で、床に置いていた包みを器用にほどく。

　黒くろ漆うるしの鞘さやに収めた大だい刀とうが現れる。刃渡り三尺じやく三寸ずん五分ぶ——頼もしい相棒だ。

　そのすぐそばに、十数枚の書類がバラバラになって散乱している。彼女と同年代の少女ふたりについての調査報告書である。

「それよりさ、面白そうな子を見つけたんだ。うん、そう、王様の愛人のひとり。負ける気なんてないからね。絶対、日本から追い出してみせるよ。……うん、うんうん。もちろん、最後は腕ずくで何とかするつもり。その方が面白いし。——じゃあ、また連絡するよ」

　話し終えた彼女は、散らばっている紙切れを一枚取り上げた。

　エリカ・ブランデッリ。イタリア、ミラノ出身。魔術結社《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》所属、一六歳。身長一六五センチ。スリーサイズ、八七・五八・八八。

　カメラ目線で撮影されたポートレートまで添えてある。すばらしい美少女だ。

　彼女——清せい秋しゆう院いん恵え那なは『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』の個人情報を眺めてにんまりと笑った。

「相手にとって不足はなし。この娘ならきっと、恵那たちを楽しませてくれるはずだよ」

　床に横たわる相棒に呼びかけながら、恵那は外を見た。

　すっかり静かになっている。

　激しかった風も弱まり、空には晴れ間まで広がっていた。

「あの風、やっぱりおじいちゃまのせいか。ほんと、迷惑なじいちゃんだよねェ」

　肩をすくめてつぶやいてから、恵那は携帯電話をポケットにねじこもうとした。

　だが、バッテリーが切れていたのを思い出した。途中でやめて、バッグのなかにあるはずの乾電池式充電器を探しはじめる。

　清秋院恵那が話していた相手は、電源の切れた携帯電話だったのだ。

2

　エリカ・ブランデッリの辞書に、早寝早起きという言葉はない。

　むしろ逆だ。夜は遅くまで遊び倒し、用事がなければ昼近くまで寝て過ごす。それこそがエリカの愛するライフスタイルだった。

　だが、この日は早朝五時頃にむくりとベッドから起き上がった。

　さわやかな朝を満まん喫きつしたいと、気まぐれに思いついたわけではない。

　彼女は眠い目をこすりながら、枕まくら元もとの携帯電話を手に取った。アドレス帳に登録済みの番号をコールする。相手は出ない。それでも執しつ拗ようにつづける。

『…………何だよエリカ、こんな朝早くに。……緊急事態でも起きたのか？』

　彼女の愛人、草くさ薙なぎ護ご堂どうがようやく出てくれた。

　おそらく彼も目が覚めていないのだろう。声がかすれている。

いつもなら優ゆう雅がな朝の挨あい拶さつと電話越しのキスをプレゼントしてあげるところだが、今のエリカにその余裕はない。単たん刀とう直ちょく入にゅうに用件を切り出す。

「あのね、護堂……。今日は朝、迎えに来なくていいわ。わたし、学校には昼から行く。あなたの顔を目覚めとともに見られないのは残念だけど、そういうことだから……」

いつもの華か麗れいさを感じさせない小声で、エリカは訴えた。

どこか幼い印象の、朦もう朧ろうとした声。

朝は苦手なのだ。こんな状態の彼女に接する特権は、異性ではただひとり草薙護堂だけが所有している。だが、そのありがたみも理解できない朴ぼく念ねん仁じんは、不ふ機き嫌げんそうに言った。

『俺たちの学校には、フレックスタイムの制度はなかったはずだぞ』

「制度の問題じゃないの。今け朝さのわたしは、耐え難がたいほど眠いことが問題なの。これじゃあ、せっかくあなたが来ても出迎えてあげることができないわ。多分、ずっとベッドのなか……。あ、何なら午前中はずっとベッドでいっしょにいる……？」

朝に弱い彼女のために、いつも迎えに来るのが護堂の日課だ。

そんな彼を気き遣づかっての電話だというのに、なぜか険けんのある声が返ってきた。

『制度の問題は保留するとしてもだな、こんな朝早くに遠慮も約束もなしに電話をいきなりかけてくるのはどうかと思うんだが……。常識的に考えて、ありえない』

「わたしたちの間に遠慮とか常識なんていらないわ。だって、愛があるもの」

『いろいろ言いたいことはあるはずなんだけど、まだ頭が上う手まく働かない……。あとで学校で言ってやる。サボるなよ』

「じゃあ、わたしは今言いたいことを言うわね。愛してる。あと、おやすみなさい」

やさしくささやいてから、エリカは携帯電話を放り捨てた。

ふたたびベッドに横たわり、目を閉じる。安らかな眠りの国へと即座に帰き還かんできた。

草薙護堂はしみじみ思う。今朝の目覚めは最悪だったと。

朝の五時（！）にエリカからかかってきた電話で叩たたき起こされたせいだ。

中途半端に目が覚めたため、二度寝をする気も失うせた。

早寝早起きが信条の護堂は、いつも六時過ぎには起きる。だから、五時起きもたいして苦にはならない。だが普通の人間なら、あんな早朝に電話をかけてきたりはしないはずだ。

エリカにはもっと、常識的な人とのつきあい方を覚えてほしい。

憂ゆう鬱うつな気分でひとりごちる。

朝のホームルームがはじまる前の、城じよう楠なん学がく院いん一年五組。しかし、隣の席にエリカの姿はない。予告通りに遅刻するつもりなのだろう。

まったくあいつは……。ため息をつく護堂に、隣の女生徒が話しかけてきた。

「エリカの姿が見えませんね。今朝はごいっしょではなかったのですか？」

「眠いから遅刻するって連絡があった」

「あの女、またそんなことを言ったのですか！　子供の頃から本当に変わってない。いつも身勝手で、ルールを守ろうともしないで……」

憤ふん然ぜんとつぶやく彼女は、銀ぎん褐かつ色しよくの髪をポニーテールにまとめている。

リリアナ・クラニチャール。故郷のミラノを出て、わざわざ東と

う京きようにまで来てくれた大騎士である。『騎士としておそばに』と言われて、深く考えずに承しよう諾だくした結果だった。

　八月の終わりに来日したリリアナは、いつのまにか留学を決めていた。

　転入先は私立城楠学院、一年五組。つまり、このクラスである。初日のホームルームで彼女はいきなりやらかしてくれた。

　イタリアからの留学生として、完かん璧ぺきな日本語による自己紹介。

　窓まど際ぎわの席が自分の定位置だと教えられて、リリアナはぴくりと眉まゆをひそめた。

　そして、つかつかと護堂の席に歩み寄るなり宣言したのだ。

「まず最初に説明しておこう。わたし、リリアナ・クラニチャールにはいかなる時も寄り添い、運命を共にすると約束した人物がいる。この御お方かた、草薙護堂だ」

　ギリシア古典劇に出演する俳優のような、堂々たる声こわ音ねであった。

　こいつはいきなり何を言うのだ？

　そんな顔つきのクラスメイトたちに、リリアナは演説をつづける。彼の騎士とも言える自分は、常に彼の隣に控えるべきだと。

「わたしがすわるべき場所は、草薙護堂のそば以外はありえない。リリアナ・クラニチャールの使命を助けると思って、わたしのわがままをお許しいただきたい！」

　この呼びかけに、護堂は呆あきれた。

　いや、それは無理というものだ。諫いさめようとして、絶句した。

　いきなり周囲の生徒たちが席を立ち、リリアナの要求をかなえるために席替えをはじめたのだ。担任教師も文句を言わなかった。

　あのときのリリアナは、催さい眠みん術じゆつか、その類たぐい

の魔術を使っていたはずだ。

　こうして彼女は隣の席を確保し、ついでにクラスにも公認された。草薙護堂の右にすわるエリカ・ブランデッリ、左にすわるリリアナ・クラニチャール、欧おう州しゆうから来た美び貌ぼうの少女ふたりは彼を巡めぐって争う仲であると。

　護堂の世話を焼こうとするリリアナ。それをさりげなく邪じや魔ますするエリカ。

　その日から幾度も繰り返されることになった光景である。だが今日は、当事者のひとりがいない。すこしは心おだやかに過ごせそうだと、護堂は安あん堵どした。

「草薙護堂。お顔の色がすぐれませんが、寝不足ですか？」

「ちゃんと寝てはいたんだけど、変な時間に目が覚めたんだ。そのせいかもな」

　リリアナにいきなり訊かれたので、護堂は無難に答えておいた。エリカの名前を出さないのは武士の情なさけである。

「十分な睡眠こそが健康の基本です。ご自身の健康管理にも気をお遣つかいください」

　生き真ま面じ目めな口調で言われてしまった。たしかにその通りなので、反論の言葉もない。

　苦笑しながら護堂がうなずくと、銀髪の騎士はため息をついた。

「笑いごとではありません。王としてのご自覚に欠けるところはあなたの明らかな欠点です。……しかし、今日のところは仕方ありませんね。こんなこともあろうかと今朝淹いれたコーヒーがあります。これをお飲みください」

　と、カバンから魔ま法ほう瓶びんを取り出すリリアナ。

　なんて準備がいい。予想外の展開に、護堂はちょっと驚いた。

「砂糖とミルクはいくつお入れしましょう？」

「あ、いや。何にも入れなくていいよ。ブラックのままで」

「それは胃に悪いので、おすすめできない飲み方です。仕方ありませんね、おひとつずつにしておきましょう」

「あ、うん」

　差し出されたコーヒーを受け取ると、すかさずリリアナが言う。

「熱いので、お気をつけください。よろしければ、すこし冷ましましょうか？」

「そ、そこまでしてくれなくても……」

　コーヒーに息を吹きかけようと身を乗り出す彼女に、戸惑いながら答える。新たな騎士が馳はせ参じて以来、こんな至れり尽くせりの状態がつづいている。

　放任主義の家庭に育った護堂には、ここまで人の世話になった経験は幼少時でさえない。

　遠慮がちな返答に、リリアナは謹きん厳げんな表情で眉まゆをひそめた。

「これも騎士の務め。心置きなくご命じください。あなたはもっと人を使うことに慣れるべきなのです……何ということだ！　すぐにシャツを脱いでください。早く！」

「へ？　何でさ？」

　たじろぐ護堂に、リリアナが血相を変えて詰め寄る。

「ワイシャツにほつれがあります。すぐに縫ぬわなければいけません」

「そ、その程度なら放っておけばいいって」

「あなたにみっともない格好をさせていたら、わたしの恥になるんですッ」

　結局、相手の勢いに押された護堂は、ワイシャツを脱いで手渡してしまった。

　Ｔシャツ姿でいると、周囲から注そそがれる視線に気づいた。

　皆がこちらを注目している。ひそひそとささやき合いながら、くすくす笑いながら、忌いま々いましそうに舌打ちしながら。『すこしは自じ重ちよう（笑）しろよなー』『やだ、不ふ潔けつ～』『ちっ。草薙のヤツめ……死ねばいいのに』という感じだ。

　女に世話を焼かれてばかりのヒモでも眺ながめるような、生あたたかさ。

　自分は今、男としての尊そん厳げんを疑われている!?　その現状に、護堂はようやく思い至った。

　そして迎えた昼休み。

　護堂は屋上へと向かいながら、不安に襲われていた。

　このまま進めば、さらに恐るべき地じ雷らい原げんへ突入するような気がしてならない。だが、そうは言っても逃げる理由がないわけで……。

　屋上で迎えてくれたのは、まずリリアナだった。

「お待ちしておりました。……しかし、どうせ目的地は同じなのですから、わたしといっしょにいらっしゃればよかったではありませんか」

　と、文句がありそうに言う。

　彼女の不満そうな表情に、護堂はわずかに身をすくませた。

「わ、悪い。購買にパンを買いに行ってたんだ」

「そうでしたか。それは残念です。……せっかくふたりきりで移動できたはずなのに」

　適当な言い訳を口にすると、リリアナはぼそりとつぶやいた。

「え？」

「あ、いえ。騎士として。そう、わたしは騎士として、あなたの護衛をしなければいけませんからッ。それより、早く昼食にしましょ

う！」

　何やら口走りながら、リリアナはカバンからお弁当とおぼしき包みを取り出す。

　手作りのサンドイッチやフレッシュジュースなど、味も栄養も申し分ないはずのランチ。

　エリカが持参するアリアンナ謹きん製せいのお弁当に対抗して、彼女も毎日手料理を持ってくるようになったのだ。そう、いつもなら持ち寄った食料を皆で分かち合うのだが……。

　今日はエリカがいない。だが、他の面々はそろっていた。

　隣のクラスの万ま里り谷や祐ゆ理りと、わざわざ中等部からやってくる妹・草薙静しず花かだ。

　この顔ぶれでの昼食が、はたして無事に終わるだろうか？　漠ばく然ぜんとした不安に襲われていた護堂に、祐理がおずおずと問いかけてきた。

「エ、エリカさんはいらっしゃらないのですか？」

「ああ。学校に来るとは言ってたんだけど、まだ来てないんだよな」

「そう、ですか……」

　浮かない顔で祐理がつぶやき、沈黙する。護堂は落ち着かない気分になった。

　ナポリでの一件以来、彼女との仲が微妙にギクシャクしている。

　夏休みの前などはおたがい遠慮しながらも結構仲よくなっていた気がする。しかし、最近はずっとこんな感じだ。どこかよそよそしいのだ。

　せめてエリカがいれば、巧たくみな話術で場を明るくしてくれるのだが……。

　そろそろ何とかしよう。黙り込む祐理を見ながら、護堂は決意した。考えすぎかもしれないが、このまま何もしないでいるのはまず

いように思える。

「あんな身勝手な女のことなど、気にせずともいいでしょう。それよりも草薙護堂、先日ご忠告したのに、またそのようなものを入手されたのですか？」

　ここでリリアナが機嫌悪そうに口を挟はさんできた。

「え？　何のことだよ？」

「それです。その明らかに栄養のバランスが偏かたよったパンのことです」

　彼女の視線の先には、護堂が購買から抱えてきた焼きそばパンがあった。

　これは、購買部のパンでも特に人気の高い逸いつ品ぴんである。麺めんにからんだ特製ソースの甘あま辛からさが絶妙で、昼休みの開始から数分で売り切れてしまう。

　この人気商品を、今日は二個も買うことができた。タマゴサンドやコロッケサンドなどもいっしょに購入してあるが、希き少しよう性せいという点では遠く及ばない。

　だがミラノから来た騎士は、この日本独自の総そう菜ざいパンが気に入らないらしい。

「炭たん水すい化か物ぶつと炭水化物を組み合わせるなど、暴ぼう挙きよもいいところ。わたしの目が黒いうちは、そのように粗そ雑ざつな食事を許すわけにはいきません」

　と、リリアナは焼きそばパンを取り上げた。代わりに自作のサンドイッチを押しつける。

　トーストしたライ麦パンでローストビーフやレタス、トマト、キュウリ、アボカドなどを挟み、おそらく手作りのソースで味付けしてあるようだ。

「戦士たる者にふさわしいのは、このような食事です。さ、お召し上がりください」

「あ、ああ。じゃあ遠慮なく……」

　本音を言えば、今日はジャンクなソース味を堪たん能のうしたい気分だったのだが。

　そんな理由でリリアナの心づくしを断るのは、さすがに気が引ける。

　護堂はサンドイッチにかぶりついた。当然のことながら美う味まい。その辺のカフェで提供される味など凌りよう駕がしている。付け合わせに差し出されたピクルスも抜群だった。

　定番のキュウリだけでなく、ニンジンやブロッコリーなども添えられている。聞けば、これらもリリアナが手作りしたものだという。

　手て間ま暇ひまかけた、味も栄養も申し分のない昼食。

　しかし護堂は、つい未練がましく没ぼつ収しゆうされた焼きそばパンを眺めてしまった。

「なあ、そっちも返してもらっていいか？　腹にはまだ余裕があるし……」

　試ためしに頼んでみる。過か剰じような塩分やソースを投入したジャンクフードには、やはり抗こうしがたい魅力がある。元アスリートらしく節制している方だが、ときどき無性に欲しくなるのだ。

「い、いけません。せっかくあなたのためを思って没収したのですよ？」

　護堂の頼みに、なぜかリリアナがうろたえた。

「そ、そんな顔で懇こん願がんされても、駄目なものは駄目です。……ですがまあ、半分程度なら許可できなくもありません。わ、わたしと半分こいたしましょう。それがいい」

「リリアナさん。言ってることをいきなり変えないでください～」

　唐とう突とつに主張を曲げたリリアナに対して、静花が言った。

　今までは皮肉っぽい目で兄と銀髪の騎士のやりとりを眺めていたのだが……。

「子供にダダをこねられた甘々の母親みたいで、みっともないですからー」

　一応は敬語だが、静花の口調には明らかなトゲがふくまれている。それを気にしたのか、横にいた祐理がやんわりとたしなめた。

「静花さん、そういう言い方はいけませんよ。まあ、たしかにリリアナさんのなさりようは首しゆ尾び一いつ貫かんしていないとは思いますが……」

「へ、変な言いがかりはやめてもらおうか」

　なぜか照れながら、リリアナはコホンと咳せき払ばらいした。

「静花さん、わたしは兄上に対して適切な配慮をしただけです。そのうえで、なるべく彼のご意思に添うよう妥だ協きよう案あんを提示したのです。だから万里谷祐理、これは全て草薙護堂のためを思って取った行動。そういう意味では、全て首尾一貫しているはずだ」

　歳とし下したの静花に対しては丁てい寧ねい語ごで、祐理に対してはため口。

　いささか奇妙な言葉の使い分けをしながら、リリアナは主張した。

「それって要するに、リリアナさんはお兄ちゃんに大甘ってことですよねー？」

「わたしが草薙護堂に甘い？　バカな。わたしは彼に対して常に厳しく、高い水準の要求を突きつけています。今のおっしゃりようは事実誤認です」

　とか言いながら、彼女はナプキンを取り出す。

　それを急にこちらへ突き出してきたので、護堂はギョッとした。

「ああ、いけません。ソースで汚れてしまっている。これでは威い厳げんも権けん威いも台なしです。うん、これで大丈夫。あなたは意外と世話の焼ける方ですね」

　護堂の口元を拭ぬぐいながらの言葉であった。

　世話が焼けるとか言いながら、なぜかリリアナは満ち足りた顔つきだ。妙に充実している感じなのだ。そして、それを眺める祐理と静花はひどく冷たいまなざしだった。

「護堂さん——」

「お兄ちゃん、信じらんない。バカみたい。まるで赤ちゃんじゃない」

　これはもしや、さっき教室で起こった反応と同じ？　こちらの人格と尊厳を疑う目つきにさらされて、護堂は慄りつ然ぜんとした。

　ちなみに、リリアナと静花が初めて出会ったのは夏休み最終日である。

　イタリアでの身辺整理がようやく終わったと言って文ぶん京きよう区く根ね津づに現れたリリアナは、まっすぐ草薙家にやってきて挨あい拶さつしたのだ。

　このときは護堂と静花、そして祖父の一いち朗ろうが家にいた。

　魔術師だの騎士だのカンピオーネだのという情報は家族には伝えないようにと因いん果がをふくめておいたので、リリアナはそれらの単語を口にはしなかった。

　だが、しかし。

『草薙護堂のお世話をするために来た』とか『末永くおつきあいをお願いしたく』とか。

『わたしたちは一いち蓮れん托たく生しよう、一いつ心しん同どう体たいの関係』とか『一生、彼を守っていくつもりです』とかは言わなくてもいいセリフだったと、護堂は思う。

　あのとき祖父は「ほうほう、それはそれは」と微笑ほほえんでリリアナを歓かん待たいしていた。

　だが彼女の帰宅後、ぼそりと言ったものだ。

『ああいう娘はね、いろいろ思い詰めるところがあるから接し方には気をつけないといけないよ。活いかされるのも殺されるのも自分次第と言うかねえ……』

　何やら含がん蓄ちくのある示し唆さだった。そして静花はといえば――。

「夏休みのはじめにどっか行ったと思ったら……まさか、こんな綺き麗れいな人をつかまえているなんてね。エリカさんや万里谷さんだけじゃ飽あき足らずに三人目だなんて、お兄ちゃんってば本当におじいちゃんみたい！」

　このように、やたらと怒りっぽくなった。妹よ、兄に対して変な誤解をするな。そう訴えようとしたら、先にリリアナが反論した。

「静花さん。今のご発言にも誤解があります。わたしはエリカや万里谷祐理とちがい、兄上の愛人になろうなどと考えてはおりません。リリアナ・クラニチャールはあくまで草薙護堂を守り、人生を共にする騎士……のような存在なのです」

「あ、愛人!?」

「リリアナさん、変な言葉をお使いにならないでください！」

　現代の中高生が普通は使わない用語に静花がたじろぎ、祐理も口を挟む。

　だがリリアナは、泰たい然ぜんとした面おも持もちであった。

「ちがうのか、万里谷祐理？　あなたはそのために控えているのだと認識していたのだが？」

「そんなことはありません！　それこそ誤解です！」

「そうか。……では愛人志望でないというのなら、余計な口出しは無用だ。わたしは真剣に、任務として草薙護堂のおそばに控えている。邪じゃ魔まはしないでいてほしい」

　リリアナのきっぱりとした言葉に、祐理が目を白黒させている。

　そばで聞きながら、護堂は心配になった。

　本来は控えめな日本の巫み女こと、使命感に燃えるミラノの女騎士。こういう行きちがいが積み重なって、しこりとなってはいけない。早めに解決しておくべきか。

「なあリリアナ、堅苦しいことを言うなよ。万里谷は俺たちを心配していろいろ言ってくれるんだ。そういう文句をつけるもんじゃない」

　こういうことは、根深くなる前に解決しておくべきだ。

　野球選手時代にキャプテンを務めたおかげか、護堂はこの手の問題に慣れていた。チームメイト同士で無理に仲よくする必要はないが、陰かげにこもる確かく執しつはよくない。

　特に祐理のようなタイプが当事者の片割れの場合、やはり気を遣つかってあげたかった。

「護堂さん……」

「ごめんな、万里谷。リリアナも悪気があったわけじゃないのはわかるだろ？　今後は気をつけさせるから、軽く聞き流してくれよ」

　すこしうれしそうにこちらを見つめる祐理に、護堂は言った。

「は、はい。それはべつに、私の方はかまいません」

「そうか、よかった。——最近、俺のことでも怒らせちゃってたみたいで悪かったな。タイミングを見てあやまるつもりではいたんだけど、なかなかチャンスがなくて」

　と、穏やかに笑いかける。祐理との関係修復を図はかるチャンスだと思ったのだ。

　この巫み女こさんは結構口うるさいところもあるが、それも全てこちらを案じてのこと。感謝しなくては罰ばちが当たるというものだ。

　できれば彼女とは、ずっと仲よくやっていきたかった。

「私の方こそ、申し訳ありません。護堂さんがリリアナさんと最近仲よくされているのを見て、不思議と胸がムカムカしたり、暗い気持ちになったりしたもので……。自分でも態度を改めなくてはと思ってはいたのですが——」

「ああ、万里谷もそう思っていたんだ。たしかに最近冷たかったもんな」

「もう！　そんなふうに意地悪を言わないでくださいッ」

　祐理がぷいと顔を背そむけた。珍しく拗すねるような口ぶりだ。

　それを見て安心した護堂は、今度はリリアナの方へ向き直った。あとは彼女と軽く話をしてフォローすれば……。ところがこちらは、呆あきれたように眉まゆをひそめていた。

「さすがですね、草薙護堂……。ヘソを曲げていた万里谷祐理に今のお気遣い、なかなかの手並みです。さすがはその若さで色好みとして名を上げるだけはあります」

　まったく、こういうところだけマメなのだから……と、リリアナが愚ぐ痴ちる。

「な、何だよ気遣いって。変な言いがかりをつけるなよっ」

「体てい裁さいを取りつくろわずとも結構です。あなたがどれだけ女好きであろうと、それが災わざわいして身の破は滅めつを招こうと、わたしだけはあなたの味方ですから……。ええ、その程度の苦労は承知の上で馳はせ参さんじたのです」

　何だ、その誤解を受けそうな発言は？

　危険を感じた護堂はたしなめようとしたが、遅かった。

「リリアナさん。今の話、どういうことですか？　お兄ちゃんが色好みって話」

「言葉通りの意味です。もうお気づきのようですが、あなたの兄上は幾人もの女性と愛を語らい、恋を楽しむことにかけてはなかなかの腕前なのです」

「待てリリアナ、変な話を捏ねつ造ぞうすんじゃない！」

「お兄ちゃんは黙ってて。リリアナさん、つづきをどうぞ」

　護堂の抗議を遮さえぎって、静花がうながす。

　この質問に、リリアナはやや憂ゆう鬱うつそうに答えた。

「はい。実は、この悪あく癖へきがもとで兄上の身に凶きよう事じ

が降りかかるのではないかと、わたしも危き惧ぐしておりました。エリカのような悪女も身近にいることですし」

「そうですよねー。女遊びがもとで身を持ち崩す人はたくさんいますもんねー」

　こう相づちを打つ静花は、リリアナにも厳しい視線を向けている。『あなたも遊び相手のひとりでしょ』と言いたげな顔つきであった。

「ですが静花さん。そんな兄上を既き存そんの貞てい操そう観かん念ねんで糾きゆう弾だんすることはおやめください。古来、英雄色を好むと申します。草薙護堂のまわりが美び姫きばかりなのは、ある意味で彼の器量の証あかしでもあるのです。あまり目くじらを立てるべきではないでしょう」

「ふうん。そういう考え方もあるのか」

「ええ。つまるところ、女がもとで身をあやまるような事態を避ければいいのです。そしてそれは、おそばに控えるわたしの役目。わたしが必ず兄上をお守り申し上げてみせます。静花さんもお心を広くお持ちください」

「お兄ちゃん、よかったね。リリアナさんが女遊びにも理解があって」

　リリアナのさとすような語りに、静花が淡々と言う。そのやりとりを聞きながら、護堂は頭を抱えたくなった。

「じゃあ、お兄ちゃんは特に反省する必要はないと？」

「いえ、そうとは言い切れません。たとえ遊びの相手だとしても、エリカは避けるべきでしょう。万里谷祐理は……これからの振る舞い次第でしょうか。わたしとしては、もっと後あと腐くされのなさそうな女にすべきだと思いますが」

　と、リリアナが審査員のような視線を容よう姿し端たん麗れいな媛ひめ巫み女こに向ける。

　祐理は困惑した体ていでそれを受け止めた。

「おい、変な方に話が行ってないか！」

「いいえ。方向性としては正しいはずです。あなたの女遊びが改まらないのであれば、それを善用する手立てを講じる方がいい」

「リ、リリアナさん、今のおっしゃりようは少々言い過ぎではないかと……ッ」

　苦り切る護堂に冷静なリリアナ、さっきの態度から一転して弁護に回る祐理。

　そんな三人を静花が皮肉っぽく眺めている。

「万里谷さんはちょっとやさしい言葉をかけられただけでメロメロ。リリアナさんは浮気しても広い心で公認してくれちゃう。こんな人たちが奥さんだったら、おじいちゃんみたいに苦労しなくても済むよ。よかったね、お兄ちゃん」

　もう収しゆう拾しゆうがつかない。護堂が諦あきらめて、天を仰あおぎかけたとき。

「みなさん、ごきげんよう。にぎやかで楽しそうね。おはよう護堂、今朝は伝えられなかったけど、代わりに今、愛をこめて言うわ。あなたの顔を見られて、とてもうれしいって」

　マイペースな挨あい拶さつの声がかけられた。

　気品と優美さを振りまきながら、エリカが屋上に姿を現したのだ。学校指定の夏服も、彼女専用にあつらえたオーダーメイドの衣装に見えてしまう。

　表面的な美貌を凌りよう駕がする内側からの力が、この少女を輝かせているせいだ。

「ま、何が起きていたのか、顔を見れば大体察しがつくわね」

　一同を見回しながら、エリカは陰のない口調で旧友兼ライバルへ告げた。

「リリィ、わたしにもサンドイッチを頂ちよう戴だい。今日はまだカプチーノを飲んだだけだから、おなかがぺこぺこなの」

「し、食料なら他にもいろいろある。べつにわたしのでなくとも……」

「だって、あなたが作ったんでしょう？　いちばん美お味いしそうだわ。選ぶ余地があるときは、なるべく美味しいものか面白いものを選ぶのがわたしの主義なの。知ってるわよね？」

「あいかわらず身勝手なことを言う女だな！」

　憎まれ口を叩たたくリリアナだが『美味しそう』という誉ほめ言葉を聞き、まんざらでもなさそうな顔でサンドイッチの包みを差し出す。

　それを優美な貴婦人の微笑で受け取ったエリカは、祐理へと視線を転じた。

「よかったわね、祐理。護堂と仲直りできたのでしょう？　夏休みからずっとギクシャクしていて、つらそうだったものね。おめでとうと言わせてちょうだい」

「あ、はい。おかげさまで、どうにか……」

　エリカは何もしていないはずなのだが、気を呑のまれた祐理が礼を言う。

　優雅かつ社交的な弁べん舌ぜつは静花にも向けられた。

「静花さん、苛いら立だつのもわかるけれど、そろそろ勘かん弁べんしてちょうだい。二学期になってひさしぶりに護堂に会えたから、わたしたちはちょっと羽は目めを外はずしてしまったの。ほら、彼は八月中ずっと静花さんといっしょだったし」

「そ、そんなこと理由になったりは——」

「護堂にもね、言われていたの。残りの休みは妹の相手をするから、わたしともそんなに会えないって。悲しいけど家族のふれあいも大切でしょうから、我慢したわ。その代わりというわけではないけれど、すこし大目に見て。お願い」

　たしかに八月はあまりエリカと会っていない。魔術結社《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の用事で忙しいとかで、彼女はあちこち飛び回っていたらしいからだ。祐理とは今日まで疎そ遠えんだったし、リリアナが日本に来たのはつい最近。

　だから、護堂が頼んだせいで会わなかったのではないのだ

が……。

「そ、そうなの、お兄ちゃん？　そんな理由でずっとあたしにつきあってたんだ？」

「ええと、何て言うかだな」

「照れないで、護堂。すこしは妹をかまってあげなきゃって気にしてたじゃない」

「そうなんだ……。もう、お兄ちゃんったら妹離れできてないんだから。恥ずかしいよ」

　どこかうれしそうに静花が言って、ツンと顔を背そむける。今の言い訳のどこが効いたのかは不明だが、危機を脱することができたようだ。

　するとエリカは、輝くような笑顔で一同に宣言した。

「じゃあ、話がまとまったところで改めて昼食にしましょう。食事は楽しく、朗ほがらかにすべきだわ。ふさわしい話題を選ばないとね」

　この音おん頭どに合わせて、皆が屋上のコンクリートに腰を下ろす。

　エリカはごく自然な足取りで護堂の右みぎ脇わきにすべりこみ、すぐ隣となりにすわる。

　今までその位置にいた祐理は、深く考える様子もなく場所を譲ゆずってしまった。……彼女たちの力関係がうかがえる一幕に、護堂はひそかに唸うなった。

　やはりエリカはすさまじい。

　今の一連の振る舞いは、宮きゅう廷ていを掌しよう握あくする『女王』の手並みだろう。

（……護堂。わかってるでしょうけど、今ので貸しにプラス一よ。覚えておいて）

　隣にすわるエリカがぼそりとささやく。もちろん反論などできな

かった。

3

　そして放課後。草くさ薙なぎ家の地元である根ね津づの商店街を、エリカ・ブランデッリはリリアナ・クラニチャールと連れ立って歩いていた。

　授業が終わるなり、護ご堂どうは寄るところがあると言って帰ってしまった。

　祐ゆ理りも巫み女この務めがあるらしく、ひとりで帰ったらしい。

　エリカは羽虫のように寄ってくる男子生徒を邪じゃ険けんに追い払いながら帰き途とについたのだが、その途中、商店街でリリアナの姿を見つけたのだ。

「ごきげんよう、リリィ。これから護堂の家に行くの？　ちょうどいいわ。わたしもお邪じゃ魔ましようと思っていたところだから、いっしょに行きましょう」

　と、強引に同行を決めてしまった。

　リリアナは不ふ愉ゆ快かいそうに眉まゆをひそめたが、かまわずくっついて歩きだす。

「エリカ……あなたが草薙家に行っても、何の意味もないと思うのだが」

　幼なじみにしてライバルの女騎士は、露ろ骨こつに邪じゃ魔ま者もの扱いした。

「わたしは彼の家で夕食を作るつもりだ。料理もできないあなたが同行しても、役には立たないだろう。わたしの任務を邪魔しないでほしいのだが……」

　やはりそうか。エリカはひそかにうなずいた。

この娘には昔から、時間と手て間ま暇ひまの使い方をよく考えない悪あく癖へきがある。さて、たしなめてやるべきか、それとも苛いじめるネタにしてやるべきか。

しばらく考えてから、エリカは決断した。この際だから両方がいい。

「あら。邪魔なんかしないわよ、リリィ」

護堂がよく言うところの悪魔の笑顔で、くすりと微笑ほほえんでみせる。

「あなたがお料理に励はげんでいる間、わたしは護堂と楽しくおしゃべりしているわ。おじいさまや静しず花かさんも交まじえてね。将来の家族と親交を深めておくべきだし」

「な、何だって？」

「ふふっ、騎士として護堂に仕つかえているリリィには必要ない行為でしょうけど、わたしはちがうの。いずれは彼の妻となり、第一夫人として彼の軍団と王城を掌しよう握あくする身ですもの。親族の方々とも仲よくしなくてはいけないしね」

「つつ、妻!?　草薙護堂には、あなたをめとる意思などない！　我が主の将来を勝手に決めるのはやめてもらおうか！」

「まだ口で言ってないだけよ。彼とわたしの間では、もう既定事項だわ」

スーパーマーケットに入店するリリアナにつづきながら、エリカは言った。

東とう欧おう系の妖よう精せいめいた少女は、手慣れた様子で買い物かごを取る。

この娘は容姿に反して、昔から所帯じみている。料理に裁さい縫ほう、掃除など、家事なら何でもござれだ。対してエリカは、こういう店で買い物をした経験はほとんどない。

「ねえリリィ。ときどき、あなたのことが可哀かわいそうになるの。エリカ・ブランデッリよりも数カ月遅れて護堂の騎士になったわけだけど、その間にわたしと護堂の仲は決定的に深まってしまっ

たわ。今さら間に割って入れないくらいに」

「そ、そんなことはない！　わたしと主の関係はまだまだこれからのはずだ！」

「あら、そう？　でもね、たまに護堂が落ち着かない感じのときはない？　ちょっと困ったみたいに、もじもじして」

「────!?」

　リリアナの顔色が一瞬変わった。心当たりがあったようだ。まあ、いきなり草薙家に突入して手料理を作ったりするのだから当然だろう。

　人の善意は鷹おう揚ように受うけ容いれる護堂も、彼女の勢いには結構困惑しているのだ。

「わたしね、護堂と目が合えば彼が何を考えているのか、大体わかってしまうの。それだけの絆きずながわたしたちの間にはあるから……」

「ハッタリだ！　わ、わたしの心を乱そうとしているな、エリカ！」

　リリアナが語ご気き鋭するどく反論した。もちろん、その通りだ。

　護堂とアイコンタクトで意図を確認し合うときもあるが、それができない場面も多い。何と言っても、彼とは育った環境がちがいすぎる。

　やはり、カルチャーギャップから来る認識の差はバカにできない。

　が、エリカにはそれを正直に申告する気はなかった。

　こういうときはハッタリを貫つらぬき通す方がいい。ウソを本当に見せるのは、度胸と説得力である。だから優雅に、そして憐あわれむようにリリアナへ微笑みかけた。

「あなたがそう思いたいのなら思えばいいわ。そんな妄もう信しんにすがっている間に、わたしと護堂の仲はさらに深まっていくだけ

だから」

「くっ、きいたふうな口を——」

「それと、今日のところはお夕食を作るのはやめておいたら？」

　ちょうどリリアナが有機野菜のコーナーでキャベツの吟ぎん味みをはじめたので、さりげなく言い添える。今までのはただの娯ご楽らく、これは計算にもとづく助言だ。

「ひとり暮らしの家じゃないんだし、出張してまで手料理を振る舞う必要はないわよ」

「いや、でも、これは騎士としての大切な仕事で——」

「家で料理を作るのは、主婦かメイドの仕事よ。あなた、そのどちらでもないでしょう？　護堂のそばに来て舞い上がっているのはわかるけど、そろそろ落ち着きなさい。そんな親切の押し売り、草薙のおじいさまもきっと困ってらっしゃるわ。いいわね」

　エリカは世話が焼ける旧友に、きっぱりと言いふくめた。

　護堂もゴニョゴニョそこまでしなくてもとか言ったようだが、その程度では暴走したリリアナに通じない。彼女は恋に恋する、妄も う想そう気質の乙女おとめなのだ。

「どうしても料理の腕を振るいたいのなら、あなたの家で何か作って、お裾すそ分わけしたら？」

「…………ああ！」

　エリカの勧すすめに、リリアナが目を瞠みはった。

　この程度のことも思いつかなかったらしい。本当に世話が焼ける。

　だが、ずば抜けた能力の持ち主だ。この娘が護堂に仕えるというのなら、無用な波風を立てずに役立ってもらいたい。しっかりと手た綱づなを取っていかなくては。

「そういえば五、六年前、あなたがホームパーティーを開くとか言って、がんばってお料理したときがあったわよね」

「うぐっ！　エ、エリカ、あのときのことはいいじゃないか！」

「リリィったら五人しかゲストがいないのに、三〇人分はありそうな量をせっせと作っていて……。あなたって昔からそう。使わなくてもいいところで時間と労力を無む駄だに使うのよね。わたし、そのたびにあなたの面倒を結構見てきたつもりだけど、ちゃんと覚えてる？」

　ちなみに、このときもエリカがフォローした。

　急きゆう遽きよ二〇人を呼び集め、より広い会場も確保したのである。懐かしい思い出だ。リリアナはきっと忘れたがっているだろうが。

「くくっ……まあ、一応、記憶の片隅にはちゃんと残っている……」

「そう、よかったわ。これからも仲よくやっていきましょうね、リリィ。おたがいの力関係もきちんと把は握あくしながら」

　渋い表情で認めるリリアナへ、朗ほがらかに告げる。

　剣と魔術では互角だが、私生活ではおおむねエリカが主導権を握ってきたのだ。

　彼女の操そう縦じゆうを容よう易いにするためにも、折にふれてその記憶を呼び覚まさせてやろう。からかい甲が斐いのあるライバルの煩はん悶もんを愉たのしみながら、エリカは決意した。

　ふたりは何も買わないままスーパーを出て、草薙家を目指すことにした。

　だが三分も歩かないうちに、リリアナがぼそりと質問する。

「エリカ、さっきからこっちを見ている女はあなたの知り合いだろう？」

「どうかしら？　わたしの記憶にはない顔よ」

　彼女たちは目立つ。

　金髪と銀髪、しかも外国人の美少女が並んで歩いているのだか

ら、当たり前だ。

　だがスーパーで、そして今も一〇メートルほど後方でエリカとリリアナに視線を注いでいる女子高生の目つきは、非常に特徴的だった。

　相手を値ね踏ぶみしようとする目つき。普通人の視線とは異なる、荒事に慣れた目。

　あからさまに只ただ者ものではない。

　そして、それを隠すつもりもない者の視線だった。

「わたしは日本に来て間もない。だから、あなたの知り合いだと思ったんだがな」

「消去法ね。でも残念、わたしとは縁もゆかりもないはずの娘よ。——ま、向こうが勝手にわたしのことを知っている可能性は否定しないけど」

　向こうは姿を隠さず、己おのれをアピールしている。それに応こたえるのも悪くないだろう。

　エリカは足を止めて振り返った。リリアナもそれに倣ならう。

　夕暮れ時。商店街の雑ざつ踏とうのなか。

　人の流れに乗って、制服を着た女子高生が近づいてくる。

　長い黒髪はさらさらで美しく、顔立ちもそれに負けないほど整っている。体つきは細いが、着やせしているようにも見える。

　だが彼女の最も人目を惹ひくところは、肩にかけた細長い布袋だった。

　一メートルを越す棒状の物品が、この包みには収められているようだ。もしかすると刀剣の類たぐいかもしれない。昨夜襲ってきた『卍まんじ』の刀を思い出す。

　すれちがいざまに、黒髪の少女はニヤーッと笑いかけてきた。

　それはエリカのような優美さとは無縁の、遊び人めいた笑顔だっ

た。

　今日は顔見せだけ。言げん外がいにそう伝えながら、少女はゆっくりと通りすぎていった。

4

　芝しば公こう園えんの近くにある七なな雄お神じん社じやは、高台の上に建っている。

　そこへたどり着くためには、都内でも随ずい一いちの高さを誇る石段に挑いどまなければならない。

　体力のない万ま里り谷や祐ゆ理りにとっては、結構な苦く行ぎようである。本当は昇降用のエレベーターもあるのだが、故障中だった。しかし、真ま面じ目めな彼女は弱音を吐はいたりしない。

　息をぜいぜい切らしながら、どうにか登り切る。

　まだまだ暑い九月のはじめ、汗もたっぷりと流す羽目になる。

　そこでお務めの前に、祐理は社しや務む所しよのシャワーで身を清めるのだが――。

　熱いお湯に打たれながら、ふと自分の体が気になってしまった。

　透き通るように白い、象ぞう牙げ色いろのなめらかな肌。

　体つきは細く、肉づきも薄い方だ。手足などはたいした筋肉もないので、乱暴に扱われれば折れてしまいそうなほどにほっそりとしている。

　しかし、胸や腰回りなどの然しかるべき部分は、ほどほどにボリュームがある。



祐理はシャワーを止めて、バスルームを出た。洗面所の鏡に己おのれの姿が映うつっている。

媛ひめ巫み女こ仲間と共に水みず垢ご離りをしたり、同級生といっしょに着替えをしたときなど、なぜか賛さん辞じされたり、羨うらやましがられたりする。

もしかしたら、自分はそこそこ自慢のできる体型なのかもしれない。

体重の増減や肌荒れなどには歳とし相そう応おうに気を遣つかう祐理だが、己のスタイルを深く気にした経験はない。どんな体型を理想とすべきなのか、まったくピンとこないのだ。

できれば今よりも細くなりたい。その程度の願望があるくらいだ。

だが最近、それではまずいような気がしてきた。

このとき頭にちらつくのは、サルデーニャ島で目まの当あたりにしたルクレチア・ゾラの圧倒的な肉体美だ。そして、祐理とは厚みとメリハリが段ちがいのエリカのスタイル……。

「や、やっぱり、男の方かたはああいう体型の方が好ましいものなのかしら……？」

具体的に誰とは考えないようにしつつ、祐理はつぶやいた。

体つきだけではない。彼女たちのような積極性や物もの怖おじのなさも、自分には欠けている。しかもそのくせ、つい手厳しいことばかり言ってしまう……。

はあ。ため息が洩もれる。

彼女たちと比べたら、万里谷祐理は体つきも性格もずいぶんとスケールが小さい。

持って生まれたＤＮＡが白人女性とはちがうのだから、仕方がない。不ふ可か抗こう力りょくだ。しかし、そんな理屈では祐理の心はまったく浮き立ってこなかった。

もし、ああいう奔ほん放ぽうで大胆な女性が彼の好みだとしたら——。

「……一応リリアナさんには勝っているようだけど」

胸元を見下ろした祐理は唐突にそんなことを思いつき、煩はん悶もんした。

「わ、私ったら何てことを考えているの!?　いやらしいし、不ふ謹きん慎しんだわ！」

リリアナ・クラニチャールの妖よう精せいめいた肢し体たいは、スリムなモデル体型である。

それは逆を言えば、凹おう凸とつに乏とぼしいことも意味する。

自分の方が女性らしいスタイルという観点では勝っている気もする。だが、そんなことを比較したりして、あまりに卑いやしい心根ではないかと恥ずかしくなった。

神聖なお務めを前にして、こんなことではいけない。

冷たいシャワーで頭を冷やすため、祐理はあわててバスルームへ戻った。

どうにか平静を取り戻した祐理は、白びゃ衣くえと袴はかまの巫み女こ装しよう束ぞくを身にまとった。

社務所を出て、七雄神社の拝はい殿でんへ向かう。途中、この社に勤務する神職や他の巫女ともすれちがったので挨あい拶さつを交わした。

彼ら常勤の人員と媛ひめ巫み女こは、まったく立場が異なる。

媛巫女とは結局、正せい史し編へん纂さん委員会の指示で派は遣けんされる特殊能力者である。

派遣先は、各地の霊的な要所に限られる。指揮系統がまったくちがうため、社やしろの宮ぐう司じといえども媛巫女に指示は出せない。彼女たちは高貴な客分として敬うやまわれるようになる。

　現在、武む蔵さし野の――つまり関東地方には一〇名ほどの媛巫女が奉ほう職しよくしている。

　拝殿で彼女を待っていたのは、その仲間のひとりだった。

「……恵え那なさん？　どうなさったのですか、今日は？」

「や、祐理、ひさしぶり。ちょっと挨拶しとこうかなって思ってさ」

　清せい秋しゆう院いん恵那が、にへらと笑いかけてきた。

　美しい長めの黒髪、端正な顔立ちながら親しみやすい雰ふん囲い気きの少女だ。

　祐理にとっては見慣れた巫女装束ではなく、白いシャツとベージュ色のベスト、スカートを身につけている。どこかの高校の制服のようだ。

　そして、拝殿の床に横たえた細長い布袋。

　それを見た瞬間、祐理の心臓はどきりと高鳴った。あいかわらず、すさまじい神力だ。

　呪じゆ力りよくを遮しや断だんする特殊な織布で編あんだ布袋。しかし、祐理の霊感はそれでもあの神刀の気配を感じ取ってしまう。

「祐理って今さ、うわさに聞く王様のところでお妾めかけさんやってんでしょ？」

「お、おめ――!?」

　ぶしつけに訊きかれて、祐理は絶句した。

　王様とはおそらくカンピオーネのことだろう。恵那らしい大おお雑ざつ把ぱな言い方だった。

「ちがいます！　私、護ご堂どうさんとそんな破は廉れん恥ちな関係になどなっていません！」

「えーっ、そうなの？　だって、委員会と万里谷家が祐理を人ひと

身み御ご供くうに差し出したからって、みんな王様の愛人を諦あきらめることになったんでしょ？　聞いてたのとちがうなァ」

　そうだった。祐理は失言を後悔した。

　魔王カンピオーネに取り入り、甘い汁を吸おうとする勢力は多い。それを抑おさえ込むための口実として用意された方便なのだ。

「そ、その……対外的にはそういうことにしておこうと、馨かおるさんや甘あま粕かすさんがおっしゃるので、私も協力していたんです。……この件はどうかご内密に——」

「ああ。あの人たちがしそうな悪だくみだねー。いいよ、まかせて」

　恵那はあっけらかんと言った。

　さすが当とう代だい随ずい一いちの媛巫女だと、祐理は安あん堵どした。これでも清秋院恵那は、武蔵野どころか全国でも最高の資質を持つ逸いつ材ざいなのだ。

「じゃ、祐理に代わって恵那がお妾さんになるわけか。責任重大だなーこりゃ」

「…………はい？」

　いきなりの発言に、祐理は硬直した。彼女は今、何と？

「実は今度、恵那も王様のお妾さんにされちゃうんだ。我が清秋院家の当主がぜひにと申し出て、それをおじいちゃまが面白がって推すい挙きよしちゃったんだな。ほら知ってるでしょ、おじいちゃま？　だから委員会の人たちも文句を言えないってわけ」

「お、おじい——あの御ご老ろう公こうが、ですか!?」

　正史編纂委員会ですら顔色をうかがう、古老たちのひとり。

　媛巫女のなかでも清秋院恵那を特に見込んで、秘伝の神刀を授けたという——。祐理も会ったことはない。おそらく、直じかに対面した媛巫女は恵那だけのはずだ。

「そう。祐理にも誰にも負けないようにお仕えしろって言われてた

から、悪いなーとは思ってたんだよね。でも、祐理がお妾さんじゃないのはよかった。やっぱり仲間同士でいがみ合いたくないし」

「駄目です！　そんなこと絶対に認めません！」

　にこにこと能天気な言いぐさに、つい叫んでしまった。

　その剣幕に『太た刀ちの媛巫女』の異名を持つ少女が、きょとんと目を瞠みはる。

「ん、どうしてさ？　何か悪いことってあんのかな？」

「そ、それは……」

「おじいちゃまの命令である以上、恵那も委員会の人たちも逆らえないし、どうにもならないよ。それに祐理はお妾さんじゃないんでしょ？　なら何がダメ——って、なるほど」

　いきなり恵那がニヤニヤと人の悪い表情になった。

　差しゆう恥ちと興奮で真っ赤になった祐理の顔を、わざとらしく見つめる。

「ほうほう。恥じらうところが可愛かわいいなー。あー、そっか。なるほどねェ。祐理ってば王様に、本気で恋とかしちゃってるの？」

「——!?　していません！　変な言いがかりをつけないでください！」

「ふふふ。真まっ赤かになって否定して、ほんと可愛かわいいな。そうならそうと最初に言ってよ。恵那だって鬼じゃないんだから、ちゃんと考えるって」

　ほくそ笑みながら、清秋院恵那は突とつ拍ぴよう子しのないことを言いだした。

「よし。じゃあね、役割分担しよう。……Ｈとか子供を産むとか、『女』としての仕事は祐理にまかせる。あとは全部、恵那がやってあげるよ。それでいいよね？」

「えっ!?　恵那さん、一体何を……？」

戸惑う祐理に、媛巫女仲間はまぶしいほどの笑顔を見せる。

「言ったでしょ、誰にも負けるなって言われたんだ。祐理は友達だからいいけど、あとふたりいるお妾さんは恵那が追い払うよ。ふたりで王様にお仕えしよう」

床に置いていた布袋を、恵那は拾い上げた。

その口を開けて、中身を抜き出す。黒くろ漆うるしの鞘さやに収めた三尺三寸五分の豪刀。この神具から放たれる呪力の強烈さに、祐理はめまいを感じてしまった。

「とりあえずは金髪の方——エリカ何とかさんから片づけようか。結構腕が立つよね、あの子。ま、こっちには強い相棒もいることだし、多分負けないと思うけどさ」

天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ。

日本最高峰の神刀である。その秘めた力は計はかり知れない。

草薙護堂とエリカ・ブランデッリを巻き込む媛巫女たちの騒動は、ここから本格的にはじまるのであった。

第２章　学園は今日も騒がしく

1

　湯ゆ島しまの蔵くら前まえ橋ばし通りに近い一角に、玉たま浦うら神じん社じやは位置している。

　その境けい内だいで、清せい秋しゆう院いん恵え那なは来客を出迎えた。

　七なな雄お神社を訪ねてから数時間が経過し、すでに夜になっていた。

「ご無ぶ沙さ汰たしていましたね、恵那さん。おひさしぶりです。……それはそうと、お社やしろが必要でしたら、どこか手頃なところを見つくろいますが」

　来客のひとり、甘あま粕かす冬とう馬まが言った。

　正せい史し編へん纂さん委員会の使い走りを務める、安物の背広を着た二〇代後半の青年だ。

　しかし、断じて下したっ端ぱではない。曲くせ者ものぞろいの委員会のなかでも、沙さ耶やの宮みや家の直じき参さんとして関東各地に出没する男だ。

　彼と向き合う恵那は、制服から巫み女こ装しよう束ぞくに着替えていた。

　白びやく衣えと緋ひ袴ばかま。手に持つ細長い布袋には、神秘の力を秘めた大だい刀とうが隠されている。

「このお社でいいよ、べつに。人の多いところはめんどくさいし、ここの方が天あまの叢むら雲くもも居心地がいいだろうし。気にしないで」

「そういうことでしたら、ご随ずい意いに。事務処理はしときますので、好きにお使いください」

　甘粕の言葉に、恵那は適当にうなずいた。

　ここの管理者とは話をつけて、社の鍵かぎも手に入れているのだ。

　言われるまでもなく勝手に使うつもりだった。この社の祭さい神じんは稲荷いなり、日本武尊ヤマトタケルノミコト、弟オト橘タチバナ媛ノヒメ。どれも彼女と相棒にとっては相性抜群の神格ばかり。当座のホームグラウンドとしては申し分ない。

「祐理さんと清秋院のご当主から、話はうかがいました。うん、何と言いますか——」

「余計な真ま似ねはするなって？」

　にたりと笑って恵那が先回りすると、甘粕は微苦笑を見せた。

「そこまで露ろ骨こつには言えませんがね。近い感想は正直、委員会としてはありますよ。でも今回は、それを表には出せませんからねェ……」

「おじいちゃまが口を出してきちゃったもんね。うん、同情したげる」

「ありがとうございます。ところで恵那さん、すでにエリカ・ブランデッリとリリアナ・クラニチャールとは接触されていますね？」

　さすがに情報が早い。とぼけるつもりはないので、恵那はすぐに認めた。

「まあね。エリカさんの方は昨日、寝込みを襲おうかなーって色気も出したんだけど」

「見合わせましたか。いい判断です。《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の大騎士が自宅に張った結界、並の固さではないはずで

すしね。できれば彼女への手出しを控えていただけると、さらに助かるところではありますが」

「何でさ？　せっかく日本に王様が生まれたのに、外国の女の子がお妾めかけさんやってんだよ？　追い払った方がいいんじゃない？」

　恵那の発言に、甘粕はやれやれと言わんばかりに首を振った。

「鎖さ国こくの時代ならともかく、現代ではそうも言ってられません。《赤銅黒十字》も《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》も、非常に強力な魔術結社なのですよ。有う象ぞう無む象ぞうの結社が送り込む人員なら、まさにおっしゃる通りなのですが……」

「あの子たちだと、厄やつ介かい？」

「はい。敵国の外交使節に手を出すようなものですからね。最悪、国と国同士の抗こう争そうを巻き起こす火種となってしまいます」

　なるほどと恵那は感心した。行動方針を改めるつもりはなかったが。

　政治も外交も彼女には煩はん雑ざつすぎた。勝負はシンプルな方が楽しい。刀と刀を打ち合わせて実力を競う。それで十分ではないか。

「うーん、ごめんね。あの子たちを追い返せって実家のばあちゃんたちに頼まれたから、やめるわけにはいかないんだよねー。それに、あの子との勝負はすごく楽しめそうだし。ま、そういうことでいいかな？」

　とりあえず、先にあやまっておこう。

　恵那の軽薄な謝罪に甘粕は肩をすくめ、もうひとりの客がフッと微笑んだ。

「実家のおばあさま——清秋院当主殿の指示か。そして、君の後こう見けんである御ご老ろう公こうも認めたわけだ。地上の権勢争いに興味を持たれるなんて、あの御方らしくもない」

　今までずっと沈黙していた、三人目の発言だった。

　沙さ耶やの宮みや馨かおる。正せい史し編へん纂さん委員会・東京分室の室長にして、関東を掌しよう握あくする委員会の重じゅう鎮ちんである。

「妙だね。どうして御老公はそんな口出しをされたんだろう？」

「さあ？　恵那が知るわけないよ。でも、おじいちゃまは豪快そうに見えて、意外と腹黒いからねー。悪だくみとかしてるかもよ？」

　けらけら笑いながら答えると、馨に苦笑された。

　沙耶宮馨は秀しゅう麗れいな美び貌ぼうの持ち主で、どこか浮うき世よ離ばなれした雰ふん囲い気きをまとう。ほっそりとした体つきには、無む駄だな脂し肪ぼうなど一片もないだろう。

「あいかわらずだね、恵那は。全然気にしてないわけだ。実に君らしいよ！」

　すこし気取った言い回し。さわやかで魅み惑わく的な笑顔。

　この繊せん細さいかつ中性的な容姿なら、男と名乗っても少女マンガに登場しそうな現実感のない美少年だと認知されるはずだ。

　だが、沙耶宮馨は恵那と同性だった。彼女もまた武むさし蔵野のの媛ひめ巫み女このひとりなのだ。

　清秋院恵那との実りのない面談を終えて、玉たま浦うら神社を辞じ去きよする。

　甘粕冬馬の隣を歩くのは、上司である沙耶宮馨だ。

　沙耶宮家の次期当主にして、正史編纂委員会の次期総そう帥すい候補でもある。

　高校三年生というのは、べつにいい。能力的には申し分のない人材なので、とやかく言うつもりはない。問題はやはり素そ行こう面めんだ。たとえば男だん装そう癖へき。

　彼女は現在、男子用の制服を着用している。

　ワイシャツにネクタイ、ブレザーとパンツ。ブリーツスカートではなく男子用のズボンなのだ。とはいえスカートなどはかれたら、猛烈な違和感を覚えてしまうだろう。

「それにしても、古老の方々は何で草くさ薙なぎ護ご堂どうの愛人を増やす気になったのでしょうね？」

　異性とも同性とも思えない上司に、甘粕は疑問を振ってみた。

「当面は祐理さんひとりにまかせるって馨さんの方針に今まで文句を言わなかったのに、妙な感じです。いたずらに混乱を招くだけですから、やめてほしいんですけどねェ」

「あちらにはあちらの思おも惑わくが、ちゃんとあるんだろうけどね」

　馨が考え深げに言う。こういうときの彼女は、あやういほど繊細そうな美少年、ないし美少女に見える。本性を知る甘粕でさえそうなのだから、他の人間は尚なお更さらだろう。

「ただカンピオーネのまわりに愛人を増やすのなら、それこそ立候補してきた家の娘を全員投入して、酒しゅ池ち肉にく林りんをやってもいいところだろう？　でも、老人方が送り込んできたのは恵那ひとりだけだ。そこが肝きもなんだと思うよ」

「清秋院家の圧力に、古老の方々が折れたという線は——」

　にやりと笑いながら、甘粕は言った。

　そんなことはありえない。そう確信しながらも、敢あえて真逆の推論を口にする。

　馨も同意見なのだろう。やはり、人の悪い笑みを返してきた。



「あるわけがない。清秋院は沙耶宮と同じ四家のひとつだけど、古老たち——特に御老公を相手にして、そんなわがままは通せないよ」

「むしろ清秋院は利用されている側ですか。……猫の首に鈴でもつける気ですかね？」

「あるいは、獅し子しの身中に虫を仕込むとかね」

　老人たちの目的は、おそらく草薙護堂に対して何らかのアクションを起こすこと。

　意見の一致を見た主しゅ従じゅうは、車までの道のりを黙もく然ぜんと歩きつづけた。

2

　万ま里り谷や祐ゆ理りの朝は早い。七時前には起きて、台所に向かう。

　彼女の家は共働きである。父はとある外食チェーンに勤務し（とはいっても経営者は父の父、つまり祐理の祖父なのだが）、母は料理教室の講師や講演をしている。

　祐理は忙しい母親に代わって、朝食を作るのが日課だった。

　ついでに自分と、妹のひかりのためにお弁当も用意する。

　だが今け朝さはもうひとつ余計に弁当を作り、いつもより早く家を出た。

　万里谷家は虎とらノ門もんのマンションで暮らしている。実は本宅が埼さい玉たま県にあるのだが、通勤や通学に便利ということでこちらを利用しているのだ。

　千ち代よ田だ線に乗り、根ね津づ駅で下車するのが毎日の通学路。

　しかし、今日は銀ぎん座ざ線を利用して末すえ広ひろ町ちよう駅で降りた。清せい秋しゆう院いん恵え那なと会うためだ。湯ゆ島しまの小さな神社を基地にすると教えられたので、差し入れがてら様子を見に来たのだが——。

　顔を赤くし、うつむきながら、祐理は神社へ駆け込んだ。

　鍵かぎの開いていた拝はい殿でんを開けると、寝袋にくるまった恵那が床で横になっていた。

「え……恵那さん……！」

　まさか、神社に泊まり込んでいるとは。

　何て罰ばち当あたりなと思いつつも、祐理は小声で呼びかけた。

「や、祐理。おはよー。……いい匂においがするなー、もしかしてお弁当？」

　ぱちりと目を開けて、恵那が言う。寝起きとは思えない明めい晰せきな声だった。

「は、はい。恵那さんの分も持ってきましたので、もしよろしければ——」

「よろしいに決まってるよー。やっぱり祐理は気が利きくねェ。嫁にしたい子ナンバーワンだね……えらいえらい。誉ほめてつかわす」

　武むさし蔵の野ずい随一いちの媛ひめ巫み女こは、おどけながら寝袋を開けた。

　タンクトップにショーツだけというあられもない姿で、身を起こす。恵那は着やせするタイプなので、スリムな割に体型のメリハリがすごい。

　薄布越しにはっきり見て取れるスタイルのみごとさに、祐理は気き後おくれしてしまった。

「と、ところで、恵那さんはもう起きていらしたのですか？」

「ばっちり寝てたよ。祐理の足音が聞こえたから起きただけ。向こ

うからバタバタバタ～ッてね。すごく焦あせってたみたいだけど、どうかしたのん？」

　誰が来たのか足音だけで判別し、即座に覚かく醒せいする。

　恵那の人間離れした聴ちよう力りよくに驚きよう嘆たんしながら、祐理は小声で言った。

「あ、あの……このお社やしろのまわりは、へ、変な建物が多いと言いますか……」

「ああ、ごめんごめん。恵那も来たときは驚いたんだけど、Ｈなホテルばかりでビックリだよね！　東とう京きようってすごいよねー！　でもコンビニとか近くて便利でいいよ。熊くまも出ないし」

　ここ半年ほど、恵那は深しん山ざんの霊れい場じようで修行に励はげんでいたらしい。

　ワイルドな生活を偲しのばせる笑い声に、祐理は赤面した。ひっそりとした住宅街。だが、そのなかに建つ神社の周囲には、数軒の特徴的なホテルが立ち並んでいたのだ。

「でもさ、祐理だってこういうところに来るんじゃないの？」

「そんなことありません！　変なことをおっしゃらないでくださいッ！」

　暴言に強く反はん駁ばくする。

　しかし、恵那はきょとんとした顔で不思議そうに訊たずねてきた。

「どうしてさ？　何だかんだ言って、祐理は王様のお妾めかけさんやってんでしょう？　だったらＨのひとつやふたつ、ああいう場所でさ——」

「しません！　私と護ご堂どうさんはただのお友達ですッ。清い間柄です！」

「えーっ。でもライバルのエリカとかリリアナとかって子たち、外人でしょう？　……よくわかんないけど、そういうの進んでそう

じゃない？」

「す、進んで――!?」

　寝袋を片づけた媛ひめ巫み女こたちは、社のなかで正座して向かい合う。

　恵那は差し出された弁当を受け取り、早速ふたを開けて中身をたいらげにかかった。

「うん、あいかわらず祐理はお料理がうまいよね。このところ木の実とか山菜ばっかり食べてたから、格別だなァ……」

　どうやら五ご穀こく断だちをしていたらしい。恵那の修行は、普通の媛巫女よりも過か酷こくだ。

　剣技を磨き、肉体を苛いじめ抜き、心を空くうの境きよう地ちに誘いざなう。彼女の体を心配しつつも、祐理はこのところの懸けん案あんを相談せずにはいられなかった。

「……その、護堂さん――いえ殿方というものはやはり、積極的で肉感的な女性を好むものなのでしょうか？」

「うーん、恵那も詳しいわけじゃないけど、そうなんじゃないかなー」

　白飯を幸せそうに味わいながら、恵那は言った。

　話し方こそざっくばらんだが、彼女の正座する姿勢はひどく美しい。食べ方も行儀よく、端たん然ぜんとしている。実はお嬢さまという点では、祐理を凌りよう駕がする少女なのだ。

「昨日ね、せっかく東とう京きように戻ってきたことだし、ちょっと観光に行ったんだ。秋あき葉は原ばら」

「ああ、外国の方なんかがよくいらしてますものね」

「でさ、大通りの電気屋さんを一通り見たあとで、ビルのなかにあるお店とかを回ったんだけど……すごかった」

「すごいのですか？」

「うん。小さなお店がたくさんあって、あやしくて面白いんだ。で、結構あるんだよねー。何て言うか、お店全部が桃色っていうか、肌色みたいなところが」

「全部が肌色……!?」

「涅ね槃はんとか極ごく楽らく浄じよう土どとかって、ああいう感じなのかもしれない。右を向いても左を向いても前も後ろも、裸の絵でいっぱいなんだ。ほら、インドとかにある男女交歓ミトウナ像？　あんな感じで、男の人と女の人の裸の絵がバーッて一面に！」

「きっと信心深い方が集められたのでしょうね……」

　東京にもそんな異国の聖せい域いきめいた場所があったとは。

　祐理は自みずからの無知を恥じながら決意した。いずれ勉強のために訪れてみよう。

「そうかも。で、恵那は悟さとったんだ。男の子は多分こういうのが好きなんだろうなって」

　おかずの煮に染しめを噛かみしめながら、恵那が決めつけた。

　どこか遠い目をしている。よほどセンセーショナルな光景だったようだ。

「草くさ薙なぎさんも男の子なら同じだと思う。やっぱり最後は裸がいいはずだよ、絶対！」

「言い過ぎです！　ときどきあやしいですけど、基本的に護堂さんはまじめな方です！」

「どうかなー。祐理があんまり潔けつ癖ぺきだから、言い出せないだけかもよ」

　媛巫女仲間の指摘に、祐理はハッとした。

　サルデーニャ島ではルクレチア・ゾラに男性心理をさんざん講義してもらった。

　だが、自分はその深遠な理論をちっとも理解できなかった。もし

かしたら、そこにこそ草薙護堂との交流をスムーズに行う鍵かぎがあるのかもしれない。

「そもそも祐理はさ、このお弁当を恵那のために持ってきてくれたけど、草薙さんの分はちゃんとあるの？　そういう余分な荷物があるようには見えないんだけどさ？」

「あ、はい。恵那さんの分だけです」

「ダメじゃん、それ！　やっぱり動物と仲よくなる最短ルートは餌え付づけだって！」

「で、ですが、理由がありません。わたしがあの人のお弁当を作る理由がそもそも……」

「そんなの考えなくてもいいよ。まずは行動しなきゃ！　じゃあね、祐理はまず草薙さんにもっと強引に迫ること。私を抱いてとか言ったり、夜よ這ばいをかけたりとかさ」

「夜這い!?　待ってください、どうしてそんな話になるのですか!?」

「それぐらいやった方が恋心をアピールできると思うよ。ガンガンいかなきゃ」

「よ、夜這い……するのは男性の方です！　そもそも現代では違法です！」

「うるさいなァ。とにかく、それぐらいのアクションが祐理には必要ってことだよ。恵那も協力するからさ。とりあえず、今日中に草薙さんとの仲を進展させよう。いいね？」

　あまりに無理のある提案に、祐理の頭は真っ白になってしまった。

「そ、そんなことできません！　私には無理です！」

城じよう楠なん学がく院いんの体育は、男女べつべつに行われる。

男子と女子に分かれて、二組合同で授業を受ける。護堂の五組は六組といっしょだ。

まだまだ日差しは厳しく、気温も高い。残暑どころか、夏本番の天気である。なので、体育の授業ではプールの活用がつづいていた。

そしてこの日も、五・六組の体育では『水泳』のカリキュラムが実施されている。

ただし、女子限定で。男子は蒸し暑い体育館で『体操』。

熱っぽい空気がムンムンこもり、男子生徒の熱気や体臭が渦うず巻まくなかで、マット運動や器械体操に励はげんでいた。

「まちがっているとは思わないか、諸君！」

力強く訴える声がある。

発言者は名な波なみ。『オレ、実は巫み女こさん萌もえなんだ』など問題発言が多い男だ。

しかし、意外にもリーダーシップに富とんでいる。集団で何かを行う場面では、たいてい中心的な役割をこなす。……ろくでもない中心ではあったが。

「格差社会――今一度、この言葉の意味を考えよう、同志諸君！我々が今置かれているのは煉れん獄ごくだ。男ばかりが群れ集まり、潤うるおいも彩いろどりも存在しない、灰色の荒野にも似た世界だ。この状況を甘かん受じゆしていいのか!?　――否いな。断じて否だ！」

体育館を揺るがせとばかりに、名波が轟とどろき叫んでいる。

ちなみに、担当の体育教師は不在である。数分前、平均台から落ちて骨折したらしい生徒に付き添って、病院へ行った。今は自習の最中なのだ。

「もしこの世が荒野であるならば、唯ゆい一いつ、野望を実行に移

す者のみが荒野を制することができる！　閉ざされた楽園への扉を、オレたちは自みずからの手でこじ開けるべきなのだ！」

「名波……おまえが言いたいのは、つまりアレか？」

　問いかけたのは、高たか木ぎだった。剣道部所属で、背が高く体格もいい武ぶ闘とう派はである。

　ただし妙に流されやすく、変な影響を受けやすい男だ。

「オレたちは今こそ、天国ハライソへ向かうべきだと」

「うむ。現在、この学園で最も天国に近い場所、それはプールだ。我が五組と六組の女子による合同授業が行われている、プールなのだ！　オレたちが立ち入るのを禁止された、秘密の花園——三〇名以上の女子が水と戯たわむれ、百ゆ合りの花を咲かせている聖域なのだ！」

「リスクが大きすぎるな……」

　クールな声が水を差す。反そり町まちがシニカルに冷笑していた。

　自じ称しよう『二次元に一〇八人の妹を持つ男』。訳のわからない自称だが、何かを極きわめた者のみが持つ凄すごみをまとっている。とりあえず只ただ者ものではない。

「オレたち男子は、五・六組合計で三六名。これだけの人数が同時に動き、プールの女子たちを鑑かん賞しようする。たしかに魅み惑わく的なアイデアではあるが、授業終了まで残り四〇分。この短時間ではろくな準備もできない。想おもいだけでは、何も達成できやしない……」

　かつかつと、名波が発言者に歩み寄っていく。

　ガッ！　名波の拳こぶしが唸うなった。頬ほおを打たれた反町が、加害者を険しくにらみつける。

「名波、てめぇ——！」

「見み損そこなったぞ、反町。おまえがそんなつまらない男になるとはな……」

　殴なぐられた方は怒りを、殴った方は哀あわれみを瞳ひとみに宿して向かい合う。

「あのときのおまえは、そんなことを言い訳にしたりはしなかった。おまえは至し難なんを極めるミッションにも敢かん然ぜんと立ち向かい、勝利を収めた勇者だった。だというのに、今のおまえときたらチキンもいいところじゃないか」

「何のことを言ってんだ、この野郎！」

「二カ月前だ。『聖☆妹学園』の発売を翌日に控えたあの日、おまえは四人の妹を攻略しなければならない『おにいちゃんといっしょ♪』と七人の妹を嫁にする『いもはれ！』の全エンディングを見るために戦っていた。三八度の高熱と下げ痢りで苦しみながらな……」

「ちっ。いやなことを覚えていやがる——」

　昔語りをする名波から、反町が目をそむける。

「あのときオレは言った。『もうよせ、積みゲにしたっていいじゃないか？　その体では限界だ』ってな。だが、おまえはこう答えた……」

「ああ。『オレは一〇八人の妹を持つ男。一度攻略をはじめた妹を放置するような、ダメなお兄ちゃんじゃねえ』とな。あの日のうちにオレは全てのエンディングを制せい覇はし、翌日は『聖☆妹学園』に全力を傾けた……」

　ふたりの男の目に、焔ほのおがともる。

　熱い魂たましいを持つ者同士が通じ合ったときにのみ宿る、心の焔だった。

「どうやらオレは、あのときのガッツを忘れていたらしい。ありがとよ、思い出させてくれて……。こいつはその礼だ！」

「グハッ！」

「ふん。どうだ、思い知ったか？」

　今度は、反町が殴る側になった。しかし、名波は吹っ飛ばされな

がら笑っていた。

　ようやく目が覚めたか、このバカめ。そう言いたげな会心の笑顔。今、ふたりの間では拳こそが言葉のはずだった。

「いいパンチだ。おまえの闘とう志しがこもった、熱い拳だな……」

「うるせえ。オレはもう迷わない。いっしょに戦おう」

　反町が手を伸ばし、名波の手を掴つかむ。そのまま引っぱり起こす。ふたりの男が衝しよう突とつの末に心を結んだ感動的な光景。しかし、そろそろうんざりしてきた護堂は、醒さめた声で言った。

「――なあ、おまえら」

　寸劇を演じていたふたりが、敵意に満ちたまなざしを向けてくる。

　だが護堂は、気け圧おされることもなくつづけた。

「いろいろ言いたいことはあるけど、とりあえずのぞきはやめとけ。犯罪みたいなもんだろ」

　ドスッ（体操用のマットが放り投げられる音）。

「こ、こら、おまえら何を――」

　バスン（そのマットが護堂の上に覆おおいかぶさる音）。

　ドスンドスンドスン（男子生徒有志Ａ、Ｂ、Ｃがマットの上に飛び乗る音）。

「ぐはっ！　ち、ちょっと待て、俺を押しつぶす気か⁉」

　分厚くて異い臭しゆうのするマットの下敷きになりながら、護堂は訴えた。

　男子生徒三名の重みものしかかってくるので、かなり苦しい。かろうじて首から上をマットから出して、視界と酸素を確保した。

「ちっ、生きてるか。まあ殺やっちまうのもまずいしな」

「何ならオレがヤツにとどめを――」

「落ち着け。やるなら足のつかないところで慎しん重ちようにやるべきだ」

　名波、高木、反町の三バカが物ぶつ騒そうな話をしている。

　彼らをふくめた周囲の男子たちに、護堂は声こわ高だかに問いかけた。

「おまえらな、俺に恨うらみでもあるのかよ!?　何だってこんな真ま似ねをするんだ！」

「何でだと――」

　じろりと冷たいまなざしで名波が見下ろしてくる。

「なら訊きこう。草薙、貴様はなぜ『のぞきはやめろ』などと言える？」

「学校のプールを隠れてのぞくなんて、犯罪スレスレの行為だぞ。第一、そんなの女子に悪いだろ。当たり前のことを訊くなよ……」

　みんな、早く正気になれ――と念じながら、護堂は正論を語った。一時の気の迷いで悪行に手を染めたら、あとあと後悔にさいなまれるはず。だが、これを聞いた五・六組の男子生徒たちの多くは荒すさんだ目つきになり、悔くやしそうに泣きだす者まで現れた。

「この偽ぎ善ぜん者しやめ……」

「ちくしょう。自分だけ女に困ってないからって、上から目線かよ……」

「安あん西ざい先生、オレたちは水着の女子が見たいです！」

「みんな、落ち着け。みんなの怒りと悲しみとともに、オレが話をしよう。この同時攻略が当たり前な潜在的ハーレム野郎に男の純情を教えてやる！」

　名波が一同を制して、ふたたび護堂を見下ろす。

「なあ草薙、オレは水着の女子が好きだ。愛していると言っても過

言ではない」

「いや、俺も個人の趣味にあれこれ言う気はないぞ」

「いいから黙って聞け。オレは水着の女子が好きだ。……そうだな、五組と六組の女子ではやはり、一年有数のナイスバディを誇る荒あら川かわさんが見どころだろう。小柄な宮みや間まさんのツルペタ具合もマニアックな訴そ求きゅう力りよくがあってグッとくるにちがいない。メガネ女子の澤さわさんにも水着ゆえに醸かもし出される意外な魅力が期待できる。永なが里さとさんのポッチャリ感も、スレンダーな娘にはない独特の癒いやしオーラになるはずだ。だが、しかしな――」

　名波がグッと拳を握りしめた。ろくでもない持論を力説するつもりなのだろう。

「それほど魅力的な彼女たちでさえ、アイドルグループで言えばフロントではないのだ。いわば二軍、控えのメンバーだ。じゃあ誰が一軍なんだろうな？」

「…………さ、さあ。誰だろうな」

　何となく相手の心情が推測できてきたが、護堂は敢あえてとぼけた。

「至し高こうのゴージャスボディのエリカさま。結構なスリーサイズをお持ちではないかと疑惑のある万ま里り谷やさん。さらにはレオタードを着せたい女子ナンバーワンとなったリリアナさんの妖よう精せいボディ……。それらの名花を独り占めにしている貴様には、オレたちの血のたぎりは一生わかるまい。いや、わかられてたまるか！」

「提案！　草薙はこのまま体育用具室に押し込んで監禁しよう！」

「そいつは名案だな。よし、誰か鍵かぎを探してくるんだ！」

「これで草薙の野郎も年ねん貢ぐの納め時だぜ、ヒャーッハハーッ！」

　名波の熱弁に呼こ応おうして、あちこちで男子たちの奇声がほとばしる。

かくして、体育用具室に草薙護堂を閉じ込めた五・六組の男子連合は、乙女おとめたちの戯たわむれる水の楽園に向けて進軍を開始したのである。

4

「考えてみれば、いい機会かもしれないな。エリカ、せっかくだから泳ぎではどちらが上かをたしかめてみないか？」

「水泳勝負？　リリィと？　遠慮しとくわ」

五・六組合同の体育の授業。

プールサイドでは、ふたりの少女がこんな会話を交わしていた。

もちろんリリアナ・クラニチャールとエリカ・ブランデッリである。城じよう楠なん学がく院いんの指定水着は、背中が大だい胆たんに開いたハイレグカットのものだ。

それを最もみごとに着こなしているのは、彼女たちだった。

平凡な学校のプールを、海外のリゾート地のように錯さつ覚かくさせてしまう美少女たち。金と銀の髪の毛が風になびき、衆しゆう目もくを集める。

「ふふん。勝負の前から逃げるとは、あなたらしくもない」

「だって、泳ぎでは昔からリリィにかなわないもの。運動神経や体力はほとんど同じなのにそうなるのは……やっぱり、水の抵抗がちがうせいかしら？」

「な、何ぃ!?」

リリアナの水着姿は実に可か憐れんだった。

ただ華きや奢しやなだけでは、こうはならない。東とう欧おう系けいの白人少女だけが持ちうる、抱きしめたら折れてしまいそうな危うさが彼女にはある。細いくせにすばらくしく長い手足。白鳥を

思わせる華奢なうなじ。妖よう精せいにも似た、整った顔立ち。

それら全すべてが相あいまって生まれる可憐さ、はかなさがリリアナを輝かせていた。

しかし——。

芸術的な美しさでは、東欧の妖精に分ぶがあるかもしれない。

だが、水着を引き立てる健康美、肉感的な魅力という点では、やはりエリカに軍配があがった。サルデーニャ島で小麦色に焼いた肌。大ぶりの果実にも似た胸のふくらみ。見る者のため息を誘いざなう腰のくびれ。絶妙な曲線を描く腰からおしりへのライン——。

そして、それらをごく自然にさらけ出す優ゆう雅がさ。

わざとらしくアピールなどしない。代わりに、好奇の目から隠そうともしない。

ただそこにいるだけで光り輝く存在。

それがエリカという少女だった。彼女の立ち姿が、祐ゆ理りにはひどくまぶしかった。

「くっ……！　たしかにあなたは、昔からわたしよりも発育がよかった！　だが、だからといって、わたしのスタイルが平坦に近いなどと侮ぶ辱じよくを受けるいわれはない！」

「あら。わたし、リリィの方が体重が軽いからって意味で言ったのよ？」

いたずらっぽくエリカが笑っている。

それに激げつ昂こうして、リリアナが食ってかかっている。

このふたり、かなり仲がいいように思えるのだが、すくなくとも銀髪の少女は否定している。ともあれ、リリアナはエリカに気き後おくれを感じたりはしないようだ。

そこが祐理にはうらやましい。そういえば、恵え那なにも言われてしまった。

『よくわかんないけど、そういうの進んでそうじゃない？』と。

　たしかに奔ほん放ぽうなエリカだけでなく、堅かた物ぶつそうなリリアナまで強烈な自己主張と積極性を発揮している。やはり欧米の人間はちがう。どれだけ清純可憐に見えようと、草食と肉食で言えばやはり肉食、欲しい物は戦って奪い取る精神が徹てつ底ていしている。

　彼女たちと比べれば、やはり自分は……。ここで祐理は愕がく然ぜんとした。

（私は今、何を考えていたの!?　これじゃあまるで、エリカさんやリリアナさんと護ご堂どうさんを巡って争っているみたい！　いいえ、そんなことはないはず。私と護堂さんはただのお友達、普通よりもちょっと親密で、人様にはあまり言えない事情を抱えているだけで――）

　そう考える祐理の胸に、不思議な感情がこみ上げてくる。

　そこには胸が締めつけられるような苦しさ、おなかの底が冷たくなるような不安、どこか甘あま酸ずっぱい期待、それらが雑多に入り交じっていた。

　はあ。ため息をつく。すると、横合いから声をかけられた。

「どうしたの、万ま里り谷やさん？　体調悪いのなら、先生を呼ぼうか？」

　六組でもいちばん小柄な女子、宮みや間まさんだった。

　身長は一四五センチ、そのうえ童顔だ。よく小学生にまちがわれるらしい。

「あ、いえ。そういうわけではないのですが」

　あわててエリカたちから視線を外して、祐理はぎこちなく微笑ほほえんだ。

　いかにも日本人的な愛あい想そ笑わらいだ。それを見た宮間さんは、暗い顔つきになった。

「うん、まあ訊きかなくても察しはつくけどね。……でも、万里谷

さんがそういうことを気にするのは反則だと思う。下しも々じもの悩みをわかってないっていうか、ぜいたくすぎる悩みっていうか……とにかく、ずるすぎるよ！」

「み、宮間さん？　一体、何をおっしゃりたいのでしょう？」

　憤ふん慨がいした口調でなじられて、祐理はたじろいだ。

　そこに口を挟はさんできたのは六組のクラス委員、澤さわさんだった。

「万里谷さん……宮間はこう言いたいのよ。『パンがなければ、お菓子を食べればいい？　ふざけんな！』ってね。『こんないいモノ持ってるくせに文句を言うのかよ！』って」

　と、赤いフレームのメガネを逆光で輝かせる。

　澤さんは細身で、学年トップの成績を誇る才女だった。演劇部でも一年生にして主演をまかされるほどらしい。その彼女がいきなりつかみかかってきた。

　祐理の胸を、水着と肩にかけたバスタオル越しにグイとわしづかみにする！



「き、きゃあ!?」

「ほら。何、この美乳？　手のひらをかぶせたら、微妙に手からこぼれ落ちるくらいの小さすぎず大きすぎない至高のバランス。絶妙な張り具合とやわらかさ、美しいシルエット……。これはある意味、究きゆう極きよくよ。大味な外国産には求められない、和わ牛ぎゆう霜しも降ふり肉だけが持つ極上の味わいよ？　すてきだわ万里谷さん、あたしといっしょに演劇部で全国の頂点を――」

「や、やめてください、澤さんっ。手、手を放して――！」

「ダメだよ澤さん、落ち着いて！　そんなふうにしたら、万里谷さんが！」

　数十秒後。祐理と澤さんはべつの意味でハァハァ息を荒らげながら、平静を取り戻した。

　そんなふたりを宮間さんが心配そうに見つめている。

「ご、ごめんなさい。あたし、いい素材を見ると、つい部に誘いたくなるの……」

「い、いえ。私こそ取り乱して申し訳ありません……」

「澤さんってときどきケダモノになるよね。あと、万里谷さんはべつに人のことをうらやましく思う必要ないと思うの。……それを気にするなら、わたしなんて」

　宮間さんが、自みずからの体型を見下ろしながらつぶやいた。

　下手をすると小学校高学年の方が発育よさそうな、幼い肢し体たいである。

　ハイレグカットの水着が、とにかく似合わない。

　むしろ幼児用の水着の方が――。そこまで考えて、祐理は自じ責せきの念にさいなまれた。

　自分は今、何と失礼な感想を抱いてしまったのだろう。そして横では、澤さんが慰なぐさめの言葉を口にしていた。

「ねえ宮間。世の中には五組の反そり町まちみたいに『だが、それがいい』って輩やからもいるらしいし、希望を捨てるべきではないと思うけど」

「冗談じゃないよ！　ただでさえ変な男子が多いのに、そのうえ反町くんじゃ……！」

　祐理は急に、心のざわつきを覚えた。

　聞き覚えのある五組男子の名前を聞いた途端だ。この感じ——霊視の力が教えてくれる天てん啓けいに似ていないか？　周囲を見回してみる。

　プールのなか。幾人かの女子が対岸を目指して泳いでいる。

　プールサイド。当然こちらも女子ばかり。監督する体育教師も女性だ。

　きょろきょろしながら歩いていると、エリカとリリアナがこちらへ寄ってきた。

「どうかした、祐理？　様子がおかしいけど、もしかして何か視みえたの？」

「危険の兆ちよう候こうでも感じ取ったのか？　わたしの勘かんには何もひっかからないが、感覚の鋭さならあなたの方が遥はるかに上だ。よければ調べてみるが」

「あ、いえ。たいしたことではない気もするのですが……」

　祐理はかんたんに事情を説明することにした。

　するとエリカがぐるりと周囲を見回して——ある一点に視線を固定した。

「ねえリリィ。このプール近辺で何か悪さをしようとした場合だけど、不用意な輩はまずあそこを利用するんじゃないかしら。すこし調べてみない？」

　城楠学院のプールは、校舎と面した側に松の木が植えられている。

一列になって生い茂る木々が、この方向からの視線をシャットアウトするのだ。

だが、そうしたブラインドのない方向にも建物がある。来月に取り壊される予定らしい木造の旧校舎。もう一〇年近くも使用されておらず、封ふう鎖さされている――。

エリカの視線は、そちらへ注がれていた。

「ふん。わたしに調べさせるつもりのくせに、誘うふりをするな。図々しい」

つぶやきざま、リリアナが目をつぶる。

彼女の閉ざした双眼から呪じゅ力りょくが少量ほとばしり、旧校舎へ飛んでいくのを祐理は感じた。

五感の一部を飛ばす呪じゅ術じゅつのようだ。おそらく視覚を『出張』させたのだ。

「当たりだ。ろくでもないことをやっている連中がいる」

「まあ、それはいけない人たちね。……どうやっておしおきをしてあげましょうか？」

リリアナが報告すると、エリカが意地悪げにほくそ笑む。

この年代では欧おう州しゅうのツートップとも言える騎士にして魔術師たちが戦闘態勢に入るのを、祐理は不安とともに見守った。

5

「くそッ！　あいつら、好き勝手にやりやがって！」

体育用具室で、草くさ薙なぎ護ご堂どうはようやくマットの山から脱出を果たした。

ここに護堂を押し込んだ五・六組の男子合同軍は用具室のドアにしっかり鍵かぎをかけ、体操用のマットをある限り引っぱり出して

囚しゅう人じんの上に積み上げていったのだ。

「あとは、どうやってここから出るかだけど……」

　護堂は閉ざされた用具室のドアをにらみつけた。

　鍵かぎはかけられている。これを破るような道具も技術もない。となると、体当たりでもして力ずくで破るしかないわけだが。

　学校の施設を破壊するのはよくない。他に手があれば、そちらを選ぶべきだ。

　穏おん当とうな結論に護堂はたどり着いた。だが——。

　そう考えた直後、あるイメージが頭に思い浮かんできた。サルデーニャ島でさんざん見せつけられた、エリカの大だい胆たんな水着姿。結構見てしまった祐ゆ理りの可か憐れんな水着姿。リリアナの水着は見ていないが、きっとよく似合っているだろう。

　……あのバカどもが、それを不ぶ躾しつけに鑑かん賞しようしようと企たくらんでいる。

　なぜだか胸がむかついてきた。そして思い直す。

　うん、非常時には非常時にふさわしい対策がある。こんなときにまで無難な行動を取る必要はない。それはむしろ怠たい慢まんの言い訳だ。というわけで、護堂は強行突破を決心した。

　用具室内を片づけ、ドアに向かって突進する準備を済ませた、その直後。

「草薙くん、無事？　待ってて、今助けるよ」

　聞き覚えのある声。同じ組の男子、小お野ののものだ。

　ガチャガチャ。

　鍵をはずす音が聞こえ、ドアが開く。クリクリとした癖くせっ毛けの、小柄な男子が姿を見せた。

「ごめん。あいつらが隠した鍵を見つけるのに手間取っちゃって」

「とんでもない、助かったよ。ありがとう」

　礼を言う護堂に、はにかむように小野は笑った。

「さすがに、クラスの全員が三バカにつきあうわけないからね。ぼくもふくめて三分の一くらいはこっちに残っているよ」

「……三分の二もあいつらにつきあってる事実が、逆にすごいけどな」

　小野にうながされて、呆あきれながらも用具室の外に出る。護堂は怒りにまかせて決意した。一刻も早くプールへ急行し、連中の計画を阻そ止ししてやる！

「草薙くん、もしかしてあいつらの邪じゃ魔まをするつもり？」

「もちろんだ。このまま黙って見逃すわけにもいかないだろ」

「そっか。じゃあ、助けた代わりってことでもないんだけど、これを頼めないかな？」

　小野が恥ずかしそうに、そっと小型のデジカメを差し出してくる。

　そういえばこいつ、写真部だったはず。それで学校にこんなものを持参しているのかと思いながら、護堂は首をかしげた。

「ええと、俺に何をしろと？」

「実はね、ぼくメガネがとても好きなんだ。愛していると言ってもいい。だからプールの方へ行くついでに、ちょっと水着の澤さわさんを撮とってくれるとうれしいかなって。やっぱりのぞきはよくないけど、女子を助けるついでならアレだろう……？」

「…………」

「…………」

　雨に濡ぬれた子犬のような目で見上げる小野に、くるりと背を向ける。

「じゃあ、俺はもう行くよ。ありがとうな、助けてくれて！」

「く、草薙くん！　カメラも持っていってよ！」

追いすがる哀あい願がんの言葉を置き去りにして、護堂はプールへと駆け出した。

これは、護堂があとで聞いた話である。

名な波なみの指し揮きする五・六組の男子たちは、取り壊される予定の木造旧校舎に侵入したのだという。参加したメンバーは一五名前後。

不ふ埒らちな男子たちは封ふう鎖さされた扉を破り、旧校舎に押し入った。

その三階に陣取り、何の遮しや蔽へいもないポジションから水辺で戯たわむれる女子たちを凝ぎよう視しすべく、心の準備を整えた。そして、身を小さくして旧校舎の窓からプールをのぞく。

しかし、プールまでは結構な距離があった。

彼らの視力では女子たちの全身像程度しか眺めることができなかった。

アルファベットで表記するところのＢ□Ｗ□Ｈを鮮明に視認したいと望む彼らは、一計を案じる。高木がスポーツ観戦用のオペラグラスをカバンに入れていたと思い出し、教室へ激走。彼が戻ってくるまでの一〇分間、他の面々はひたすら待つ。

空調のない旧校舎の暑さ、埃ほこりっぽさ、集まった男どもの汗とか体臭とか。

そんな劣れつ悪あくな環境に耐えているところへ、ついに待望のアイテムが到着した。いざ天国ハライソへの扉を開かん——と歓喜に打ち震えたときだったらしい。

旧校舎が、轟ごう音おんとともに崩壊していったのは。

護堂は懸けん命めいに走り、ようやくプールの近くまでやってきた。

どこだ？　あのバカどもは、どこで女子たちを鑑賞しようとしている？　きょろきょろと周囲を見回し、見当をつけようとする。その瞬間に、すさまじい音が聞こえてきた。

そちらを見て、護堂は驚きよう嘆たんした。

木造の旧校舎が、ガラガラと轟音を立てて崩れ去るところだったからだ。

壁や柱、床、さまざまな建材が粉々にひび割れ、砕け散り、形を失っていく。

歳さい月げつの重みに耐えかねて、一気に風化が進んだ――。

そう言われても、納得しそうな光景だった。古い木材がバキバキと音を立てて倒壊。そして、そのなかから人の悲鳴も聞こえてきた。

「な、なんじゃこりゃーッ!?」だの「床が、床が――!?」だの。

「オレのことはいい、ハードディスクにいる妹たちのことを頼む！」だの「オレ、やっぱり巫み女こさん萌もえだったんだあッ！」だの。

見れば、崩壊した旧校舎のガレキのなかに五・六組の男子たちが埋もれていた。

おそらく連中は、ここからのぞきを行っていたのだろう。

だが今、彼らは突然の崩壊劇に愕がく然ぜんとし、そして苦痛に喘あえいでいた。

皆たっぷりと痛い目に遭あったようだ。打ち身、擦すり傷、もしかしたら骨折などもあるかもしれない。自じ業ごう自じ得とくと言えばそれまでだが、少々不ふ憫びんでもある。

こんな超自然現象、普通に起きるはずはない。

護堂はすぐに、旧校舎の近くにたたずむ少女たちに気がついた。

いつもの三人。エリカはフフンと苦しむ男どもを侮ぶ蔑べつする表情、リリアナは正義の裁さばきを喰くらわせてやったと言いたげ

な表情だった。

　ひとり祐理だけが苦しむ男子軍団を心配そうに眺めている。

　三人とも指定水着の上にウインドブレーカーやバスタオルを羽織っていた。

「やっぱり、おまえらか……。これ、誰の仕し業わざだよ？」

「わたし。ちょっと『粉ふん砕さい』の魔術を使ってみただけよ。あの校舎、よっぽど古くなってたみたいね。普通はあの程度の呪じゅ力りよくでかけたんじゃ、こうも綺き麗れいに壊れないはずなのに」

　駆け寄る護堂の問いに、エリカが平然と答える。

　物を造ったり変形させる魔術が得意だとは聞いていたが、こんな切り札まであったとは。

「事情は大体察しがついてるけど、ちょっとやりすぎじゃないか？」

「仕方ないわ。予想以上に術が効きいちゃったんだから。……それに、いいんじゃない？　罪の報むくいがこの程度で済んだとも言えるんだし。わたしの考えていた報復は、もっと複雑で趣向に富とんだ内容だったのよ」

　ふふんと悪魔の笑いを見せるエリカ。

　いつもの人をもてあそぶ悪魔ではない。冷れい酷こくで残忍そうなという意味での悪魔だった。

「その通りです、草薙護堂。罪には報いを、汚れには清めを。このわたしも騎士として、淫みだらな企くわだてに正義の鉄てつ槌ついを落とすつもりでした。このような形で決着がつき、残念です」

　こちらは謹きん厳げんな表情のリリアナ。

　凛り々りしく気け高だかい信念に裏打ちされた、騎士の顔つきだ。

　エリカもリリアナもそれぞれ正反対の表情だが、同方向の決意を

胸に秘めていたらしい。

　このふたり、なんだかんだで気が合うのではと思いながら、護堂は祐理を見つめた。彼女だけが騎士たちとちがい、何か言いたげな顔をしていたのだ。

「どうしたんだ、万里谷？　俺に何か話でも？」

「あ、いえ。ちょっとだけ、気になったことがありまして……」

　この少女が恥じらう姿は、とても可憐だった。

　大きなバスタオルで上半身を覆おおい隠した祐理は、なぜか護堂の視線を避けるようにして身をすくませ、顔を背そむけている。

「もしかして護堂さんも、あの方たちと同じようにみ、水着の私たちを見てみたいと思っていらっしゃるのでしょうか——ッ？」

「……え？」

　予想外の質問。まさか、祐理にこんなことを訊きかれるとは。

　護堂はあわてて、うなじまで真っ赤になった媛ひめ巫み女この水着から視線を逸らした。

「いいや。お、俺はべつに、そういうのはあまり興味がないし……」

　当あたり障さわりのないことを護堂は言った。

　語ご尾びが小声なのは、自みずからを偽いつわっている自覚があるせいかもしれない。

　しかし、仕方ないではないか。不本意ながらも周囲に美しい少女が多い環境下で暮らしているのだ。滅めつ多たなことは言うものではない。

「そ、そうですか……。そうですよね……。おうかがいしてよかったです。護堂さんはそのような劣れつ情じょうを催もよおされたりしないと信じていました——！」

　祐理はあからさまに、ほっとした表情になった。

　よかった。どうやら失敗しなかったようだと、護堂が安あん堵どした直後。

「何をバカなこと訊いているの、祐理？　そんなの質問するまでもないでしょう？」

「エリカの発言に同調するのは不本意だが、たしかにその通りだ。万里谷祐理、我が主あるじは色好みとして名高い王のなかの王。体てい裁さいを取りつくろった回答が真実とは限らない」

　ふたりの騎士が訳知り顔で口を挟はさんできた。

「わたし、護堂と過ごしたシチリアでの熱い夜を忘れてないわよ。あのときの護堂ったら、わたしの一いつ糸しまとわぬ姿を凝視ぎようしして、本当に荒々しくて。女の子の素肌に興味がないなんて言わせないわ」

　ぎょっとする護堂を無視してエリカが言う。するとリリアナが苦い顔をした。

「うわさに聞くザンパリーニの館やかたでの情事か。その場にわたしがいれば、エリカの好きにはさせなかったものを……。草薙護堂、これから男性としての欲求を持てあましたときは、わたしをお呼びくださいっ。き、騎士として必ずお役に立ってみせます……！」

「あ、あのときは込み入った事情があっただろ⁉　リリアナまで何言ってんだよ⁉」

　怒ど鳴なりつけてから、護堂はすぐに祐理の方を見た。せっかくごまかしたのに、こんな話題になっては意味がない。はたして彼女はショックを受けた表情だった。

「そ、そんな……。護堂さんもやっぱり殿との方がた、恵那さんの言う通りだったのですね……。も、申し訳ありません。私、心の整理がつかないもので――失礼しますッ」

　と早口で挨あい拶さつして、祐理はさっと走り去っていく。

　護堂は呼び止める言葉もないまま、呆ぼう然ぜんとそれを見送った。

6

「祐ゆ理りったら逃げちゃったねー。ねえ甘あま粕かすさん、今どんな話をしてたのかな？」

「私に聞こえるわけないでしょう。そんなこと訊きかないでくださいよ」

　高層マンション七階の一室。

　たまたま空あいていたこの部屋に、甘粕冬とう馬まの差さ配はいで潜もぐり込むことができた。

　ここの窓からは、私立城じよう楠なん学がく院いんの校庭と校舎が見渡せる。清せい秋しゆう院いん恵え那なと甘粕は、それぞれの望遠鏡をのぞき込んでいた。

「だってさ、甘粕さんって読どく唇しん術じゆつとかできそうじゃない？　一応忍者でしょ？」

「その呼ばれ方、パチものっぽくて好きじゃないんですよねェ……。せめて隠おん密みつとお呼びください。あと読唇術はできませんが、今のやりとりを類るい推すいすることは可能です」

　窓まど際ぎわに並んですわりこみ、望遠鏡をかまえるふたり。

　彼らのスコープには、プールと旧校舎の残ざん骸がい、草くさ薙なぎ護ご堂どうと少女たちがばっちり映っていた。

　ちょうど今、護堂の前から万ま里り谷や祐理が走り去るところだった。

「ほんと？　やるなー、さすが馨かおるさんの懐ふところ刀がたな」

「なに、適切な知識と想像力さえあれば、初歩的な推理に過ぎませんよ。おそらくこうでしょう。『バカ！　あんたなんて好きでも何でもないんだからっ。大っきらい……！』みたいなセリフを祐理さ

んが言ったんですよ、多分」

「え？　あの祐理に限って、それはないんじゃないかなー」

「だと面白いなーという、私の願望も込みですが」

　実りのない会話のキャッチボールに飽あきた恵那は、望遠鏡から目を離す。この監視で半日を浪費したが、おかげで何をすればいいのか呑のみ込めてきた。

「——うん。よし、決めた」

「何をです？　実家にでも帰られますか？」

「まさか。決めたのはね、祐理ひとりにはまかせておけないってこと。これからは恵那があの子をサポートしてあげちゃおう。その方が楽しそうだし」

「何だか、ものすごい厄やつ介かい事ごとになりそうな予感がしますねェ……」

　甘粕の失礼なつぶやきを聞き流しながら、恵那はニヤリと笑った。

　老ろう朽きゆう化かしていたとはいえ、木造建築の校舎を一瞬で吹き飛ばした魔術。

　あの術だけでも、エリカ・ブランデッリの手並みは類推できる。今日、本当に監視した甲か斐いがあったのは、あれだ。——やはりいい。勝負を挑いどむに足たる大敵だ。

　恵那は大きくうなずくと、床に転がしていた鋼はがねの相棒へと手を伸ばした。

　この刀もきっと満足する戦いになるはず。そして、勝利するのは自分たちだ。

第３章　太刀の媛巫女

1

　風が吹きすさび、雨も激しく降り注いでいる。

　九月の上旬ともなれば、台風が上陸しても不思議ではない。

　だが、この風雨はちがう。関東地方への熱帯性低気圧の接近を告げるニュースは、ここ数日報告されてはいないはずだった。

「うん、王様とは今日これから会うつもり。恵え那なは誰とでも仲よくできる方だからね、きっと上う手まくいくよ。ああ、もちろんあっちも進めてるよ」

　城じよう楠なん学がく院いん高等部。その校庭の一角。

　巫み女こ装しよう束ぞくをまとった清せい秋しゆう院いん恵え那ながいるのは、校舎のすぐそばだった。

　傘かさはさしていないので、とっくにずぶ濡ぬれだ。

　話し相手である携帯電話も同様だったが、こちらには防水機能がある。もっとも、今回も電源はオフのままなのだが――。

「エリカさんっていうんだけど、すごく手て強ごわそうだよ。燃えてきた。でも、たしかに邪じや魔まが入ったらイヤなんだよね。こういうのは、やっぱり一対一がいいし。うん。ありがとう、おじいちゃま。頼りにしてるから、そのときはお願いね」

　太た刀ちの媛ひめ巫み女こ。その名の由来となった相棒を、恵那は地面に突き立てていた。

天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎ。刃渡り三尺三寸五分の大だい刀とう。

刀身はシンプルな一枚鍛きたえ。反そりはなく、まっすぐな形状の直刀である。刃の輝きは、蒼そう穹きゆうよりこぼれ落ちる陽光にも似ていた。

王者の武具と呼ぶにふさわしい、威い風ふう堂どう々どうたる大刀であった。

「大丈夫。ちょうど今、仕込みも進めてたところ。どこに仕掛けるか悩んだけど、学校にした。ここなら広いし、エリカさんも毎日来るしね。うん、じゃあまた」

携帯電話をしまうと、恵那は天叢雲劍の刃に右手の人差し指を押し当てた。

皮ひ膚ふが裂け、血の滴しずくが吹き出てくる。

恵那はその指先を、目の前にある校舎の壁に押しつけた。

「八や雲くも立つ、出いずも雲や八え重垣がき、妻つま籠ごみに——八重垣作る、その八重垣を……。よし」

いにしえの歌を口ずさむ。

その句と同じ文を、校舎の壁に書きつけていく。

媛巫女の血と、神刀の金きん気きを以もつて記しるされた呪まが歌うた。紅あかき血で淋りん漓りと壁に躍る詩句は、雨に洗い流されて消えていく。

今はこれでいい。この仕込みが役に立つのはまだ先の話だ。

不安なのは、勘かんのいい祐理に気づかれることだが……それを避けるためにも、しばらくあの娘とはこの学校で会おう。

そうすれば、神刀の気配を校内で感じても祐理は不自然に思わないはず。

算さん段だんしながら、恵那は校舎の壁伝いに歩く。さらに七カ所の壁に対して同じ作業を済ませた頃、ようやく雨がやんだ。風も

ずいぶんと穏やかになってきた。

　まだ早朝六時。部活の朝練もはじまっていない時間だ。

「よし、今朝はここまで。王様のところへ挨あい拶さつしに行く前に、着替えた方がいいかな？」

　ずぶ濡れになった我が身を眺め回しながら、つぶやく。

　天てん衣い無む縫ほうを以もつて任じる恵那だが、さすがにこの格好のまま人に——将来的にはかなり親密になるはずの異性に逢うのはためらわれた。

「めんどくさいなァ。おじいちゃまも、連絡を寄こすならタイミングを考えてほしいよね。いつもいつも迷惑なものまで寄こしてくれちゃってさ」

　ぶつぶつ愚ぐ痴ちりながら相棒を肩にかけ、恵那は学院をあとにした。

2

　最近、天気が荒れ気味だ。

　ここ数日、前ぶれもなく強風が発生したり、豪雨になることが多い。

　濡れた道路の上を歩きながら、護ご堂どうは空を見上げた。今朝方、短い間ではあったが嵐を引き起こした雨雲は、とっくに移動したようだ。

　澄んだ青空が広がっている。

　暦こよみの上ではもう秋だが、まだまだ夏の雰ふん囲い気きが濃厚だった。

　朝の七時半。こんな時間だが、護堂の目的地は学校ではない。まずエリカの家に寄って、彼女を叩たたき起こさなければならないの

だ。

　本ほん郷ごう通り沿いの歩道。エリカのマンションまで、あとすこし。

　ほぼ毎朝通っている道を歩いていると、見覚えのない少女が近づいてきた。

　つややかな美しい黒髪。それと似合いの、大やまと和なで撫子しこ風の顔立ち。どこかの学校の制服を着ており、竹刀しないでも入っていそうな細長い布袋を肩にかけている。

「草くさ薙なぎ護堂さまですね？　はじめまして、清せい秋しゅう院いん恵え那なと申します」

　彼女は護堂の正面にやってくるなり、名乗った。

　何の用だろう？　いぶかしみながら、こちらも立ち止まる。

「縁あって、あなたのお近くに控える身となりました端はした女めにございます。わたくしも清秋院の家も、叶かなうならばあなたさまの御ご寵ちよう愛あいを末永く賜たまわり、共に覇は道どうと王道を歩ませていただきたく願っております。どうぞ、この忠義をお受けくださいませ」

「…………へ？」

　いきなりの、勿もつ体たいぶった口上。

　護堂が戸惑っていると、清秋院某なにがしと挨あい拶さつした少女はニヤッと笑いかけてきた。

「——なんてね。ねえ、敬語とかなしで話をしてもいいかな？　祐ゆ理りなんかとちがって、恵那はそういうのが得意じゃないんだ。草薙さんが怒るなら、きちんとするけどさ」

　お嬢さま然とした清せい楚そな印象が、いきなり崩くずれた。

　かなり人なつっこい女の子のようだ。護堂は面食らいながら、ひとまずうなずいた。

「べつにかまわないけど……君は万ま里り谷やの知り合いなの

か？」

「うん、子供の頃からの。草薙さんにわかりやすく言うと、恵那も媛ひめ巫み女こだからね」

　意表を衝かれる自己紹介だった。万里谷祐理の仲間？

　たしかに口上のときは、生きつ粋すいのお嬢さまである彼女にも負けない気品だったが……。

「草薙さんは知らないみたいだけど、実は恵那たち媛巫女は何十人もいるんだな。ま、その辺あたりのことはおいおい知ってもらえればいいか」

　にっこりと笑いながら、恵那が言う。

　日向ひなたを吹き抜ける夏の涼風にも似た、不思議な軽やかさを感じさせる少女だった。

「今朝はね、ご挨拶とご招待をしようと思って、声をかけたんだ」

「ご招待？」

「うん。祐理も誘って、王様といっしょにお茶でも飲もうと思ってね。今日の放課後、時間を空あけといてもらえる？　あとで招待状を送っておくからさ」

　いきなりの申し出に護堂は驚いた。だが、祐理も同席するのなら変な事態にはなるまい。

「まあ、べつにかまわないけど」

「そう、よかった！　じゃ、お話はあとでゆっくりしよう。ごきげんよう！」

　最後の言葉だけはお嬢さまっぽいが、実に快活な言い方だった。

　歩み去っていく新たな媛巫女を、護堂は首をかしげながら見送った。また変わり者がやってきたようだと、少々呆あきれながら。

　この時点では、数時間後に起きるドタバタは予想していなかった。

　授業が終わり、放課後になった。

　昨日のプールでの一件以来、万里谷祐理は気分が沈んだままだった。

　草薙護堂もああいうことに興味を持っていたとは。いや、彼も健全な男子なのだから致し方ない欲求のはず。だが、それに対してどう応こたえるべきか――。

　そう考えている自分に気づき、祐理は昨日愕がく然ぜんとしたのだ。

　これではまるで、彼と深い関係になることを検討しているような……。

　そんな自分に困惑し、あわてて走り去ってしまった。一晩経たって冷静になったところで、恵那に相談の電話をかけてみたのだが。

『それはもう、草薙さんに抱かれちゃうしかないね。ここでやらなきゃ女じゃないよ！』

　などと決めつけられてしまった。

「な、何でそうなるんですか⁉」

『だってさ、あの人のことが好きなら、そうするしかないじゃん。モタモタしてたら、エリカさんたちとの差が開くばっかりだよー』

「開いても、か、かまいませんッ。私と草薙さんは、ただのお友達で――」

『本当にー？』

「は、はい。本当です。だから、あの人はエリカさんと淫みだらな真ま似ねをしていれば……」

　いいのですと言いかけて、祐理は言いよどんだ。

　何かが心に引っかかり、言い切ることができなかったのだ。

『ふむふむ。これが甘あま粕かすさんの言ってたツンとかデレとか

の深しん遠えんなせめぎ合いってヤツか。ま、とにかく恵那が手伝ってあげるから、大おお船ぶねに乗ったつもりでいて。今日会いに行くよ。——祐理は何か、用事とかある？』

「今日は茶道部の部活が……」

『うん、茶道部ね。了解。じゃ、詳しいことは会ったときに』

　それで役に立たない相談の電話は終わり、祐理は学校に向かったのだ。

　草薙護堂たちとは、屋上で昼食を共にするのが日課である。だが、今日は屋上には行かなかった。どんな顔をして彼と会えばいいのか見当もつかなかったからだ。

　放課後を迎えた祐理は、学院内の茶室へと向かった。

　ここは、高等部と中等部の間に造られた和風家屋の一室である。

　この建物は茶道部や華道部、日にち舞ぶ研究会などの文化系クラブが主に使用しているクラブハウスで、和室棟の通称で呼ばれていた。

　今日は水曜日。茶道部は毎週、火・水・木が活動日なのだ。

　祐理は下駄箱で靴を脱いで茶室へ入り——そして、びっくりした。

「や、祐理。一日ぶりだね。約束通り、会いに来たよ」

　そこには清秋院恵那が正座していた。

　隣にすわる部長の花はな房ぶささんが、祐理の顔を見るなりホッとした顔つきになった。

「万里谷さん、ちょうどよかったあ。お知り合いの方が待っていらしたのよ～」

　茶道部の部長、花房あかり。高等部二年生。

　おっとりとした話しぶりと、やさしげな表情が印象的な先輩だった。

「お茶室に入ろうとしていたら、この方に声をかけられたの」

「茶道部はどこで部活するのか生徒さんたちに訊きいてまわったら、ここだって教えてもらえたからね。そのうち祐理も来るだろうって先回りしたんだ」

　あっけらかんと恵那が言う。

　それにしても他校の制服姿で校内を歩き回って、教職員に注意されないだろうか？

　祐理の危き惧ぐに気づいたのか、恵那は悪戯いたずらっぽく笑ってみせた。

「大丈夫。見つかるようなヘマはしないよ」

「はあ……。そういえば恵那さん、ご自分の学校の方はよろしいのですか？　ここ数日、登校されてないようにお見受けしたのですが」

　祐理はおずおずと訊たずねた。ふとそこに思い至ったのだ。

「ああ、気にしないで。もともと、そんなに通っていないんだ。出席日数ぐらい、あとでどうにでもしてやるって実家のばあちゃんが言うから、ずっと山ごもりしてた」

　けらけら笑って、恵那が言う。

　さすが清秋院家だと、祐理はため息とともに感じ入った。

　明めい治じ維い新しんの前までは貧乏な公く家げに過ぎなかった万里谷家とちがい、あちらは先祖に戦国大名までいる名家中の名家。各方面への非常識な影響力を所有しているのだ。

「……でさ。この部でいちばんえらい人は、あなただよね？」

　いきなり恵那が、花房さんのおっとり顔をのぞき込んだ。

「は、はい。一応、部長をやってますけど……。どうしてそれを～？」

「ただの勘かん。恵那はね、群れでいちばん強いのが誰か、何とな

くわかるんだなー」

　腰の引けている茶道部部長をぶしつけに眺ながめながらの言葉だった。

「部長さんに提案。っていうか、お願い。お茶会をやりたいんで、ここをちょっと間借りしてもいいかな？　大丈夫、そんなにスペースは取らないからさ！」

　人なつっこい笑顔での懇こん願がん。

　そんな物もの怖おじしない愛あい嬌きようとはべつに、得体の知れない迫力がある。

　恵那はいつもこうだ。天性のたくましさにまかせて、常に我が道を貫つらぬくのだ。押しに弱く、人のいい花房さんはそれに気け圧おされてうなずいた。

　彼女はここで何をするつもりなのだろう？　祐理はだんだん不安になってきた。

3

　その頃、一年五組の教室では——。

　草くさ薙なぎ護ご堂どうが己おのれの席で、きなくさそうに手紙を眺めているところだった。

　和紙にしたためられた私信。

　そこには『本日の授業終了後、茶室にまで来られたし』と、毛筆で綴つづられていた。すばらしい達たつ筆ぴつである。結びには清せい秋しゆう院いん恵え那なと署名があった。

　これが招待とやらか……胡う散さんくさい。護堂は今け朝さの一幕を思い出した。

　この手紙はいつのまにか護堂の机に紛まぎれ込んでいた。

　彼女がどうやって投入したのかは不明だ。何かの魔術を使ったのかもしれない。この程度のことで、そんなあやしい真ま似ねをするなと文句を言いたいところだ。

　だが昼食の時、祐ゆ理りは屋上に来なかった。おそらく自分を避けたのだろう。

　これ以上ギクシャクする前に、きちんと話をしたいところでもある。その意味では、この招待は渡りに舟だった。多少の不ふ愉ゆ快かいさには目をつぶるべきか。

　エリカはさっきクラスの女子と外へ出ていったが、彼女を伴ともなう必要もないだろう。

　護堂はひとりで茶室に行こうとして、もうひとりの騎き士しを思い出した。

「なあリリアナ。俺は用事があるから、先に帰ってくれよ」

「用事ですか？　それは一体どのような？」

　隣となりの席に声をかけると、リリアナは生き真ま面じ目めな表情になった。

「ちょっと茶道部に寄ってくつもりなんだ」

「茶道部？　ああ、万ま里り谷や祐ゆ理りか静しず花かさんにでもご用があるのですね」

「いや、万里谷の友達とかいう巫み女こさんに呼ばれてるんだ。どんな用かは俺もよく知らないんだけど、とりあえず行ってみようと思って」

　そう説明した直後、護堂は失敗を悟った。こんなふうに言えば、彼女は自みずからの責務を遂すい行こうしようとするはず。無難な理由をでっちあげればよかった。

「……胡散くさい匂においのする話ですね。万里谷祐理の仲間となれば、只ただ者ものではない可能性が高い。わたしも同行しましょう。あなたを護衛しなければいけません」

「あ、いや、そんな大げさにしなくてもいいって」

「大げさではありません。当然の用心です。あなたの方こそ、危機管理意識をもっと強く持つべきです。……本当に世話の焼ける方ですね」

かくして銀髪の騎士を同行者として、護堂は和室棟へと向かった。

城じよう楠なん学がく院いんの敷地は結構広い。特に中等部と高等部の境目辺りは林になっている。池まであり、ちょっとした庭園のようだった。

和室棟に代表される文化系のクラブハウスは、この近辺に固まっている。

「こんなところで茶道部は活動していたのですね。初めて来ました」

「普通は来ないからなあ。俺も、文化系クラブの説明会とかで一度来ただけだよ」

和室棟は横に長い平屋造り。つまり外観は『長なが屋や』だ。

リリアナとともに下げ駄た箱ばこで靴を脱いで、上がり込む。廊ろう下かをちょっと歩いて、広さ一二畳の茶室に入室した。先客は六名。

ひとりは万里谷祐理。すぐそばに、見慣れぬ制服に身を包む清秋院恵那の姿もあった。このふたりと距離を置いて、残りの四人が固まっている。皆、初対面の茶道部女子たちだ。

——いや、一名だけ例外がいた。妹の静花だ。

「お兄ちゃん？　どうしたの、こんなところに来たりして」

城楠学院の文化部は、中高の部員がいっしょに活動するケースが多い。

だから静花がいても不思議ではない。もっとも、突然の闖ちん入にゆう者しやに驚いたのは妹だけではなかった。祐理までこちらを不ふ審しんそうに見つめている。

「護堂さん？　ど、どうしてここに⁉」

「恵那が呼んだからだよ。さて、お客様も来たことだし、お茶会をはじめようかな……。呼んだ覚えのない人も交まざっているけど、どうぞ。歓迎するよ」

　ひとり、城楠以外の制服を着た恵那が飄ひよう然ぜんと言う。

　それを聞いたリリアナは、不ふ愉ゆ快かいそうに眉まゆをひそめた。護堂が何か言うよりも先に、媛ひめ巫み女こたちの前に腰を下ろす。驚いたことに、ちゃんと正座だった。

　いくら教えても実践しないエリカとちがい、リリアナは郷ごうに入っては郷に従う気質らしい。

「……お気をつけください。この女、数日前もわたしとエリカをつけ回していました」

　隣にすわった護堂へ、リリアナがささやく。

　思わぬ報しらせに気を引き締めると、恵那が屈くつ託たくのない笑みを向けてきた。

「そっちにいるのは草薙さんの妹さん？　ふーん、偶然だね。呼んだ方がいいかな？」

「いや、必要ない。べつに、わざわざこっちに交ぜなくても――」

「いいえ！　あたしもごいっしょさせていただきます！」

　護堂が断るよりも早く、静花が憤ふん然ぜんと言った。

　茶道の席には似合わない荒っぽい所作で、こちらへズンズン近づいてくる。そのまま護堂の隣に、ドカッと正座してしまった。

　リリアナ、護堂、静花の順に並んで正座し、恵那および祐理と向き合う形になる。

　妙なことになったと思いながら、護堂は質問を口にした。

「せいしゅういん……さんだっけ？　他よ所その生徒が、何で茶道部に間ま借がりしてるんだ？」

「呼び捨てでいいよ。そこの部長さんに頼んで、場所を貸しても

らったんだ」

　恵那がちらりと、本来の茶道部員たちを見やる。

　そのなかの親切かつ気弱そうな女子部員が、困ったように笑っていた。

「俺と話をするだけなら、どこかの店でもよかっただろうに」

「そういうのも味気ないしねー。せっかくだから、お茶ぐらい自分で点たてようかなって」

　と、恵那は背後に据すえられた電熱ヒーターと鉄てつ瓶びんを眺ながめた。

　風ふ情ぜいのないこと甚はなはだしい茶道具だが、学校の部活動なのだから仕方ないのだろう。本格的な炉ろ釜がまや炭火をここで使うわけにもいくまい。

「話って、お兄ちゃんとこの人が……？」

　不ふ機き嫌げんそうに静花が口を挟はさむ。他校の生徒、しかも歳とし上うえに対して礼儀知らずもいいところだ。護堂は妹の不ぶ作さ法ほうを嘆なげきたくなったが、恵那は気にしたふうもなかった。

「うん。ここにいる祐理もいっしょに、お兄さんとお話をする必要があったんだ。つまり、恵那と祐理がいつ草薙さんのところにお嫁入りしようかって相談なんだけど——」

　ガタン！　静花が前に、大きくつんのめった。

　彼女だけではない。護堂も腰が抜けんばかりに驚いた。

　お茶を点てながら聞き耳も立てていた茶道部の面々も、手を止めて呆ぼう然ぜんとこちらを注視している。リリアナだけが「やはりそうか」と静かにつぶやいた。

「えええ恵那さん！　私とあなたが護堂さんにお嫁入りとは、どういうお話ですか⁉」

「どうもこうもないって。前からそういう話だったじゃん」

　恵那は、真っ赤になって叫ぶ祐理をたしなめた。

「あ、草薙さん。昨日から祐理が情緒不安定だったと思うけど、あまり気にしないで。実は、恵那がこの子に言ったんだ。早く草薙さんに抱かれる覚悟とかした方がいいよって。だからあなたのこと、変に意識しちゃっただけで。——もう祐理に愛あい想そ尽つかしたりした？」

「い、いや。そんなことは決してないんだけど……！」

「そう、よかった。じゃあ末永く、ふたりそろってよろしくお願いします。祐理は絶対いい奥さんになるはずだし、恵那もきっと草薙さんのお役に立つはずだよ。うん、自分たちで言うのも何だけど、草薙さんは果か報ほう者ものだよねー。うらやましいなァ」

「恵那さん、もっと発言に気を遣つかってください！　は、はしたないです！」

「はしたなくても、大切なことだし仕方ないよ。——さ、草薙さん、お茶どうぞ」

　茶器に抹まつ茶ちやを放り込み、湯を注ぎ、茶ちや筅せんでかきまぜる。

　できあがったところで、恵那は護堂に向けて器うつわを押し出した。薄茶というヤツのようだ。

　一連の所しよ作さは無造作で、作法を守っているようには見えない。

　そのくせ、ひどく様になっているのが不思議だ。向こうでは、茶道部の女子たちがお茶を点てている。その堅苦しい手て際ぎわと好対照だった。

　書道で言えば、たどたどしい初心者の楷かい書しよと、達人の闊かつ達たつな草そう書しよほどの差がある。

　器を受け取った護堂は、適当に口元へ持っていった。

　作法など知らないし、ここで覚えるつもりもない。隣で静花が眉まゆをひそめていたが、気にせず口をつける。——絶妙な加減の渋みがうまかった。

恵那は同じ手つきでさらに茶を点て、他の者にも振る舞っていく。

抹茶の苦さに閉口する外国人は多いというが、リリアナは平然と飲み干していた。同時に、お茶を振る舞った亭てい主しゆへ鋭いまなざしを向けている。

祐理は憂ゆう鬱うつそうな表情を浮かべながら、上品な手つきでいただいていた。

妹の静花は味わう前も味わったあとも不機嫌そうだった。

「で、話を戻すけどさ。さっきはお嫁入りって言ったけど、正式に籍とか入れなくても全然いいんだよ？　ふたりも奥さんがいたら重婚になっちゃうしね。あ、でも子供は認知してくれないと困っちゃうかなー……」

またも恵那の爆弾発言が炸さく裂れつした。

この娘、もしやエリカに匹ひつ敵てきするトラブルメーカーなのでは!?

愕がく然ぜんとする護堂、ひたすら恐縮する祐理、ただひとり冷徹に話を聞くリリアナ、兄を険しくにらむ静花、そして居心地悪そうな茶道部の女子たち……。

祐理とリリアナ以外の女性陣から注がれる視線が、護堂には痛かった。

『お兄ちゃん、最低！』『こ、これが大人のおつきあいというものなの～!?』『草薙さんのお兄さんって、やっぱりうわさ通り……』『あの話、本当だったんだね……』

そんなモノローグが、彼女たちの表情から読み取れる。

護堂はこの場から逃げ出したくなった。嗚あ呼あ、何で俺がこんな目に——。

「あ、でも、祐理と相談したんだ。Ｈとか出産とか、そういう仕事はまず祐理の方を優先してもらおうって。だから恵那は二軍みたいな感じでさ……。草薙さんもそれでいい？　それとも、恵那の方が好みだったりする？」

「ままま、待て。待ってくれ。話の進み方がおかしい。おかしすぎる！」

「そんなことはないよ。むしろ、ここがいちばん重要なところかもしれないし。――じゃあ質問。どんな女の子が好みですか？　おとなしい子と元気な子なら、どっちがいい？」

　こちらの待ったを無視して、軽やかに質問してくる。

　恵那のゴーイングマイウェイぶりに、護堂は必死に抗あらがおうとした。

「無回答！　そんな話につきあう義理は、俺にはない！」

「じゃ、これは保留、と。次はね、ちょっと普通の人とはちがう趣味とか、隠している性せい癖へき……そんなのあったりする？　この雑誌に書いてあったんだけど『性生活のすれちがいは男女が別れる原因になります。もし彼にアブノーマルな性癖があるなら、あなたも積極的に愉たのしんじゃいましょう☆』だって。草薙さん、そういう隠し事はどう？」

「あるわけないだろ！　いいから俺の話を聞け！」

　どうやらこの少女には、確固たる覚悟を持って立ち向かわなければいけないようだ。

　薄い女性誌を取り出した恵那に、護堂は叫んだ。

「とにかく話題を変えよう。俺と君、あと万里谷が、どうしてそんな関係にならなきゃいけないんだ。まず、そこをはっきりさせようか」

「またまた……。すでに三人もお妾さんがいるのに、今さらな発言だなー」

　と言って、恵那は指折り数えていく。

「全部知ってるんだから。エリカ何とかさん、うちの祐理、あとはそこにいるリリアナ何とかさん……ほら、もう三人もいる。あ、あと現地妻もいるんだっけ」

「全員、ただの友達だ！　俺を女の敵みたいに言うな！」

　妹および茶道部女子たちが、犯罪者を見る目つきで護堂を注視している。

　その視線を無視しながら、激しく主張した。

「うん、まあ……祐理は恥ずかしがり屋だから、自分はちがうって言うだろうけどね。でも大丈夫、恵那もいっしょにがんばって一人前のお妾めかけさんになってみせるよ。だから草薙さんも愛想を尽かさないでやって」

「ま、万里谷、こんなこと言われてるけど、いいのか⁉　君の口から否定してくれ！」

　このままでは埒らちがあかない。護堂はずっと黙ったままの祐理に話を振った。

「俺と万里谷はただの友達で、変な関係じゃないってキッパリと言ってくれよ。頼む」

「は、はい。私と護堂さんの間にやましいことは何も……」

「祐理。一度口にしちゃったら、取り返しのつかなくなることってあるからね」

　たおやかな媛巫女が控えめに発言しようとしたとき——。

　その自じ称しよう友人が静かに言った。今までの能天気さとは、微妙にノリがちがう。

「恵那はいいんだ。祐理がここで降りても、ひとりで草薙さんにお仕えするから。ずっと仲よくして、多分子供とかも産んでね。そして、祐理があとで後悔しても全部無視してあげる」

「え、恵那さん……」

「ここで降りるなら、止める気は全然ないよ。その代わり、二度とチャンスはあげない。恥ずかしがるだけなら可愛かわいいけど、何も自分で決められないのはダメ。許さない。欲しいものがあったら、自分の手でつかみ取らなきゃ」

「……自分の手で」

「そうだよ。自分の居場所は自分で作るものでしょう？　祐理にその気があるなら、恵那が責任を持って応援してあげるからさ。どうするか、今ここで決めちゃおう。ね？」

　友人の勧告に、祐理は黙り込んだ。

　その美しい横顔に不穏な気配を感じて、護堂は焦あせった。沈黙が長い。長すぎる。彼女は何を迷っているというのだ⁉

「…………はい。承知いたしました」

　ようやく返事をすると、祐理はまっすぐ護堂の顔を見つめてきた。そういえば、彼女と正面から向かい合うのは今日初めてのことだ。

　そのまま祐理は、恥ずかしそうに切れ切れにつぶやいていく。

「わ、私としては……恵那さんのおっしゃりようを、全て認めるわけにはいきません」

「う、うん」

　恥じらってはいたが、祐理の目と言葉には凛りん然ぜんたる意志が宿っていた。

　その迫力に気け圧おされて、思わず護堂は黙り込んだ。

「ですが、彼女の語った未来図には、頭から否定できない可能性があると思われます。つまり、私と護堂さんが将来的にどのような関係になるか、一切わかっていませんし。わ、私たちには普通の友人同士では行わない行為を交わした過去もありますし！」

「つ、つまり……？」

「ですから、私たちがただの友人同士だと断言することはできません！　も、もしかすると、恵那さんのおっしゃる通り、只ただならぬ仲になるかもしれないのですから！」

　予想外の返答に、護堂は「ええっ⁉」と仰ぎよう天てんした。

　すると祐理はひどく悲しそうに、澄んだ瞳でこちらを見つめてくる。

「否定……されるのですか？　私とのことはただの気の迷い、だったと？」

「あ、いや。全然そんなんじゃないよ。うん、ただちょっと驚いただけで……」

　あの六月の暴風雨のなか、祐理と行った『儀式』の記憶が甦よみがえってくる。

　護堂はあわてて、首を横に振った。

　周囲では妹の静花が「お兄ちゃんのバカ、いよいよ万里谷さんも陥かん落らく寸前ってこと!?」とわめき、茶道部部長の先輩が「ま、万里谷さんったら大胆すぎるわ～」と騒いでいたり。

　当の祐理はといえば、すぐに護堂の前から退散してしまった。

　恵那の後ろに隠れて「な、何てことを言わせるんですか！」と羞しゆう恥ちに打ち震えている。

「そろそろ、わたしにも発言させてもらおうか」

　思わぬ成り行きに護堂が呆ぼう然ぜんとしていると、不意に凛りゝりしい声が告げた。

　リリアナ・クラニチャール。

　青と黒ネラツズーロの騎士が、恵那を鋭くにらんでいた。

「あなたの思おも惑わくは何だ？　我が主の穏やかな暮らしをなぜかき乱そうとする？」

「かき乱すつもりはないよ。大体、草薙さんのまわりは騒がしいことが元から多いじゃん」

「言われてみると、たしかに。失礼、わたしの失言だった」

　そこで納得してほしくないのだが……。護堂が嘆く間にも問答はつづく。

「だがいずれにせよ、よからぬ企たくらみがあって草薙護堂に近づくのであれば、只で済ませるつもりはない。そのことを肝きもに銘

めいじておいてもらおう」

「ないない。よからぬ企みなんて何もないよ、二番目の人」

　刃物めいた剣けん呑のんさをちらつかせるリリアナに、恵那が軽い調子で返す。

「二番目、だと？」

「うん。……この群れのなかで二番目に強い人だからね。一番目はあの金髪の人、二番目はあなた、リリアナさん。この前会ったときにわかったんだ」

「……わたしよりもエリカの方が上だとでも？」

　リリアナが目を細める。侮ぶ辱じょくの返礼に決闘を挑む騎士。そんな雰ふん囲い気きになっても、恵那はニヤリとからかうように笑いかけた。

「一対一の強さなら同じくらいだけど、群れのなかの発言力みたいなのではあっちが上でしょ？　恵那はそういうのが何となくわかっちゃうんだな」

　祐理の仲間だという媛巫女の顔を、護堂は思わず見つめ直した。

　これは失礼なようでいて、紅と青の騎士ふたりの立ち位置を正確に言い当てている。

「その思いちがい、ここで訂正してやってもかまわないぞ」

「うーん、今はパス。どうせなら最初に一番目の人を片づけたいし。恵那はおいしいものから先に食べていく主義なんだよね」

　リリアナの売り言葉を軽やかにかわすと、恵那は護堂たちの後方に視線を向けた。

「ねえエリカさん、恵那の見立てにまちがいはないよね？」

　彼女が見み据すえる先——茶室の入り口には、鮮やかな容姿の女子生徒がいた。

　赤みがかった金髪と、たぐいまれな華か麗れいさ。言うまでもな

くエリカ・ブランデッリだった。

4

「護ご堂どうの姿が見えないから探しに来たのだけど……何だか、楽しそうなおしゃべりをみなさんでしていたみたいね」

　エリカが優ゆう雅がに挨あい拶さつする。

　周囲の慌あわただしさを無視して、己おのれのペースを貫つらぬく。彼女らしい振る舞いだった。

「はじめましてエリカさん。清せい秋しゆう院いん恵え那な、祐ゆ理りの友達。よろしくね」

「あら？　わたしたちは初対面ではないでしょう？」

　ふくみのあるエリカの微笑に、恵那は悪戯いたずらっぽい笑みを返した。

「こうして言葉を交わすのは初めてだから、これでいいんだよ。よかった。今日は一番の子と会うのが目的だったから、タイミングを外はずしたのかと不安になってたんだ」

「よかったわ、あなたのご期待に添うことができて」

「……エリカ。その女の相手、わたしにまかせてもらおうか」

　ふたりのやりとりに、リリアナが割り込もうとする。

　だがエリカはすこし考えてから「ダメ、却きやつ下か」と短く切り捨てた。

「その女には侮ぶ辱じよくされた借りがある。騎士の報ほう復ふくを邪じや魔まする気なら——」

「邪魔したくはないんだけど、仕方ないわ。わたし、その娘と政治の話をしてみるつもりなの。リリィが代わりをしてくれるのならいいけど、あなたはそういうの嫌いでしょう？」

やんわりと微笑ほほえみながら、エリカが言う。

静花しずかと茶道部の部員たちは、きょとんと不思議そうにしている。無理もない。

だが護堂には、相棒の言う意味を察することができた。彼女はこの奇妙な訪問者の思惑を探り、牽けん制せいするなり協定を結ぶなりしたいのだろう。

この手の話には、知性だけでなく政治や外交のセンスも要求される。

正直、無ぶ骨こつなリリアナにそれらを要求するのは厳しい。エリカに話をさせた方が、穏おん便びんに済むか。護堂は『紅き悪魔デイアヴォロ・ロッソ』にうなずきかけた。

「頼むエリカ。事を荒立てるんじゃないぞ」

「もちろん。じゃあリリィは護堂のそばにいること。いい？」

ライバルに釘くぎを刺されて、リリアナが不服そうに顔を背そむける。だが、不平は口にしない。適性の差を把は握あくしているのだろう。

「俺もいっしょに行ったらダメなのか？」

「今日は遠慮して。その娘も護堂がいない方が話しやすいことも多いでしょうしね。祐理たちといっしょに後片づけをお願い。——いいわね、祐理？」

「は、はい。かしこまりましたっ」

てきぱきと護堂に答え、祐理に指示を出す。

この辺りの手て際ぎわの良さは、エリカの面めん目ぼく躍やく如じよといったところだろう。

恵那も腰を上げ、奥の壁に立てかけていた袋を取り上げた。今朝、彼女が肩にかけていたものだ。竹刀しないでも入っていそうな、布製の細長い袋。

それとともに、恵那は金髪の美少女へと近づいていった。

　口元が笑っている。楽しくて仕方ないと主張したげな、陰のない笑顔だった。

「決まった？　じゃあ外に行こうか。せっかく気を遣つかってもらったことだしね」

「そうね。茶道部さんの場所にずっとお邪じゃ魔まするのも悪いし。――じゃあみなさん、わたしたちはお先に失礼するわね。どうぞ、ひきつづき楽しんでいらして」

　と、エリカがパーティーの途中で退出する貴婦人のごとく外へ出る。

　飄ひよう々ひようとした足取りで、恵那もそれにつづく。

　連れ立っていなくなる媛ひめ巫み女こと大騎士を、護堂は不安な思いで見送った。

　和室棟の外に出て、林のなかをエリカは歩く。

　そのやや後方に、清秋院恵那という名前の媛巫女がついてくる。

　この女、かなりできる。彼女の身のこなしから、エリカはその実力を察した。

　足音をほとんど立てない。そして、おそろしく重心の安定した歩みだ。たとえ足に鈴をつけていても、この女はまったく鳴らさずに歩いてみせるだろう。

　甘あま粕かす冬とう馬ま。正せい史し編へん纂さん委員会のエージェント。

　あの男も似たような足の運び、身ごなしをするが、はっきり言ってレベルがちがう。

「実はね、エリカさんにひとつあやまらなきゃいけないんだ」

　唐とう突とつに恵那が口を開いた。

「何日か前の件かしら？　こんなものをプレゼントされて、正直あ

りがた迷惑だったわ」

　エリカは振り返りながら、制服のポケットから鉄てつ片ぺんを抜き出す。

　夜道で襲ってきた『卍まんじ』の刀のかけらだった。

　それを恵那の足下に放る。やわらかな土の上に、鉄片はみごとに突き刺さった。

「ああ、これ？　ちがうちがう。こんなの、特にあやまることじゃないでしょ。エリカさん、楽勝で片づけたじゃん。それとも、もっと強いやつの方がよかった？」

　鉄片を見ても恵那は軽く笑って、自みずからが襲撃犯だと認めてみせた。

　裏表のない、天てん衣い無む縫ほうの笑顔だった。

「メイドインジャパンの技術力がこの程度じゃないということなら、興味はあるわね」

「そう？　なら、ちょっとご披ひ露ろうしちゃおうかな」

　黒髪の媛巫女がポケットから数枚の紙切れを取り出した。

　細長い長方形の紙片。その表側には、大小さまざまな漢字が記しるされている。

　ただし、あまりに崩してあるのでエリカにはほとんど読めない。かろうじて『劍つるぎ』の字だけが判別できた。——呪じゅ符ふの一種か。

「あやまりたいっていうのはさ、さっきエリカさんが政治の話をしたいって言ってたから」

「あれに何か問題でも？」

「うん、大問題がひとつ。白状すると、恵那にはそういう話題は難しすぎるんだ」

　にやり。不敵な微笑で口の端を歪ゆがめる。

　恵那の手のなかで『劍』の呪符が五枚、出番を待っている。

「そういえば、祐理もその手の話題には疎うとかったわね」

「そりゃそうだよ。そういうのは全部、委員会の管かん轄かつ。媛巫女は無関係だもの」

　五枚の『劍』符が青い焔ほのおに包まれ、恵那はそれを宙へ放り投げた。

　符は一瞬で燃え尽きる。しかし、その焔の内から鉄の塊かたまりが滑り出てくる——まるで鞘さやから抜き放たれる刀のように。

「だからさ、そんな話よりもわかりやすいことをしよう！　こんなふうにね！」

　符から誕生した鉄てつ塊かいは、例の『卍まんじ』の刀だった。

　飛ひ翔しようする『劍』の使い魔。

　それが五体もこちらに飛んでくる。エリカは呆あきれたように肩をすくめた。

「こういうことなら、リリィに押しつけてもよかったわね。とんだ期待はずれだわ。——父と母、勝ち誇るセトとバフォメットよ。滅ほろびの言葉に御おん身みらの力を授さずけ給たまえ！」

　拍ひよう子し抜ぬけしたせいか、剣を抜く気も失せた。

　騎士の武ぶ勲くんとは程ほど遠とおい、しかし効率的な魔術で迎え撃つことにする。

　エリカは言こと霊だまを唱となえると、併あわせて呪じゆ力りよくも解き放つ。『粉ふん砕さい』の術。無機物を爆ばく裂れつさせ、粉々に打ち砕く高等魔術であった。

　魔術で保護された、あるいは魔術で動く物体にはかかりづらい術なのだが——。

「やるなァ。数を増やすだけじゃダメか」

　呪じゆ文もんひとつで一いつ斉せいに砕けた『卍』の刀たちを眺

めて、恵那がつぶやいた。

　エリカはさらに呪力を操る。創造・変形・破壊・強化は彼女の得意分野。この分野に関しては、同年代では最高峰の腕前だと言ってもいい。リリアナでさえ大きく突き放している。

　自ら砕いた鉄塊に、かりそめの命を吹きこむ。

　膨ぼう張ちようさせ、変形させ、融ゆう合ごうさせ、疑ぎ似じ的な知能をあたえ、動力を吹き込む。

　——今の刀たちを素材とした鋼はがねの狼おおかみが、エリカの前に誕生した。狼といっても材料がすくなかったため、骨と皮だけで造った隙すき間まだらけの外観だったが。

　ガァァァァァァァッ！

　鋼の狼が吠ほえる。まるで本当に生きているかのような動きと咆ほう哮こうだった。

　即そつ興きようで造ったにしては、悪くない出来だ。

　いっそ愛剣クオレ・ディ・レオーネでも埋め込み、補強してやろうか。そうなれば獅し子しの魔剣の加護を受けて、強さも獰どう猛もうさも段ちがいに跳ね上がる。

「どう？　どうせ鉄を操るなら、ここまでやってみせてほしいものだけど？」

「すごいすごい。そういう細かい術、恵那は苦手なんだよねー。エリカさんはやっぱり、ものすごく器用だね」

　あいかわらず恵那が笑っている。

　強がりには見えない。この時点でエリカは彼女を侮あなどるまいと決めた。

「さっきメイドインジャパンって言ったでしょ？　うん、外国からのお客さまには日本の技術力を見せてあげなきゃ、サービス悪いもんね。すこし待ってて」

　恵那は肩から布袋を下ろし、その口を開いた。露あらわになるの

は、黒くろ漆うるしの鞘さやに入った大振りの刀。刀身だけで一メートル近くある。

　それを恵那が引き抜いた。反そりのない、まっすぐな大だい刀とうだった。

「天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ。……紹介するよ、正しょう真しん正しょう銘めいのメイドインジャパンで、恵那の相棒」

　黒髪の媛巫女は、刀の切っ先を地面に突き刺した。

　それだけで風が生まれる。

　刀を中心にして、穏やかな風がゆっくりと渦うず巻まいていく。

　その風に撫なでられて、造られたばかりの狼は砕け散ってしまった。己おのれよりも遥はるかに格上の鋼が登場したため、自みずからの不出来を恥じたかのように——。

　防衛本能に駆られたエリカは、とっさにクオレ・ディ・レオーネを呼び出した。

　だが、獅子の魔剣を以もつてしても、あの刀の相手は荷が重そうだ。

　魔ま剣けん、聖せい剣けん、霊れい剣けん、妖よう刀とう。

　そのいずれをも凌りよう駕がする、脅きよう威いの呪じゆ物ぶつ——。まさか神具の類たぐいなのか？

「……と、ちょっと抜くのが早すぎたか」

　不意に恵那が独りごちた。大刀をすばやく鞘に収める。

　これだけの大刀を手足のように扱っている。みごとな手並みだが、なぜしまうのか？

　エリカがいぶかしむと、「失敗しちゃった」と苦笑された。

「祐理の足音が近づいてくる。こいつを抜くと、あの子がすぐに感づいちゃうんだよね。勘かんがいいから。軽々しく抜くなってお説教されるはずだから、この辺でやめとく」

「足音？　そんなものが聞こえるの、あなた？」

「恵那は耳がいいんだ。あとひとり、男の人のもある……多分、草薙さんじゃないかな」

　耳に手を当てて、恵那が言う。エリカにはまったく聞き取れない。

　しかも、犬のように誰の足音かまで推測している。超人的な聴力だと言えた。

　どうやら想像以上に厄やつ介かいな相手のようだ。

　エリカはクオレ・ディ・レオーネを消した。こんな敵と不用意に対決してはいけない。十分に準備をしてから、叩きつぶすべきだ。

「ところでその剣、どこかの神に由来するものなの？」

「言ったでしょう、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ。おじいちゃまから借りてるんだ。気になるなら調べてみるといいよ。——じゃあ、また近いうちに。ごきげんよう！」

　陽気に手を振りながら、恵那が立ち去っていく。

　それを見送りながら、大至急情報を集めなければとエリカは決心した。

5

　エリカと恵え那なが姿を消したあと——。

　残った三人は和室棟内の流しに、使った茶器を持っていった。

　護ご堂どうとリリアナが洗い物をはじめるべく洗剤やスポンジを用意していると、不意に祐ゆ理りが心配そうな顔をした。

「どうしたんだ、万ま里り谷や？」

「い、いえ。ちょっと気になることがあったもので——すいませ

ん、すこし外に出ます」

　と、祐理は流しを離れる。護堂はピンときた。

「悪いリリアナ。あとを頼む」

「は、はい。草くさ薙なぎ護堂、あなたはどこへ――？」

　それには敢あえて答えず、祐理を追いかける。

　彼女は和室棟を出て、林のなかへと入っていくところだった。半なかば走るようにして追いつくと、びっくりした顔で訊たずねられてしまった。

「護堂さん、どうしてついていらっしゃるのですか⁉」

「いや、万里谷の様子がちょっと変だったから……。もしかして、エリカと清せい秋しゆう院いんの間で何か問題が起きたのか？」

「そうとは限りませんが、いやな雰ふん囲い気きを感じてはいます」

　ふたりは足早に林の奥へ向かった。祐理が先を歩き、その後ろに護堂の順だ。

「なあ、あの清秋院ってやつは何者なんだ？　媛ひめ巫み女このひとりって言ってたけど」

「その通りです。四家のひとつ清秋院家の跡あと取とりで、武む蔵さし野のを守護する媛巫女のなかでも筆頭に格付けされる、私の幼なじみです」

　四家。聞き慣れない単語の登場だった。

「清秋院、九く法ほう塚づか、連れん城じよう、沙さ耶やの宮みや――古来、呪力を以もつて帝みかどにお仕えしてきた四つの旧家を指す言葉です。特に清秋院は武力と政治に長たけ、沙耶宮は正せい史し編へん纂さん委員会の中ちゆう核かくにもなった智ち慧え者しやの一族……なのですが、いずれ改めてお話しした方がよさそうですね」

　なめらかに説明した祐理が、微苦笑とともに打ち切った。

　固有名詞の羅ら列れつに護堂が目を白黒させたので、気を遣つかってくれたようだ。

「そうしてもらえると助かる。万里谷たちの方にもいろいろあるんだなァ……」

「実は甘あま粕かすさんの提案で、その辺りの事情は護堂さんのお耳にはあまり入れないようにしていたのです。おそらく混乱されてしまうから、と」

「そりゃ正解だよ。現に今も混乱してたし」

　そんな話をしながら林の奥へと進み、ふたりはエリカを見つけ出した。

「ご無事でしたか、エリカさん！」

　祐理は霊視の力で所在を把は握あくしていたのだろう。ほっとした表情で駆け寄っていく。

　だが、清秋院恵那の姿が見えない。先に帰ったのだろうか。

「あの女ではなく、まずわたしの心配をする……。つまり、彼女はそれだけ危険な存在なのね？　わたしたちが荒っぽい状況になった場合、不利なのはエリカ・ブランデッリの方――そう祐理は予測していたのかしら？」

　近寄ってきた媛巫女に、エリカは唐突に言った。

「そ、それは……」

「清秋院恵那の相棒。あれがすごく興味深かったのだけど、詳しく訊たずねてもいい？」

　この質問に、祐理は顔をうつむかせた。

　答えたくとも答えられない。そんな雰囲気だ。エリカはふぅとため息をついた。

「いいわ、答えなくても。ちょっと言ってみただけだから、気にしないで。護堂もさっきの女のこと、あれこれ祐理に質問したらダメよ。この子にも答えづらい話はあるだろうし」

エリカは明るく、歳下の妹を心配するように気楽な調子で言った。媛巫女という集団のなかでの祐理の立場を気遣っての発言だろう。

こういうときの『紅き悪魔デイアヴォロ・ロッソ』は、あだなに似合わぬ包容力と細やかさを見せる。

彼女の指示に、護堂はぎこちなくうなずいた。

「で、当の清秋院はどこに行ったんだ？」

「わたしとちょっと話をして、先に帰ったわ。祐理にもよろしく、ですって」

「危ないことは何もなかっただろうな？　おまえにも、あっちにも」

「あるわけないでしょう。わたしを狂犬みたいに言わないで。時と場合も考えずに誰かと噛み合う趣味はないわ」

エリカの報告にうなずいた護堂は、帰宅することに決めた。

七なな雄お神社に顔を出すという祐理と別れ、和室棟までリリアナを迎えに行く。

置いてけぼりにされた銀髪の騎士は若じやつ干かん怒り気味だったので、それにあやまりながら護堂たちは校門へと向かった。

「それにしても、今日はいろいろあったな。帰ってのんびりしたいよ」

護堂は愚ぐ痴ちを洩もらした。するとエリカとリリアナが顔を見合わせる。こちらの正気を疑うような、微妙な目つきを向けてくる。

「何か言いたいなら、はっきりと言えよ。気持ち悪いな」

「では遠慮なく。草薙護堂、今おっしゃられたことは、残念ながらかなわぬ夢でしょう」

「あなた、自分が最大の試練を残している事実に気がついていないの？」

　青と紅の騎士ふたりに告げられて、護堂はムッとした。

　ふたりとも俺をバカみたいに言って——と憤ふん慨がいしかけたとき、思いちがいに気づいた。

　俺はバカだ。何であいつを忘れていたのか。

　十数メートル先の校門。

　夕日を浴びて紅くれないに染まっているそこで、小柄な女子が仁に王おう立だちになっていた。



　中等部の制服を着た彼女は草薙静花。

　さっき茶室で、数々の問題発言を聞きとがめた妹である。

　沈む太陽のせいで表情はよく見えない。だが、見ても見なくても同じだろう。どうせプリプリ怒っているはずだ。

「静花さん、どんな言い訳を聞けば許してくれるかしらね？　いずれにしても腕の見せどころよ、護堂。……そうだ。今日のところは兄妹水入らずということで、わたしとリリィはべつの道で帰ることにしてもいいのだけど——」

　人の苦境を眺めて歓ぶ悪魔の笑顔。

　まさしくその表情でつぶやくエリカの言葉が、護堂に重くのしかかってきた。

第４章　デートのススメ

1

　正せい史し編へん纂さん委員会、東とう京きよう赤あか坂さか分室。

　夜の一一時過ぎ。甘あま粕かす冬とう馬まはそのオフィスにひとりで残っていた。

　もっとも、この部屋を見て国家直属の情報機関と結びつける人物はすくないだろう。

　雑居ビルの一フロアを占有し、いくつもデスクを並べている。

　それらの上に積み重なるのは、各種ＰＣや書類の山、膨ぼう大だいな量の書籍（マンガふくむ）、駄菓子類、ツボ押し棒などの健康グッズ、幼児向けないし大きな幼児向け玩具おもちゃ等々。

　ゲームや映像などの製作、あるいは出版にたずさわる業界人であれば、おそらく同業者のオフィスだと推測するはずだ。

　そんな空間の専用デスクで、甘粕冬馬はノートパソコンと向き合っていた。

　デスクワークに励はげんでいるのではない。お気に入りのサイトを巡回し、ついでに匿とく名めい掲示板を閲えつ覧らんする定番コースである。もっとも、完全にサボリ中でもなかった。

　彼の耳と口は携帯電話に向かい、上司への業務連絡を行っていたのだから。

「その案件はもう処理済みです。心配いりませんって。もっと私を信用してくださいよ」

『そうしたいのはヤマヤマだけど』

　携帯電話越しに、沙さ耶やの宮みや馨かおるの美声が返ってくる。

　歳とし若わかい少女たちなら、声だけで「ヤダ、超カッコいい！」と騒ぎだすかもしれない。

『業務用端末のお気に入りに、アイドルとか声優のブログや有名ニュースサイトを登録している人に信用を求められてもね……』

「そういう地道な情報収集が、私たちの仕事には大切なんですよ」

　抜け抜けと言いながら、甘粕はネットオークションのページを眺めつづけた。

『それはそうと、御ご老ろう公こうの思惑で何か判明したことはあるかい？』

「いいえ、特には。つい最近まで草くさ薙なぎさんにはたいして興味もなさそうでしたのにねェ」

　そのおかげで正史編纂委員会・東京分室——つまり、沙耶宮馨とその懐ふところ刀がたなたる甘粕が好きにやってこれたのだが。

「最近起きた……といえば、ナポリの事件ですか。ペルセウスとの一戦」

『ああ、鋼はがねの英雄——たしか甘粕さんは、そう呼んでたよね』

「はい。ペルセウスは『剣』の特徴を持つ鋼の英雄たちの代表的な存在ですからね。何気に草薙さんが倒したウルスラグナ神もその系けい譜ふですし」

　ウルスラグナの祖であるミスラには『石から生まれた』という伝承がある。またウルスラグナの兄弟とも言えるアルメニアの軍神ヴァハグンは、真しん紅くの海に生える葦あしより生まれた焔ほのおの髪と髯ひげを持つ英雄神だ。

石、すなわち鉄の素もととなる鉱こう石せき。鉱石を溶かす火。火を起こし、さらに強める風。灼やけた鉄を冷やす水などとの共生関係は、多くの剣神たちが所持する要素なのだ。

『アーサー王と円卓の騎士なんかもそうなんだっけ？』

「その通りです。エクスカリバーをはじめとする彼らの伝承には、鋼の神話に由来するエッセンスがてんこ盛りですからね。円卓の騎士たちの原型はケルト神話……なんて単純な図式で割り切れる話じゃないんですよ」

『へー。なかなか奥が深いね』

「もちろんケルトの要素を無視してはいけませんが、あの伝説を読み解くためには、イングランドもまたローマ帝国が形成した多民族国家の一部であった歴史的経緯も考慮しなくてはいけません——って、ここは本来なら馨さんが講義するところですよ」

　博物学者にして正史編纂委員会の創設者・沙さ耶やの宮みや惟これ道みち。

　彼の曾ひ孫まごに当たる男装の少女は、甘粕の苦笑にわざとらしくあやまってみせた。

『ははは、ごめんごめん。ほら、ぼくも学校とか媛ひめ巫み女この仕事で何かと忙しいからさ。なかなか勉強するヒマが取れなくて』

　今のところは、古老たちの尖せん兵ぺいである清せい秋しゆう院いん恵え那なの動向に目を配るべし。その結論に落ち着いたところで、電話は終わった。

　甘粕はそのまま帰宅することに決めた。戸締まりをして、外へ出る。

　夕食がまだだったので、どこかで食事をするつもりだった。

　溜ため池いけ山さん王のう方面にすこし歩き、とあるラーメン屋の前で足を止める。ここは店内だけでなく、外にもテーブルと椅い子すを並べて利用できるようにしている。

　ちょうどよかったので外の席のひとつに腰をおろす。すぐに店員がやってきた。

　特に悩まず、醤しよう油ゆラーメン味玉入りと缶ビールを注文。

　そこに美女が近づいてきた。妙みよう齢れいと言うには若すぎる。美少女と呼ぶべきか。

　彼女の顔を見て、甘粕は肩をすくめた。逃げても仕方がないだろう。どうせどこかでまた捕まるだけだ。だから、いつもの調子で挨あい拶さつした。

「おひさしぶりです、エリカさん。あいかわらずお美しい。まことに喜ばしい限りです」

「おひさしぶり、甘粕さん。ここ、ご一緒してもかまわないかしら？」

　もちろん否いなとは言えず、甘粕はおどけた仕草でうなずいてみせた。

　甘粕とは向かいの席に、エリカは腰を下ろした。

　二〇代後半の地味な青年にして、正史編纂委員会のエージェント。

　魔術結社《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の組織力と、この東京で築き上げた人脈、自身の才覚。それらを駆使した情報収集の最後にエリカが選んだ行動は、この男との接触だった。

「こういう店にエリカさんがいらっしゃるとは意外ですねェ」

　のんきに甘粕が言う。突然の来訪にも動じていないようだ。

　こうでなくては面白くない。微笑しながら、エリカも調子を合わせていく。

「あら。わたし、香ホン港コンにいたときは屋台なんかにも結構通っていたのよ」

「ああ、そういえば一年ほどあちらに滞在されてたんでしたっけ」

「調査済みというわけね、さすが甘粕さん。ジャパニーズニンジャ

マンの評判通りだわ」

　せっかく賞しよう賛さんしたのに、甘粕は何とも言えない微妙な表情をしてみせた。

「最近、ある人にもお願いしたのですが、その呼び方はおやめください。せめて隠おん密みつとか、忍びの者とか……。あと、この場合マンは余計でしょう」

「そう？　ま、いいわ。あなたの意見を尊重してあげる」

「恐れ入ります」

　ここで店員が注文を取りに来たので、エリカは迷わずに告げた。

「雲ワン呑タン麺ミンをいただける？　雲呑はもちろんエビがいいのだけど」

「日本の一般的ラーメン店に、そんなメニューはありませんよ。食べたきゃ中華料理店に行くべきです。……えーと、こちらの女性に私と同じ物を」

　甘粕の注文を受けて店員が引っ込むと、エリカは眉まゆをひそめた。

「麺専家ミンチユンガーのくせに、雲呑麺もないというの⁉」

「あるわけないでしょう。ていうかエリカさん、日本のラーメン屋と香港の麺専家の区別もついてなかったんですか？　こっちに来て三カ月も経たつのに？」

　甘粕が呆あきれたように言うので、エリカはすこしムッとした。何となく、護ご堂どうが『育ちの差』を言い立てるときの表情に似ているのも腹立たしい。

「つくわけないわ。今日初めて利用するのだもの」

「世慣れているように見えて、根本的にはお嬢さまな人ですねェ。恵那さんの逆ですな」

　缶ビールを口に運ぶ甘粕の、さりげない発言。

　エリカは微笑んだ。この自じ称しよう忍びの者は、やはり察しがいいようだ。

「清秋院恵那。あの娘はお嬢さまではないの？」

「生まれと受けた教育は完かん璧ぺきなお嬢さま、究きゆう極きよくの大やま和と撫なで子しこですよ。それなのにあんな自然児に育ったところが、あの人の厄やつ介かいなところでして……。でも、エリカさんはそういうことを訊ききたいのではないのでしょう？」

「ええ。わたしが知りたいのは、媛ひめ巫み女ことしての彼女について」

「それを私のところに訊きに来ますか。答えられるわけないでしょう」

「そう？　敵の敵は味方って言うけど、これは今のわたしたちにも当てはまりそうよ」

　ちょうど注文した品が運ばれてきた。

　麺料理の碗わんがふたつ。匂においとスープの色から、醤油ベースの味だと思われる。それと、缶ビールが一本。エリカはそれに躊ちゆう躇ちよせず手を伸ばし、プルトップを開けた。

「未成年の飲酒は、日本では禁じられているんですけどねェ」

「あら、あなたが注文したんじゃない。自分と同じ物をって。それにわたし、イタリアでは飲酒可能な年齢よ。気にする必要はないわ」

「郷ごうに入っては何とやら、ですよ。ま、それはそうと敵の敵は味方ですか」

　甘粕が白い匙さじで麺のスープをすする。

　エリカも一口、試ためしてみた。意外と複雑な味わいだった。悪くない。

「この頃、ずいぶんと顔が広くなったそうですね。となると、委員会とは距離を置く連中からも情報を得られるようになる……。私た

ち日本陣営の内情、把は握あくできてきましたか」

「結構面倒だったわ。正史編纂委員会とはべつに、かつて帝みかどに仕つかえた四つの氏族が呪じゆ術じゆつ界かいで勢力争いをしているなんて聞いていなかったし」

　結社カルトではなく、氏族クランによる主導権争い。

　魔術の世界ではよくある話なので、それ自体は驚きよう愕がくすべき情報ではない。ただ、その勝者たる氏族が正史編纂委員会の運営者だというのは意外だった。

「それはあなた方の責任もありますよ。日本の内情なんて知ろうともしないんだから」

「で、ここ一五〇年ばかりは、あなたたち正史編纂委員会のオーナーである氏族が政争の勝者となってきた。ただし、それほど絶対的ではない勝者よね」

　微苦笑を洩もらしている甘粕の懐ふところに、エリカは踏み込む。

　四家とやらの第一人者は、二番手以降をそれほど大きく突き放してはいないはずだ。

「ええ。たしかに清秋院は、私たちにとっては小うるさい存在です。ま、最終的な主導権はこちらにあるので、それほど深刻な問題ではありませんがね」

「でも、その割に今回、清秋院恵那を野放しにしてるわね？」

「私たちにも面倒事はあるということです。さすがに、全てが思い通りにはなりません」

　醤油味のスープと麺をすすりながらの会話。

　エリカは口に合わない食料と対たい峙じしたとき、その味を無視する特技を持っている。

　が、今回は幸いにもそうする必要はなかった。鮮蝦雲呑麺シンハーワンタンミンと同じくらい満足できるレベルの味だ。その三分の二ほどがなくなったところで、おもむろに甘粕が言った。

「いくつか、情報をご提供しましょう。敵の敵はどうとかの物騒な話ではなく、同席する女性の美しさにたぶらかされた結果だとお考えください」

「まあ、それは光栄だわ」

　人の悪い笑みを浮かべ合う甘粕とエリカ。

　狸たぬきと狐きつねが隠れて取引するとしたら、今のふたりのようになるかもしれない。

「清秋院恵那は古老のおひとり——御ご老ろう公こうと呼ばれる方の秘蔵っ子です。この御老人とそのお仲間のご意向は、わたしたち委員会にも無視できません」

「行政府に対する元げん老ろう院いんというところかしら」

「言い得て妙ですな。そして、御老公はとある神刀を恵那さんに授けています」

「神刀——もしかして、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ？」

「よくご存じで。別名、草くさ薙なぎの劍つるぎです」

「あら、護堂と同じ名前なのね」

「ただの偶然でしょう。草薙の名は秋あき田たとか讃岐さぬきの辺りに見られた姓なので、彼のご先祖さまがそこらの出身なのだと思われます」

　それもそうか。エリカはうなずいた。

　彼が魔道の血を引く者なら、もうすこし魔術のセンスがあってもいいはずだ。

「あの刀、まさかとは思うけど本物……ということはないわよね？」

　この名は、日本では著名な英雄神の愛刀を意味するのだという。

　伝説的な神具の威い名めいを、偽にせ物ものが受け継ぐ。珍しくもない話だ。清秋院恵那の佩はい刀とうがオリジナルだと考える方

がどうかしている。

　しかし、あの神刀に感じた神こう々ごうしさが、エリカに訊きくまでもない質問をさせていた。

　はたして甘粕は、うーんと難しい顔をしてみせた。

「本物の定義によりますね。三種の神じん器ぎのひとつで、やんごとなき血筋の方々が受け継いできたものかという考古学的な意味では偽物です。ただ、あれはねェ……」

「あれは？」

「本物にも等しい宝である、とだけ言いましょう。それ以上は企業秘密ですな」

「了解。メイドインジャパンの底力と解釈しておくわ」

　媛巫女や正史編纂委員会には、まだまだ厄介な謎なぞが数多くあるようだ。

　エリカは気を引き締めた。

　ゴルゴネイオンや『プロメテウス秘ひ笈きゆう』。甘粕の言葉が正しいとすれば、ああいった神具に負けないほどのポテンシャルを天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎは秘めているはずだ。

　しかし、あれらはそもそも、神々が自分たちのために造った道具なのだ。

　人間に扱えるものではない。使えたとしてもおそらく死ぬ。草薙護堂がカンピオーネにならなければ死んでいたように。

「恵那さんの秘密がますます気になるわね。ちなみに、ここは詳しく訊いてもいいところ？」

　甘粕は肩をすくめて沈黙するだけだった。語るつもりはないらしい。

　仕方ない。エリカは話題を変えることにした。

「それはそうと、あなたと恵那さんって同門よね？」

「腕前はあちらの方がかなり上ですがね。私、荒事は苦手なんですよ」

「わたしの聞いたところによると、甘粕さんは武芸よりも術の方が得意らしい……という話だったけど、そういうことなの？」

　おどけるエージェントの懐に、軽く踏み込んでみる。

　この男が隠している実力には、かねてより興味を抱いていたのだ。

「買いかぶりです。私なんかは結局、ただの使い走りですから。それほどたいした能力は要求されないんです。それだけの話ですよ」

　甘粕のおとぼけに、エリカはおざなりにうなずいた。

　今夜はこの辺りが潮しお時どきだろう。あとはこの油断ならない青年が明かした情報を手がかりに、こちらでも調査を進めて、裏を取り——。

　代金を置いて席を立ったエリカは、貴婦人らしく優雅に笑いかけた。

「楽しいおしゃべりだったわ。また機会があったら、お会いしましょう」

「私としては、あんまり個人的な面会はしたくないんですがねェ。ああ、あと恵那さんはみなさんの学校に何か仕掛けを施ほどこしているようです。どんな類たぐいのものかは存じませんが、神刀の遣つかい手たる媛巫女の仕込み——油断は禁物でしょうな。ご注意を」

　最後に重要情報を告げて、甘粕はウインクしてみせた。

2

　放課後を迎えた城じよう楠なん学がく院いん。茶道部の活動場所である茶室では——。

「のんびりお茶を飲めるのはいいねェ。山んなかだと、お湯を沸かすだけで大変だしさー」

　ほう。深く息を吐き出しながら、清せい秋しゆう院いん恵え那ながつぶやいた。

　彼女の手には、自みずから点たてた抹まつ茶ちやの器うつわがある。そのご相しよう伴ばんにあずかっているのは、茶道部の部長・花はな房ぶさあかりと万ま里り谷や祐ゆ理りだった。

「ですが、部外者である恵那さんが堂々とお茶室に出入りするのはどうかと……」

　恵那は猫や猿さるにも匹ひつ敵てきしそうな身軽さの持ち主である。

　その特技を駆使して不法侵入する彼女の姿が、祐理にはまざまざと想像できた。

「部外者はひどいなあ。部長さんはじめ部員のみなさんにはちゃんと挨あい拶さつするし、今日なんかは貢みつぎ物ものもバッチリ持ってきたんだから。せめてお客さん扱いしてよ」

「み、貢ぎ物ですか⁉」

　驚いた祐理は、花房さんに目を転じた。

　すると心やさしい茶道部部長が、はにかみながら白状する。

「そ、そうなの～。さっき清秋院さんからいろいろいただいちゃった。お抹まつ茶ちやでしょ、お菓子でしょ、それからお道具なんかも！」

「もしかして、ここに出ているのは清秋院家の……」

　祐理は、今使われている茶器を眺め直した。

　見たことのないものばかりで、実は気になっていたのだ。部活動で使用するには明らかに分不相応な、品格すら漂わせる品々だった。

「ああ、気にしないで。うちの実家で使ってないのをばあちゃんに

送ってもらっただけだから。やっぱり道具は実際に使わなきゃダメだよねー」

「たしかにそうですが、よいものにはそれにふさわしい置きどころがあります！」

「ま、万里谷さん。も、もしかして、どれも結構お高いものだったり？」

「んー、たいしたことないんじゃない？　どれもお金出せば同じの買えるらしいし。高いのでも百万か二百万くらいじゃ……って、部長さんしっかり⁉」

　タイミングの悪いことに、花房さんはちょうど茶器のひとつを手に持っていた。パニックを起こしかけた彼女を、祐理と恵那はふたりがかりで介かい抱ほうした。

　その後、すこし頭を冷やしてくると言って花房さんは外へ出ていった。

　広い茶室で、ふたりきりになる媛巫女たち。

　今日は金曜日。本当なら茶道部の活動日ではないため、他の部員はいなかった。

　祐理がやってきたのは、恵那に電話で呼び出されたためである。ちなみに花房さんがいたのは、部長である彼女はここの掃除をするのが日課だからだ。

「ところで……恵那さんはどうして、私たちの学校にまたいらしたのですか？」

　つい咎とがめるように祐理は訊いてしまった。

「この間は私、恵那さんのせいで護堂さんにあんなことを——」

「でも、そのおかげで王様との仲がちょっと進展したでしょ。よかったじゃん」

「よ、よかっただなんて！」

　たしかに、あの騒ぎのおかげで護堂との間の気まずさは解消でき

たのだが。

　それを素直に喜ぶ余裕は、祐理にはまだなかった。また、エリカと恵那の間で何が起きたのかが心配だった。

「本当に、エリカさんとは何もなかったんですね？」

「ないない。あのときだって、ふたりでちょこっと話をして、すぐに別れたんだから」

「ならどうして、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの気配がしたのですか？」

「ちょっと見せてあげただけだよ。それだけだって。祐理は心配性だなー」

　お気楽そうに受け答えする恵那を、祐理は鋭く見み据すえた。

「エリカさんは多少傍はた迷めい惑わくなところはありますが、護堂さんの……『王』のために尽くしている女性です。彼女に妙な手出しをされた場合、彼の逆げき鱗りんに触れるのは必至。それをお忘れにならないでくださいね。私の、衷ちゆう心しんよりのお願いです」

「わかってるわかってる。まかせて」

　本当にわかっているのか、聞き流しているだけなのか。

　今ひとつ判然としない恵那を前にして、祐理はため息をついた。

　このような恫どう喝かつまじりの警告は、本来なら正せい史し編へん纂さん委員会の役割である。今回、彼らの動きが妙に鈍にぶく思えるのは気のせいだろうか。

「祐理さ、変な悩みごとしてるようだけど、もっと大切なことがあるでしょ？」

「た、大切なといいますと？」

　いきなり恵那に言われたため、祐理は狼ろう狽ばいした。

「草くさ薙なぎさんとの仲を進展させること。ふたりそろって嫁入

り宣言も済ませたことだし、次は……そうだなァ、やっぱりデートか」

「デート!?　わわ私に、護ご堂どうさんと逢い引きしろとおっしゃるんですか!?」

「うん、そう。ランデブーとも言ったよね、たしか？」

「駄目です！　まだ結婚もしていない男女がすることではありません！」

「結婚前にやるのが普通のはずだよ。大丈夫、いっしょに誘いに行こう。右に祐理、左に恵那、両手に花ってことにすれば、草薙さんもきっと喜んでくれるはずだよ」

　にんまりと無む邪じや気きに笑って、恵那が立ち上がった。

　そのまま祐理の手を引っぱる。エリカのように魔術で筋力を増強させているわけではないが、それでも結構腕力がある。強引に立たせられてしまった。

　かくして媛ひめ巫み女こふたりは、護堂の姿を探して校内をさまよいだしたのである。

　一方、その頃の草薙護堂は——。

「というわけで第二回、草薙護堂は学園の二大美少女＋ニューカマーを独占するクズ野郎だ審議会をはじめたいと思う。皆の衆、準備はいいか？」

「問題ない。非モテの敵・草薙護堂に正義の裁さばきを下してやろうぞ！」

「有無。我々は恋愛共産主義の平等思想に基づいて、ブルジョワジーを糾きゆう弾だんしてくれるわ！」

　そんな妄もう言げんを吐はく男子三人組によって、囚とらわれの身となっていた。

　放課後、麻袋を頭からかぶせられて拉ら致ちされたのだ。

　押し込まれた場所はどこかの空き教室。そこで護堂は手足をガムテープでぐるぐる巻きにされて、床にすわり込んでいた。周囲で浮かれる三人は、いずれも紙袋をかぶって顔を隠している。しかし、彼らの素す性じようを看かん破ぱした護堂は、冷徹な声で言った。

「名な波なみ、反そり町まち、高たか木ぎ……おまえらがここまでバカだとはうすうす察していたけど、改めて再認識したよ。とにかく、今ならまだ罪は軽い。おとなしく俺を解放しろ」

　すると三バカは、それぞれの紙袋に開けたのぞき穴×二越しに護堂を見下ろした。

「バカ者、我々はそんな名前ではない」

「うむ。貴様の同級生などでは断じてないのだ」

「我らは国を憂うれえ、民たみを慈いつくしむ正義の徒。変な誤解はしないでもらおうか」

　護堂は確信した。この世に究きゆう極きよくのバカがいるとしたら、きっと目の前の三人だ。

「えーと……よくわからんが、おまえたちにもいろいろ言い分があるんだろう。俺に至らないところもあったはずだ。だから、文句があるなら全部言え。きちんと聞いてやる」

　こいつらから、できるだけ早く解放されたい。

　その思いにまかせて、護堂は平和的に申し出た。だが三バカは「けっ！」とやさぐれた罵ば声せいを発し、忌いま々いましげな態度を崩さなかった。

「外道のくせに、あいかわらず口だけは綺き麗れい事ごとを言うヤツだな……。ならばまず、この夏休みに犯した罪業を白状してもらおうか」

　夏休み？　反町の追及に、護堂は焦あせりを感じながらも平静を装った。

　サルデーニャ島での合宿生活について知られたら、どんな誤解を受けることか。ここは慎重に受け答えしなくてはなるまい。

「俺、夏休みは普通に、おとなしく暮らしていただけぞ。変なことを気にすんなよ」

　当あたり障さわりのない逃げ口こう上じようように、名波が「ほう」とつぶやいた。

「ならば同志Ｓよ。調査結果を報告してくれ」

「草薙の地元である根ね津づ三丁目商店街において、夏休みの前半——七月下旬から八月の上旬にかけて、こいつの姿が目撃されていない」

「ふむ。まずダウトその一だな。では同志Ｔ、君の方はどうだ？」

「同じ頃、それまで本ほん郷ごう通り近辺にて頻ひん繁ぱんに報告されていたエリカさまの目撃情報が途絶えている。さらに万里谷さんまで、同期間に催された茶道部の部活動には不参加……。私見を言わせてもらえば、この時点で草薙は限りなく黒に近いと思われる」

「ダウトその二、その三か……」

　勿もつ体たいぶった声で名波がつぶやき、護堂の顔をのぞき込む。

「なあ草薙。貴様もしや、この一夏をエリカさまや万里谷さんといっしょに旅行して楽しく過ごしちゃった、キャハ……それ何てギャルゲ状態だったのではないだろうな？」

「そんなわけないだろ！　バカも休み休み言え！」

　わざわざ夏休みの足取りを調べるとは、こいつらはどれだけ暇ひまなのだ。呆あきれながらも否定する。この場合、ウソも方便と言えるだろう。だが——。

「同志Ｓ、ウソ発見器の反応はどうだ？」

「大ウソだな。オレの心のウソ発見器に、ビンビン反応してやがる。こいつは草薙のヤツに、天てん誅ちゆうをくだしてやる必要があるぜ！」

「うむ。今こそ外道死すべし！　この色狂いに正義の鉄てつ槌つい

を！」

　というのが三バカの結論だった。護堂は絶叫した。

「こら待て、心のウソ発見器って何だよ！　ただの当てずっぽうじゃないか！」

「失敬な。これは身も心もピュアな彼女いない歴＝年齢の男子にしか使えない、いわば魔法のようなもの。貴様のような汚れた輩やからには、到底たどり着けない境地よ」

　などと、反町がわけのわからないことを言う。

　つくづく呆れながら、護堂は苦情を言うために口を開きかけた。

「狼ろう藉ぜきはそこまでだ、下げ郎ろうども。ずいぶんと好き勝手にやってくれたようだな」

　そこで教室のドアが開き、凛り々りしい少女の声が割って入った。

　リリアナ・クラニチャール。東とう欧おうの血を引く銀髪の騎き士しが馳はせ参さんじてくれたのだ。

「草薙護堂、ご安心ください。このような輩はすぐに片づけてくれましょう」

「すまないリリアナ、恩に着る！」

　頼もしい騎士の参上に、護堂は感謝の意を伝える。

　するとリリアナは照れくさかったのか顔を背そむけ、憎まれ口を叩たたいた。

「これも我が務めのひとつ、礼など不要です。あなたの姿が見えなかったので、念のため探してみてよかった。……これに懲こりたら、なるべくわたしのそばから離れないようにしてください。その方が、余計な仕事が増えなくて助かります」

　苦笑しながら護堂がうなずいていると、三バカが色めき立った。

「ずいぶんと自信があるようだが、たったひとりで何ができる⁉

こちらは三人、多た勢ぜいに無ぶ勢ぜいだぞッ。ハハハハハハ！」

「べつにあなたたちが三百人でも軽く蹴け散ちらすだけだ。埒らちもない」

　安っぽい悪役じみた脅きよう迫はくへ、リリアナは見下すように言い返した。

　ノータイムの返答に、三バカがあからさまにうろたえる。彼女の腕っぷしを知るはずはないのだが、青き騎士の迫力に気け圧おされたようだ。

「ま、待ってくれリリアナさんッ。オレたちは草薙の罪を糾きゆう弾だんしていただけなのだ！」

「バカバカしい。草薙護堂は正しい志こころざしを持ち、王道を往ゆく御お方かた。そのような方に対して糾弾などと、むしろあなたがたが恥を知るべきだろう」

　高木の言い訳にもリリアナは容よう赦しやない。すると、反町が意を決して詰め寄った。

「い、異議あり！　草薙が正しい心を持つという主張に異議ありだ！　この男は幾人もの女子をたぶらかし、もてあそぶ外道ッ。まさに色魔、女の敵とは言えないか!?」

「その程度の讒ざん言げんで、わたしを翻ほん意いさせるつもりか。嘆かわしい輩だな……」

　憮ぶ然ぜんとするリリアナの姿に、なぜか護堂は不安になった。彼女の口からとんでもない反論が飛び出てきそうな気がしたのだ。

「たしかに彼は稀き代たいの色好み。気まぐれに女によ人にんと戯たわむれ、数々の名花を手た折おるハレムの主人であることは否定できない事実だ」

　事実じゃない。まず、その設定がまちがっている。

　護堂のダメ出しにも気づかず、リリアナは悲しげにささやく。

「わたしだって、女遊びは程ほど々ほどにすべきだとご忠告したい。永遠の絆きずなを誓い、おそばで健けな気げに控え、全すべて

を彼に捧ささげる女人ひとりを伴はん侶りよにすべきだと訴えたい。だが、そのように奔ほん放ぽうな性せい癖へきも彼という人間の一部である以上、認めるしかないではないか！」

　と、つらそうに顔を背そむけながらの宣言。

　いや、そんなダメ男はとっとと見捨てた方がいい。そう護堂はすすめたくなった。

「女が原因で彼が破は滅めつする危険性は残念ながら高い……。だが、どんなときでもわたしだけは彼の支えとなり、必ず彼を救うと誓ったのだ。この想いがある限り、わたしの心は卑ひ怯きような讒言などでは揺るがない」

　リリアナの言葉は力強く、心を打つ真しん摯しさに満ちあふれていた。

　ただし、ヒモか結婚詐さ欺ぎ師しにだまされている女性が口にしそうな内容だったが。三バカたちも同感だったのか、声を大にして反論する。

「だまされている女はみんなそう言うんだ。『彼には自分がついてないと』って！」

「目を覚ませ、リリアナさん！」

「そうだ、世の中にはもっといい男がいくらでも……！」

「勘かんちがいしないでほしい。わたしと草薙護堂は安っぽい男女の仲などではない。わたしは彼の騎士、そして永遠を約束し合った終生の伴はん侶りよ。どこまでも共に寄り添い、どんな窮きゆう状じようにもふたりで立ち向かおうと誓い合った、そういう間柄だ」

　いつしかリリアナはうっとりと、夢見るような独ひとり語がたりに入っていた。

「彼の女遊びで、わたしはきっとたくさん苦労するのだろうけど……。でも、それがかえってふたりの絆を強め、わたしだけが彼の特別な存在になるはず。そして、どんな女と遊んでいようと最後に帰ってくるのは必ずわたしの胸のなかで……♪」

　彼女が語る男は、数世紀前のイスラム圏けんを支配していたスル

タンか何かなのだろう。草薙護堂とはまちがいなく別人のはずだ。

　護堂は現実逃とう避ひしながら三バカに目をやった。彼らは泣いていた。

「畜ちく生しよう、ハーレムは公認かよ！　天よ、あなたはなぜこのような不平等を許すのですか！」

「調教か？　これは一八歳未満には許されない、調教的な何かの成果なのか!?」

「オレ、今泣いてるの……？　これが涙？　くそっ、絶望した！」

　と、三人そろって打ちひしがれている。そんなとき、またも教室のドアが開いた。

「ああ、いたいた。探したよ、草薙さん」

「そ、その、お邪じや魔まいたします」

　新たに二名の女子が現れた。清秋院恵那と万里谷祐理の組み合わせだ。

「えーと悪い、取り込み中なんだ。話ならあとでいいか？」

「かんたんな話だから、すぐ終わるよ。明日さ、うちら三人でデートしようって誘いに来ただけだから。草薙さんと祐理と、あと恵那の三人でいっしょに」

「デートだって!?」

　唖あ然ぜんとする護堂の視線の先では、祐理が首筋まで真っ赤になっていた。

「恵那さん！　わたし、護堂さんと逢い引きなんて……まだ心の準備が！」

「できてなかったら、ここで済ませればいいよ。せっかくふたりで草薙さんの『女』になることにしたんだからさ、ガンガン積極的にいかないとね！」

　そんな会話を聞いて、反町の肩がぴくりと震えた。

「オ、オレの耳はどうかしちまったようだ。火星語なんて受信していやがる。ハハハ、この反町さまもヤキがまわったな。ふたりいっぺんにだなんて、どこの同時攻略ルートだよ……」

　盟めい友ゆうが詠えい嘆たんすると、今度は名波がうつろな声でつぶやきだした。

「き、気を確かに持て。あの娘はきっと妖よう精せいとか幻げん覚かくとか、そういうファンタジー的な何かなのさ。考えてもみろ、冴さえない男子高校生のところに婚約者や恋人志望の美少女が突然押しかけてくるのは、おとぎ話のなかだけってのが相場だからなッ。オレたちは今、壮大な夢の一部に取り込まれているんだよ……！」

　ふたりとも、現実から必死に目を背そむけている。

　もしかして自分のせいなのか。護堂が無性に申し訳なく思いはじめたときだった。

「う、うおおおおおおおお！」

　いきなり高木が咆ほう哮こうした。

　仁に王おう立だちになり、一八五センチの巨体をわなわなと震わせている。

「オレは認めないっ。こんな悲しい世界、こんな理り不ふ尽じんな結末を、決して認めはしない！」

　叫びながら、まだ拘束されたままの護堂をひょいと抱え上げた。

「差し当たっては、草薙。オレといっしょに死んでくれ！」

「ちょっと待て、どうしてそうなる⁉」

「おまえの存在は世界の秩ちつ序じよを破壊する。おまえは世界の破壊者——生きていてはいけない存在なんだ。オレといっしょに安らかに眠るがいい！」

　やたらと悲壮な決意を語った高木は、護堂を肩にかついで爆走を開始した。

教室を出て、廊ろう下かを走り抜け、階段を駆け登っていく。

剣道部で鍛きたえた肉体の持ち主ではあるが、この暴走っぷりは明らかに異常だ。

「落ち着け、高木！　何がおまえをそこまでさせているんだ!?」

「そんなこともわからんのか！　この星に生きる全ての悲しい男たち——愛を知らず、二次元以外の女子から隔かく離りされた者たちの怒りと悲しみが、オレに力を分けてくれるのだ！」

護堂をかついだまま、高木は一気に階段を駆け抜けていく。

リリアナですら呆ぼう然ぜんと見逃すしかなかったほどの速さと勢い。それは、常人の域を超えて人間の限界に挑もうとする男の姿であった。

3

そして屋上へ——。

護ご堂どうをかついだ高たか木ぎは、暴走の果てに校舎の最上部へと到達した。

「ここまで来れば、もう十分だろう……」

屋上の端っこ、安全のために設置された柵さくのそばまで来て、高木がつぶやいた。

不安定な状態の護堂は、遥はるか下方のグラウンドを見てゾッとした。

「十分って、何が十分なんだよ!?」

「もちろん、この高さから飛び降りれば、オレも草くさ薙なぎも十分に死ねるという意味でだ」

「無理心中なんかしたら、おまえの家族も悲しむぞ！　だからここは穏おん便びんにな!?」

「ふ……我が家の妹は、おまえんところの静しず花かちゃんとはちがうのだ。毎日『アニキ超ダセェ、死ねよ』とか言われてみろ。この世への未練などきれいに失うせてしまうわッ」

　そのとき、背後から忍び寄ってきた人物がエイと手刀を繰り出した。ビシッ。首筋を打たれた高木は、うーんと唸うなって倒れ込む。

「うわあッ！」

「大丈夫だった、護堂？　間に合ってよかったわ」

　高木を眠らせ、屋上のコンクリートに投げ出されそうになった護堂を空中でキャッチしたのは、エリカ・ブランデッリだった。

「あなたが拉ら致ちされていくのを見かけて助けに来たのだけど……余計なお世話だった？」

「い、いいや。助かったよ……礼を言う、ありがとう」

　金髪の美少女にやさしく下ろされ、手足を縛しばるガムテープを引き裂いてもらいながら、護堂は礼を言った。

「感謝は行動で示してもらいたいわね、護堂」

「俺にできる礼なら、たいていのことはしてやるけど……何をしたらいいんだろうな？」

　深く考えずに答えると、途端にエリカが苦笑した。

「あなたのそういう、義ぎ理り堅がたいけど軽けい率そつなところをとても愛いとおしく思うのだけど、ちょっと不用心よね。もっと時と場合を選んで、気前よくなった方がいいわよ」

　情愛深い忠告に、護堂はちょっと不安になった。

　命を救われた（？）感謝の気持ちにまかせて言ったのだが迂う闊かつだったか？

　エリカがやさしく微笑ほほえみかけてくる。が、この笑顔の邪じゃ悪あくさが三割ほど増せば、人をもてあそんでは愉ゆ悦えつにひたる『悪魔の微笑』のできあがりだ。

　美しき救い主が愉たのしそうに口を開きかけるさまを、護堂が見守っていたとき。

「草薙さん、無事？　今助けに来たよ——って、遅かったか」

　陽性の声が屋上に響く。このよく通るソプラノは、清せい秋しゅう院いん恵え那なのものだ。

「さすがエリカさん、いいタイミングは見逃さないなァ」

「お誉ほめの言葉、恐きよう縮しゆくだわ。恵那さんこそ、なかなかすばやくていらっしゃるのね」

　屋上まで駆け上がってきたにしては息すら弾はずませていない恵那と、赤みがかった金髪をかき上げながら気取ってみせるエリカ。

　友好的な言葉が行き交う割に、微妙なトゲが混じっているような——。

　護堂はいぶかしんだ。このふたり、一体どういう関係を築きつつあるのだろう？

「ま、一件落着したなら、いいか。じゃあ草薙さん、さっきの返事聞かせて。恵那と祐理と草薙さんの三人でデートに出かける話。みんなで親しん睦ぼくを深めようよ」

　あっけらかんと恵那が訴える。

　デート。そういえば、草薙護堂は今までデートなる行事を体験したことがない。

　エリカとはふたりきりで各地を歩き回ったが、いつもそんな雰ふん囲い気きではなかった。それなのに、女子ふたりといきなり初デート。しかも、その双方が平均的水準を大きく上回る容姿と魅力の持ち主で——。否いな。断固として否だ。

「拒否させてもらう！　君たちと俺がデートする理由なんて何もない！」

「理由ならあるよ。恵那と祐理は、ふたりそろって草薙さんの女になるんだから。いっしょに面倒見てもらわなきゃいけないし、どんどん仲よくなっていかないとさ」

　この娘は何てことを堂々と言うのだ⁉

　女になる云うん々ぬんの部分で、護堂は己が赤面するのを自覚した。

「仮にデートをするとしても、ふたり同時なんてダメだろ！　世間が許してくれない！」

「世間は関係ないよ。大切なのはうちら三人の気持ちだからね。……あ、でも草薙さんが最初はひとりずつがいいなら、まず祐理とデートしてもらって——」

　何を言っても軽やかにかわされてしまいそうな——。

　そんな絶望感を、護堂は味わった。

　エリカのような口のうまさ、巧たくみな交渉術は恵那にはない。その代わりにこの媛ひめ巫み女こには、あらゆる局面で我が道だけを往ゆく天性のたくましさがある。

　対たい峙じする敵の手強さにたじろいだとき、救いの手が差しのべられた。

「あら残念ね。護堂は明日、わたしとデートをすることになっているのよ」

　発言者はもちろんエリカだ。護堂は暗あん澹たんたる気分になった。

　たしかに救いの手だが、迂う闊かつにつかむとさらなる窮きゅう地ちに追い込まれそうだ。

「わたしね、男の子とデートしたことってないの。だから、最初の一回目はぜひ護堂と共にしたいわ。……もちろん二回目以降も、わたしと同じ時を過ごす特権をあなた以外に許すつもりはないのだけれど」

「いや、俺とエリカの間で、今さらそんなデートだなんて……」

「わたしたちの間だからこそ、デートが必要なの。ふたりで結構あちこちに行ったけど、いつも荒っぽいことばかりで全然楽しめなかったわ。だからね、いいでしょう？」

珍しくおねだりするように、エリカが甘えかかってくる。

もっとも、そんなときでも女王のごとく毅き然ぜんと——上から目線なのが、彼女らしい。

「草薙さん、こっちはふたりいっぺんにだよ。両手に花だよっ」

「護堂、量よりも質よ。このわたしを——エリカ・ブランデッリを独占できるのは、地上であなただけの権利。無む駄だにするような真ま似ねはしないで」

恵那が能天気に呼びかけると、エリカが間近にすり寄ってきた。

耳元に口を近づけての、甘いささやき。——まずい。このままではいつキスの奇襲をしかけられてもおかしくはない。護堂が身をこわばらせる。

だが、今回襲ってきたのは唇くちびるではなく、不吉な警告であった。

「……ついでに言えば、義務でもあるわけだけど。護堂、さっきの約束覚えてる？　たいていの礼ならしてやるってアレ。そうだ、何日か前のお昼で助けてあげた借りもあったわよね。こういうときに義理を欠く男の子って、すごくかっこ悪いと思うわ、正直」

目の前の美び貌ぼうをまじまじと見つめ直す護堂。いつもとはやや悪魔性のベクトルが異なる笑顔で、『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』がうなずきかけてくる。

「エリカ、今それを言うのはちょっと卑ひ怯きようじゃないかと……」

「仕方ないわ。ここまでしないと、あなたはいつも逃げてしまうから。わたしもたまには本気を出さないとね」

無邪気を装って言うエリカが、憎たらしくも愛らしい。

そういえばリリアナが来て以来、金髪の少女が密着してくる回数が明らかに減っていた。祐理の他にも口うるさい人間が増えたので、自じ粛しゆくしているのかと思ったのだが。

もしかして彼女は、状況の変化に合わせてスタイルを変えただけ

だったのでは。

じゃれるように抱きついてくるのを控える代わりに、狙ねらうは一撃必殺。

手数で押すのではなく、必殺のタイミングを計って確実に急所を撃ち抜く。そう、まさに今、護堂を追い詰めている戦法だ。

「草薙護堂、ご無事ですか！　遅れて申し訳ありません！」

「護堂さん、お体の方は——!?」

そこに駆け込んできたのは、リリアナと祐理だった。

なんと、銀髪の少女がか細い媛巫女の体をお姫さま抱っこしている。

おそらく、ふたりで廊ろう下かと階段を駆けていく途中で祐理がへばってしまったのだろう。彼女は普通の女子よりも著いちじるしく体力がないのだ。

そう推すい察さつしながら、護堂はちょっと悲しい気持ちになった。

みんな、高木の心配はしないんだなァ——。

十分に心やさしく慈じ悲ひ深ぶかい少女たちなのに、この有り様。護堂は屋上のコンクリートに横たわるクラスメイトの悲ひ哀あいがすこしだけ理解できた。

「じゃあ全員集合したことだし、改めて……。草薙さん、明日はどっちとデートしたい？　恵那と祐理と三人で楽しむか、エリカさんとふたりきりにするのか？」

恵那が訊きいてきた。その発言内容に、そして護堂にしなだれかかるエリカの姿にリリアナが目を険しくし、祐理が悲しげに目を伏せる。

なぜだか無性に申し訳なくなりながらも、こう答えざるを得なかった。

「ええと、その……。これはエリカとふたりきりになりたいとか

じゃないんだけど、いろいろ込み入った事情があるんで、明日はこいつといっしょに出かけることに……」

　こんな蚊かの鳴くような声でしゃべったのは、いつ以来だろう？

　忸じく怩じたる思いでうつむく護堂の首っ玉に、金髪の美少女が抱きついてくる。

　彼女は天使の笑顔で笑っていたが、護堂にとっては真性の悪魔そのものであった。

4

　その夜、自室のベッドでくつろぎながらエリカは携帯電話に手を伸ばした。

　まず連絡を取る相手は、リリアナ・クラニチャールだ。

「ごきげんよう、リリィ。明日のことで話をしてもいいかしら？」

『あなたが我が主をたぶらかし、淫みだらな行為に耽ふけろうと画かく策さくしている明日のことか……。いいだろう、何か申し開きをするつもりなら聞いてやる』

　不ふ機き嫌げんそうな声が返ってきた。

　エリカは微笑ほほえみながら、会話をつづける。何て単純な子なのだろう、本当に。

「申し開くことなんて何もないわ。愛し合うふたりには、邪じゃ魔ま者ものなしに向き合う時間と場所は必ひつ須すなの。そこで提案があるのだけど」

『提案だと？』

「ええ。あなたはどうせ護ご衛えいとか言って、こっそりついてくるつもりでしょうけど——邪魔だし無ぶ粋すいだから、そういうのは控ひかえてちょうだいね。お願い」

『そ、それはできないッ。草くさ薙なぎ護ご堂どうの安全を確保するために必要な措そ置ちだからな！』

「わたしといっしょなんだから、護衛は十分よ。あなたがこの要請を無視するなら……残念ね。あなたの最新作がインターネットで世界に公表されてしまうかも。わたしとしては、リリィの才能を世に知らしめるチャンスになっていいとは思うけど――」

『さ、最新作？　あなたはまさかアレの存在を……!?』

「どんなストーリーだったかしら、あの小説。ほら、フランスの片かた田舎いなかから旅行に来た女の子がシチリアマフィアを束たばねる美び貌ぼうのボスに捕らえられて、メイドになったり愛人になったりする話。たしか決めゼリフが『この先オレの体なしでは生きられないように……』」

『わーッ！　言うな、言わないで、お願いッ！』

「リリィったら大胆よね。わたし、読みながら恥ずかしくなってしまったわ。おかげで、まだ全部に目を通せていないの。そうだわ、今夜辺り最後まで――」

『読まなくていい！　明日、わたしは家に閉じこもっていればいいんだろう!?』

　半泣きになりながら、リリアナが叫ぶ。

『あなたは悪魔だッ。わたしの秘密を、いつもどうやってかぎつけるんだ、本当に!?』

「それは言えないわ。企業秘密ですもの」

　敢あえて軽い調子で、エリカは答える。一応、リリアナも身内の裏切りを疑って創作ノートの隠し場所を工夫しているそうだが、今のところカレンの方が上うわ手てだった。毎回きちんとコピーを作って、送り届けてくれる。

　この通話を切ったあと、エリカはつづけて祐理の携帯に電話をかけた。

『はい、万里谷ですが……エリカさん、どうかなさいましたか？』

「今ちょっといい？　明日のことだけど、あなたたち——つまり、祐理と清秋院恵那はわたしと護堂のあとをつけてみようとか考えてたりする？」

　人のよい媛ひめ巫み女こはごまかしたりできないはず。

　その確信にまかせて、ストレートに訊きいてみる。はたして祐理は声をうわずらせて、

『そ！　そんなはしたない真ま似ねはいたしませんっ。それではのぞきではありませんか！』

「祐理はともかく、恵那さんならやるかもと思ったのだけど」

『いいえ。恵那さんはその、そういう細かな考えを巡らさないと言いますか……』

「要するに、智ち力りよくじゃなくて本能にまかせて行動するタイプなのね」

　普通、この手の敵は恐れるに値あたいしない。だが、人間のくせに野獣じみた直感を持つ者が稀まれに存在する。彼らはしばしば常識の通用しない難敵となる。

　そして残念なことに、清秋院恵那はその稀き少しよう種しゆにちがいなかった。

『……あの、エリカさん』

「何？　安心しなさい。わたしは祐理がいろいろなしがらみを持っていると承知のうえで、護堂のそばにいるのを認めているのよ。あんな女が出てきたからって除のけ者ものにはしないわ。護堂とのことだって、いい頃合になったら上う手まくいくように取りはからってあげるから」

　自分の持たない巫女的資質に恵まれ、驚異的な霊視術の素養まで所持する少女。

　エリカにとって、祐理は日本で見つけた絶好の補佐役だった。

　前にリリアナが、自分はあらゆる局面で役に立つと言った。だがエリカと祐理のコンビの方が、総合力では遥はるかに上なのだ。

　ユーティリティー性にすぐれた青き騎士に対抗するためにも仲たがいは避けたい。

　何よりこの巫女には、貴重な能力にも負けないほどの長所がまだある。

「エリカ・ブランデッリはね、一度面倒を見ようと思った子を見捨てるような真ま似ねは今までしたことがないの。信用してくれるとうれしいのだけど」

『わ、私もエリカさんは困ったところもありますけど、頼もしい方だと信頼しています』

　恥ずかしげに祐理が告白する。なかなか可愛かわいらしい。

『ただ、恵那さんも昔からの大切なお友達なので、おふたりにはできれば仲よくしていただきたいと思っています』

「わたしには事を荒立てる気はないのだけど、あちらが絡からんでくるのよね」

『すいません……あの人には面白半分で悪戯いたずらするところが昔からあるので……』

「ま、恵那さんが友好的にしてくれるのなら、わたしの方から突っかかる気はないわ」

『ありがとうございます。では長くなりましたので、そろそろ電話を切りますね。……あ、でも最後にひとつだけよろしいでしょうか？』

「どうぞ。何かしら？」

『その……エリカさんは先ほど、護堂さんとのことを悪いようにはしないとおっしゃっていましたが……。ご心配には及びません。それは、必要なら私が何とかしなくてはいけないことですから——自分でちゃんとしてみせます！』

　祐理が言い切った。おそらく電話の向こうで羞しゅう恥ちに打ち震えながら。

　その姿を想像して、エリカは微笑んだ。この巫女は多少口うるさ

いが性格も温厚だし、慎つつしみ深い。いっしょに行動するときも、こちらに主導権を預けてくれるはずだ。

　そして護堂を憎にくからず想っている。だから彼を裏切らない。

　これから半生を共にする盟友としては、申し分のない性格だろう。

　草薙護堂の寵ちようを競うライバルとしては望ましくない側面もあるが、そこは真っ向勝負で上回ればいいだけのこと。やはり、自分に次ぐ二番手はこの子がいい。

　第一夫人と第二夫人で護堂のそばをがっちりと固めて、他の女が入り込む余地をあたえないようにするのだ。浮気程度なら許してもいいが、本気には絶対にさせない。

　まあ、リリアナのように極めて有能な人材であれば、例外を認めてやってもいいが。

　ただし、エリカの優位を認めるのが絶対条件だ。

「そう。なら思う通りにしてみるといいわ。どちらにしても、応援してあげる」

　と言って電話を切る。さて、明日は護堂との初デートだ。

　試ためしに行き先や細かなプランは彼に丸投げしてみたが、どうなるだろう？　楽しみに思いながら、エリカは珍しく早寝することに決めた。

第５章　デートの行方

1

金曜日の夜、護ご堂どうは自室で煩はん悶もんしていた。

デート。人生初のイベント。しかも相手は、誰あろうエリカ・ブランデッリ。

彼女は言った。『そうね。せっかくだから護堂の手並みを拝見させてもらうわ。明日のプランは全部あなたにまかせるから、よろしくね。……わたしを退屈させたら駄目よ』と。

なんて無茶振りだ。女の子——しかも、あのエリカをどこに連れていけば、満足させられるのか。そんな見当、つくわけないのに！

この煩悶を中止させたのは、携帯電話の着信メロディだった。

液晶画面を眺めた護堂は驚いた。懐かしい名前が表示されていたからだ。

「ひさしぶりだな、三み浦うら。元気にしてたか？」

『まあ、何とかな。おまえこそちゃんとやっているか？』

硬式野球をやっていた中学生時代の盟めい友ゆう、三浦からの電話だった。

東とう京きよう屈くつ指しの速球投手として名を馳はせた男だ。今は都内の高校に通っている。もちろん部活は野球部。なかなかの名門で、今年は甲こう子し園えんにも行った。

『ところで草くさ薙なぎ、もちろん観みたんだろうな、あれ？』

　あれとは何のことだろう？　護堂は首をかしげた。

『ほら、あれだよ、あれ。何ていうか、オレの雄姿みたいな、晴れ姿みたいな！』

「……ああ！　甲子園出場おめでとう。まさかおまえが一年生なのにマウンドに登るとはなァ。全然予想していなかったよ」

　甲子園に出場した三浦の高校は、結果として二回戦敗退に終わった。だが敗色濃厚な最終回、マウンドに向かったのは何と三浦だったのだ。

『え、そうか？　ま、まあオレは必ず出番があると信じていたけどな。うわははは！』

　いきなり機き嫌げんよくなった。わかりやすい男だ。

　しかし、この試合の中継を見ていた護堂には、めでたいだけの話には思えなかった。三浦の登板は戦況を変えることもなく、しかも最後の展開ときたら……。

「いや、三浦の登板はたしかによかったけどさ。おまえがキャッチャーのサインに首振った直後の球を２ランにされて試合終了だろ？　どうせカーブのサインに首振ってストレート投げたんだろうけど、あそこであれはなァ……」

『う、うるさいよ！　捕手やってたわけでもないのに、適当に言うな！』

　そうでもない。三浦の癖くせも好みも知り尽くしている護堂には察しがついていた。

　まあ、何はともあれ旧友の活躍（？）はよろこばしい。

『それはともかく本題に入るぞ。めでたく甲子園出場を果たした我が校は、来年に向けたチーム作りの真っ最中なわけだが……今日、監督の奥さんが赤ちゃんを出産した』

「そりゃめでたい。けど、俺と何の関係が？」

『いいから聞け。そこでだ、ジュニア誕生を記念して特別に恩おん赦しやが出た。明日、なんと練習が休みになるんだよッ。完全に、丸一日！　入部以来初めての完全休暇！』

「おお、それはたしかに恩赦だな」

　甲子園を目指そうという体育会系野球部が、花の土曜を休むなど普通はありえない。

　こういう事情なら三浦の浮かれようも理解できる。

『というわけでだ。明日は遊びに行くから、草薙もつきあえ！　すでに瑠る偉いと中なか山やまには話をつけてある。しかも瑠偉のヤツが、ちょうどいいイベントがあるって言っている。ひさしぶりに昔の面メン子ツで一暴れしようぜ！』

「瑠偉と中山もか!?」

　思わず身を乗り出した。このふたりもシニア時代の仲間だ。

　所属チームはべつべつだったが、東京選抜では同じユニフォームを着て戦った。どちらも護堂と同じく、野球を離れたと聞いていたが——。

　ひさしぶりに昔なじみと集まれる。たしかにいい話だ。

　そう思いながらも、護堂は肩を落とした。ダメだ、明日はエリカとのデートがある。

　だが、三浦の語るイベントとやらの詳細を聞くうちに考え直した。

『……そういう感じだから、あとひとり呼びたいんだよな。けど、他の連中はみんな野球の部活があるからダメっぽいんだ。適当に他よ所そから連れてくるか……』

「それなら俺に心当たりがある。最後のひとりはまかせてくれ」

　力強く確約しながら、護堂はホッとした。

　これで明日のデートは大丈夫だ。エリカも勝負事やスポーツは嫌いじゃないし、きっと楽しんでくれるだろう。何とかなりそうでよ

かった。

　——もちろん護堂は、これが世に言う墓ぼ穴けつであるとは理解していなかった。

　そして運命の土曜日、朝の八時半過ぎ。

　足あ立だち区内の区営グラウンド。その敷地内にあるフットサル場。今日開催されるアマチュアフットサル大会の会場となった、この施設で——。

　エリカ・ブランデッリは憂ゆう鬱うつそうにため息をついた。

「あなたに全すべてを委ゆだねたのは、たしかにわたしなのだけど……」

　金髪の白人美少女。さらに丈たけの短いスポーティなワンピースにボトムを合わせた格好が、スタイルのすばらしさを浮き彫りにする。おかげで彼女は目立ちまくっていた。

「まあ、動きやすい格好で集合、着替えも持参と聞いた時点でイヤな予感はしていたわ」

　今朝早く、電話でアリアンナに伝言を頼んだ内容だ。

　それを繰り返すエリカの口調は、これ以上ないほど皮肉っぽかった。

「百歩譲ってフットサル大会に参加というのを大目に見るとしても、これはないわ。ありえないと言ってもいいわね。あなたの無ぶ粋すいさをみくびっていた、わたしの失敗」

　人をさんざんコケにしながら、エリカはひさしぶりに集合した護堂の仲間たちを見やった。

　まず三浦。高一にしては体格のいい、なかなかの速球投手。

　ついで瑠偉。線が細く、男のくせに可愛かわいらしい顔立ちだ。元セカンドで一番。

　そして中なか山やま。蓬ほう髪はつと引き締まった体つきが野の武ぶ士しを思わせる、元レフトの強打者。

　彼らも護堂を咎とがめる目つきだった。かつての盟友と再会した喜びなど皆かい無む。まるで、厄やつ介かい者ものと対たい峙じしたかのような——。

「わたしは護堂とデートをしたかったの。だというのに、こんなお邪じゃ魔ま虫むしが三人もいたんじゃお話にならないわ。本当にあなたって気が利きかないのね！　呆あきれてしまうわ！」

「甲こう子し園えんに出たオレよりも先にカノジョ……しかも外人……」

　エリカが責め立てる横で、三浦は廃人のようにつぶやいていた。

「草薙くんて、昔からそういうところあったよね。女は苦手みたいな顔して、ちゃっかりいちばん可愛い女子につきまとわれてさ。変わってないなァ、あいかわらず」

　おまけに瑠偉も訳知り顔で肩をすくめており、

「裏切り者め……」

　中山まで大粒の涙を流していた。ワイルドな外見の割に泣き虫なのだ。

　しまいには、護堂以外の全員がため息をついた。

「もう。これだから護堂は駄目なのよ。鈍にぶいし、気が利きかないし、無粋だし！」

　皆を代表するようにエリカが言う。男三人が強くうなずく。

　なぜだ？　護堂は困惑した。なぜ自分がここまで言われなければならない。

「ま、でもせっかく来たんだし、大会だっていうことだし、逃げるのも性に合わないしね。いいわ、フットサル？　あなたたち、わたしの足を引っ張っては駄目よ。このエリカ・ブランデッリ、無能は大目に見るけど足手まといは我が慢まんできない性格なの」

　気持ちを切り替えるようにエリカが言った。

　出会った当初を思い起こさせる、挑発的な口調。ある意味でこれも彼女の真しん骨こつ頂ちようだ。

「草薙、おまえのカノジョ無茶苦茶えらそうだぞ！　何だありゃ!?」

「す、すまん。俺が怒らせたせいで機嫌が悪いみたいだ。でも、言うだけのことはあるやつだから、よろしく頼む……。あと彼女じゃなくて、ただの友達な」

　金髪美少女の大たい言げんに顔をしかめる三浦に、護堂はあやまった。その光景を眺めながら瑠偉が呆あきれたように苦笑し、中山がぼそりとつぶやいている。

「ま、草薙くんはいずれ女で苦労すると思っていたよ。予想通りだ」

「きれいな子になじられるのって、結構いいな……」

　ともかく、ここに五人の高校一年生が集まった。

　アマチュアのフットサル大会に参加しようと提案したのは、瑠偉だという。

　球技センスの固まりとも言えるこいつは、野球だけでなくサッカーやバスケでもずば抜けた実力を発揮する。中学卒業後はフットサルに転向していたそうだ。

　ちなみに中山は、高校ではなぜか釣り部を選んだとか。

　瑠偉以外は基本的に素しろう人と。対して敵となるチームは大学生や社会人が中心だ。元サッカー選手だった参加者も多いので、まあまあレベルは高そうだった。

　参加五チームによる総当たり戦がはじまる前、エリカは言ったものだ。

「あなたたちの役目は守備をすること、ボールを奪うこと、そのボールをわたしにパスすることよ。あとはわたしが点を取ってあげる。それでいいわね」

またも大たい言げん壮そう語ごである。

チームメイトの三浦は怒り、瑠偉は苦笑し、中山はなぜかうれしそうだった。

護堂がチームワークを大事にしろと言っても、へそを曲げたエリカはツンとそっぽを向いてしまう。普通ならボロボロに惨ざん敗ぱいしそうなものだが、このメンツは快進撃をつづけて準優勝してしまった。

やはり、チーム全員の運動能力がケタちがいなのだ。

エリカは言うに及ばず。残りの連中も強豪シニアでレギュラーを張り、そこから選抜に選ばれるような猛も者さ揃ぞろい。あとはやはり、若さゆえの体力か。

試合も後半になると、運動不足の社会人は一様に足が止まってしまうのだ。

かくして、朝九時からはじまった大会は午後一時頃に終了した。

……区営グラウンドの片隅で護堂がかつての仲間たちと談笑していると、背後からむんずと襟えり首くびをつかまれてしまった。

「ねえ護堂。ようやく余よ興きようが終わったというのに、まだわたしをないがしろにする気なのかしら？　ここからあなたがすべきことは美しい恋人のエスコートではないの？」

シャワーを浴びに行っていたエリカが、いつのまにか戻ってきたらしい。

「こら、いいかげんにしろよ。俺の友達もいっしょなん、だか……ら……」

態度の悪さをたしなめたら、瞳ひとみから焔ほのおが噴き出そうな険しさでにらまれた。

思わず護堂は萎い縮しゆくした。ものすごい迫力だ。



「ここではっきりさせておきたいのだけど、最初にいけないことをしたのはどちら？　あなた？　わたし？　機嫌が悪いから、迅じん速そくかつ正確に答えてちょうだいね」

「や、やっぱり俺、なのかな……」

「『なのかな』は要いらないわね。あなた以外にはありえないもの」

　エリカの舌ぜつ鋒ぽうは鋭するどい。うすうす失敗を悟っていた護堂は、身をすくませた。

「でも護堂は運がいいわ。エリカ・ブランデッリは寛かん容ようの美徳にも恵まれているの。あなたに悔くい改める心があるなら、惜おしみない愛情を何度でもプレゼントしてあげる。どう？」

「え、ええと……じゃあ、俺は一体どうすれば——」

　必死に頭を回転させているこちらを、エリカがにらみつけている。

　護堂は焦あせった。これが野球の——いや、何でもいいから勝負事なら、そして神々や魔王を相手にする決闘の場なら、いくらでもアイデアが浮かんでくるのに！

　すると空気の悪さに耐えかねたのか、瑠偉が言い出した。

「あ、じゃあここはもういいからさ。草薙くんとエリカさんはふたりでご飯に行きなよ！」

「え、草薙をカノジョとふたりきりにさせるのかよ！　オレが許さねえぞ！」

「中山くん、三浦くんをお願い」

「ああ。おとなしく見てろ。出しゃばるな」

　瑠偉の指示で、中山が手早く三浦の口を背後からふさぐ。モゴモゴわめいていたが、よく聞こえない。それを満足そうに眺めながら、元セカンドは快活に言った。

「さあ今のうちに。また会おう、草薙くん。お元気で」

「あ、ああ。悪い……じゃあ行くか、エリカ」

　かつての盟友三人に見送られながら、護堂はエリカとともにグラウンドから去っていった。

2

　かくして護ご堂どうは、この日初めてエリカとふたりきりになったのである。

　とりあえず店の多い大通りを目指して歩く。

「護堂、あなたへの愛に変わりはないけど、それだけでは抑おさえがたいほどの怒りがわたしのなかで渦うず巻まいているわ。ここからの行動には細心の注意を払ってね。いい？」

「俺、そこまでマズイことしたかな……」

「言いたいことがあるなら、はっきりと言いなさい。何なら、どこをどう失敗したのか、昨日の行動から順を追って採点してあげてもいいけど」

「勘かん弁べんしてくれ、俺が悪かった。でも、あいつらにまでキツく当たるのはやめてくれよ」

「これが二回目とか三回目のデートだったなら、心で何と思っていようと、あの男の子たちを完かん璧ぺきにもてなしてあげたわ。でも、今日だけは駄目。認められないわ」

　憤ふん然ぜんと吐き捨ててから、エリカは護堂から目を逸そらした。

「せっかく初めてのデートで、記念すべき日だというのに、あなたったら本当に気が利きかないんだから！　わたしの気持ちも知らないで！」

　参った。あのエリカがここまでストレートに感情表現するとは。

　ぷんぷん怒った顔をツンと背そむけているのは、照れくささもあるのかもしれない。

「わ、悪い。これからは上う手まくやるから、機き嫌げん直せよ」

「いいわよ、あやまらなくても。護堂になんか、最初から期待していなかったんだから！」

　まだ口調がきついままのエリカに、反省の気持ちを粘ねばり強くアピールする護堂。彼女が態度を軟化させるまで二〇分以上もかかった。

　ようやく揉もめ事ごとを終わらせたふたりは、食しよく事じ処どころを探すことにしたのだが。

「アリアンナは今日の分もお弁当を作るって言ったんだけど——」

　助手兼メイドにして同居人の名を、エリカは口にした。

「しょっちゅう学校のお昼で食べているから、やめてもらったわ。せっかくの外出だし」

「まあ、休みの日まで昼飯作ってもらうのも悪いしな」

「それとも、わたしがこの手で作ってあげた方がよかったかしら？」

　エリカの提案に、護堂は即座にかぶりを振った。

「そんなこと、考えたこともない」

　お湯を注ぐだけのカップ麺めんを作った経験すら、エリカにはないそうだ。

　この少女は世渡りが上う手まいし、器用だし、万ばん事じにおいてそつがない。しかし、その本質は祐理すら超えるお嬢さまなのだ。いや、むしろ姫、女王と呼ぶ方がふさわしいか。

　エリカが甲か斐い甲が斐いしく台所に立ち、慣れない手つきで料理に励はげむ。それは微笑ほほえましい光景かもしれないが、この

娘には似つかわしくない。

　護堂はそんなことで苦心するエリカよりも、彼女らしく振る舞うエリカが見たかった。

「そうなの？　でも、そう言われるのも癪しやくね」

「人それぞれってことで、べつにいいじゃないか。それより何を食うかだな」

　飲食店の多い界かい隈わいにまでやってきたので、護堂は言った。

　東京人とミラノ人。食の嗜し好こうが完全一致するはずのないふたりだが、幸いにも偏へん食しよくとは縁がない。どこを選んでもそれなりに満足できるはずだ。

「とりあえず、あそこの中華にでもしておくか？　無難なところで」

　ちょうど目の前に小さな中華料理店があった。

　あらゆる国に進出する華か僑きようは、もちろんイタリアにもいる。あちらに滞在中、彼らの料理店をふたりで何度も利用していた。

「あまり気分じゃないわね。何日か前、似たようなお店に入ったばかりだし」

「そうか。じゃあ、どこがいいかな……」

「たまには日本らしい食事がいいわ。やっぱりスシとかテンプラかしら？」

　エリカは実のところ、日本語ほど日本文化には精せい通つうしていない。

　この国での滞在をはじめて三カ月ということを考えれば無理もないのだが、普段のみごとな日本語の操りっぷりに接していると違和感が結構ある。

　よりにもよって、そのふたつかよと苦笑しながら護堂は周囲を見

回した。

「どっちも高校生には分不相応だ。おまえはどうか知らないが、俺はヤだね。……まあ、あの程度ならかまわないけど」

　回転寿司のチェーン店を見つけた護堂が言うと、エリカがダメ出しした。

「どんなお店か知らないけど、趣味じゃないわ。……何かこう、お仕着せくさいというか、どこを取っても無個性みたいな印象だもの。美お味いしくない料理を我が慢まんするよりも、面白くもないお店で時間を浪費することの方が苦行よ。やめておきましょう」

　店内をのぞきもしないくせに、パッと見ただけで言う。

　エリカの価値観は独特だ。ファストフードやファミレスのような、小こ綺ぎ麗れいでも無個性な店より、どんな味かもわからない屋台や猥わい雑ざつな界かい隈わいの小さな店を好むのだ。

　美味いまずい、お洒落しやれか、快適かなどは気にせず『面白さ』で好みの店を決める。

　何かと問題があるアリアンナを重用するのも、おそらく同じ理由からだろう。彼女の風変わりな嗜好を、護堂はひさしぶりに再確認した。

「じゃあ、あの辺がいいだろ。和風だし、おまえも好きそうなところだし」

「そうね。悪くない印象だわ。何を食べさせるところか、全然わからないけど」

　ひっそりとした雰ふん囲い気きのお好み焼き屋。

　昭しよう和わの半ば頃から営業していそうな、こぢんまりとした店だった。護堂はエリカとともにのれんをくぐり、引き戸を開けて入っていった。

　厨ちゆう房ぼうから出てきたおばあさんが、座敷の席に案内してくれる。他に客はいなかった。

「……鉄板？」

　畳たたみの上でも、エリカはもちろん正座などしない。横座りである。

　この手の店特有の大きな鉄板を見て、不思議そうに小首をかしげている。

「これを使って、自分で焼いて食べろってことだな」

「ああ、セルフサービスのお店なのね。じゃあ早速はじめましょう」

「火を入れたばかりだから、鉄板が全然熱くなってない。まだ無理だって」

　適当におしゃべりしながら待っていると、注文した品がやってきた。

　この店オリジナルの特製ミックス玉と豚玉だ。

　ここでエリカの奉仕精神に期待するほど、護堂は楽天家ではない。自分の手で鉄板に生地を流し込み、形を整え、焼き上がりを待ってひっくり返し、味つけする。

「あら、護堂って意外に料理が上手なのね。ちょっとびっくりしたわ」

　取り分けてもらったお好み焼きを味わいながら、エリカが言った。

「生き地じを広げて焼くだけだから、料理とは言わないぞ。せいぜい真ま似ね事ごとくらいだ」

「そうなの？　……わたしもやってみようかしら」

「おまえにその気があるなら止めはしないけど……大丈夫か？」

　結論から言えば、護堂の心配は杞き憂ゆうだった。

　ずっと作業を見守るだけだったくせに、エリカは手て際ぎわよく生地を焼き上げてみせた。

　しかも、護堂の指示を聞くだけで鮮やかに焼きそばを炒いため、

最後は初心者には難易度の高いもんじゃ焼きまで器用に作ってみせた。

「護堂、あなたは幸せ者よ。このわたしの手料理なんて、いまだかつて誰も——おじさまでさえ食べたことはないんだから。心して味わいなさいね」

「ありがたくそうさせてもらうけど……おまえ、やればちゃんとできるんだなァ……」

　エリカが持つ天性の器用さに感心しながら、護堂は箸はしと口を動かす。

　しかし、これだけの作業をしても甲か斐い甲が斐いしく感じさせないのが彼女らしい。

　臣しん下かに褒ほう美びをあたえる女王。騎士に手の甲への接せつ吻ぷんを許す姫君。そんな雰囲気をにじませながら、護堂の食べっぷりを満足そうに眺めている。

「でも、たまには料理の真似事も悪くないってわかったわ。よかったら、またやってあげてもいいわよ。護堂のために、わたし自みずから腕を振るって」

「……まあ、機会があったら頼む」

「あら、あまり乗り気じゃないようね。わたしの手並みは見たでしょう？」

「おまえの器用さがわかっただけだからな。『面白そうだ』とか言ってアンナさんみたいな料理を作られたら、俺の胃袋はとても保もたない」

「……言われてみれば、たしかにそれは面白そうね」

「だから、やるなって話だよ！」

　アンナことアリアンナは、煮込み料理に関しては世界有数のオリジナリティを発揮する女性である。彼女にまつわる話をしながら、ふたりは食事を終えた。

　上うえ野のに用があるとエリカが言うので、そちらへ向かうこと

にする。

　タクシーを使いたがる彼女に護堂が強硬に反対したため、電車での移動となった。

「用って、買い物でもするのか？」

「ええ。お洋服をいくつか買い足しておきたいの」

　同目的のショッピングへの同行を、さんざん妹に強要された経験がある。退屈な買い物になりそうだと考えていた護堂は、到着した目的地で仰ぎよう天てんした。

「こ、ここは服屋じゃない！　し――下着の店、じゃないか!?」

「広い意味では洋服の仲間でしょう？　細かいことを気にするのね、護堂って」

　上野にある高級百貨店のひとつ。女性用衣服のフロアにある下着店。

　多種多様な小サイズの衣類（敢あえて詳細は語るまい）が列を成なし、渦うずを巻き、山となり、曼まん荼だ羅らにも似たひとつの宇宙を形成している。

　腰の引けている護堂に、エリカは確信犯の笑顔を向けてきた。

「さあ、あなたの好みも判断基準にしてあげる。どんなのがいいか言ってみて」

「な、何でもいい。どんなのでもいっしょだッ！」

「そんなことを言って、仕方のない人ね。いずれ護堂の手で脱がせるはずのものよ？　こだわりのないことを言うべきではないと思うけど」

「ぬ、ぬが――!?」

　護堂は絶句した。よりにもよって、何て発言を。

　しかも、ふたりのやりとりは近くに控えている店員のお姉さん（おそらく二〇代半ば、結構きれい）にまちがいなく聞かれてい

る！

　ちらりとあちらを見たところ、お姉さんはやんわりと微笑み返してきた。

　職業的営業スマイルとは異なる『あら、この子たちったら若いのね』という笑顔だ。

「大体、何でこんな店に来るんだよ!?　おまえんちの近くでも売ってるだろ！」

「輸入ものはこの辺りまで来ないと扱っていないのよ。日本製は品質もいいし可愛らしいのだけど、わたしの雰囲気になかなか合わないのよね。ほら、こんなのはどう？」

　レースをたっぷりと縫ぬいつけた白い上下を指して、エリカが言う。

　過か剰じようにヒラヒラした趣味の悪い布切れになりかねないところを、これは絶妙なセンスで上品にまとめて、華麗さとゴージャスさを醸かもし出している。

　たしかにエリカによく似合いそうだ……いやいや。

　護堂はブンブンと勢いよく頭を振って、不届きな感想を打ち消した。

「そちら、フランスからのインポートものでございますよ。とても素敵でしょう？」

　上う手まいタイミングで声をかけてきたのは、さっきのお姉さんだ。

「よろしければ、ご試着なさってみてはいかがですか？」

「そうね。そうさせてもらうわ。――ねえ護堂、あなたの意見も聞きたいから、いっしょに試着室に来て。着けてみたところを見て、感想を聞かせてちょうだい」

「そ、そんなお願い、誰が聞くか！」

　その後、あれこれ試着したエリカは、試した全てを買うことにし

た。

　商品は自宅まで配送してくれと指定し、カードで会計。

　彼女のこういうお大だい尽じんな買い物ぶりは何度も見ているが、護堂はいまだに慣れない。とはいえ、店を出るとだいぶ気持ちが楽になった。

「用事はまだ終わってないわよ。こっちについてきてくれる？」

　晴れやかな気分で伸びをする護堂に、エリカが言った。

　百貨店を出て、雑ざつ踏とうのなかを歩いていく。

　さすが休日の上野界隈。かなりの賑にぎわいだった。

　エリカはＪＲやアメ横よこの辺りから離れて湯ゆ島しま方面に進み、護堂も隣となりにくっついていく。

　足取りに迷いはない。東京の地理にもすっかり慣れたようだ。

　彼女のことだ。伝統的な日本文化や庶しょ民みんの風習などは勉強不足でも、東京近郊の地理、自分の活動に影響する個人や組織については把は握あく済みなのだろう。

　実務面におけるエリカは、優秀かつ冷徹なマキャベリストなのだ。

　上うえ野の広ひろ小こう路じ近くの住宅街へと入り、坂道を登っていく。護堂が連れていかれた先は、いかがわしいホテルが何軒も集まる界隈だった。

3

　護ご堂どうは絶句した。エリカは何を考えているのだ!?

「エリカ、ちょっと待て。おまえはここでこれから、何をするつもりなんだ!?」

「何って、そうね……最近のゴタゴタに決着をつける準備かしら」

　護堂はてきめんに動揺した。

　ゴタゴタに決着。それはやはり、草くさ薙なぎ護堂との関係に決着をつけるということか。

　――わたしのこと、本当はどう想っているのか、はっきりさせて。

　――いつもみたいにごまかしたり、逃げ出したりするのは駄目。今ここで男らしく、言葉と態度でわたしに見せて。

　いつかエリカに言われるのではと危き惧ぐし、覚悟してきたセリフが脳内に響く。

　これはいよいよ、進退窮きわまったのだろうか……？

「どうしたの、護堂？　おなかでも痛そうな顔をして、ちょっと変よ？」

　しかし、エリカは怪け訝げんそうに訊たずねてきた。

　小悪魔めいた色いろ香かも、自みずからの願望を押し通そうとする強烈な意志も、抗あらがい難がたいほど圧倒的な魅力も――こういう場面でいつも見せてきたパワーがない。

　本当にただ、不思議そうにこちらを眺めている。どういうことだろう？

「どうしたって、ほら。ここはさ、何て言うか」

「ここ？　ここがどうかしたの？　何だか変な建物が多いけど」

「……え？」

「そういえば、地図にはホテルだって載のっていたわね。こんな立地の悪いところで営業しなくてもいいでしょうに。建物も何だか地味すぎるし。でも、面白いことは面白いわ」

　気楽な調子でエリカが言う。

　もしかして彼女は、そういう目的のホテルがあるとは知らないの

か……？

　そうだ、知らないのだ。さすがブランデッリ家のご令嬢！　確信した護堂は、足から力が抜けそうなほど安あん堵どした。よかった。最終局面にはまだ猶ゆう予よがある。

「気分悪そうね？　よかったら、その辺の部屋を借りて休みましょうか？」

「いいや、大丈夫だから先へ進もう！　おまえの行きたいところはどっちだよ!?」

　護堂は力強く返答した。

　それを不ふ審しんそうに眺めながら、エリカは目の前にある神社を指さした。

「そこよ。入ってみましょう」

　軒のきを連ねる数軒のホテルと向かい合うように位置する、小さな神社。

　静かな場所だ。近所にあるはずの湯ゆ島しま聖せい堂どうや神かん田だ明みよう神じんとは雲うん泥でいの差だった。

　出入り口の鳥とり居いには、玉たま浦うら神社の札がかけてある。

　神しん職しよくは不在らしく、人の気配はない。きょろきょろ辺りを見回していたエリカが、おもむろに拝はい殿でんの扉に手をかけ、開けてしまった。鍵かぎはかかっていなかったようだ。

「不用心だな。でも、鍵がないからって勝手に入るなよ」

「外から偵察して終わりにするつもりだったのだけどね。ちょうど誰もいないみたいだから……。でもいいでしょう、ここは公共の神殿なんだし」

　言い合いながら、ふたりは拝殿に上がり込む。神社のくせに不思議と生活感がある。

　理由は隅に片づけられていた物品のせいだろう。

　寝袋、数冊の雑誌やマンガ、乾パンや乾果など保存の効きそうな食料品。きちんと畳たたまれたり積み上げられたりしていたが、明らかにこの場所には不似合いだ。

　それらの物品や拝殿内をしばらく物ぶつ色しよくしたエリカは、思慮深げにつぶやいた。

「手がかりになりそうなものは、何もなし……。面白くないわね」

「おまえなあ。犯罪だぞ、これ。いいかげんにしろ」

　呆あきれて護堂がたしなめると、イタリア生まれの美少女はようやく外に出た。

　しかし、すぐにこんなことを言い出したのだ。

「ここではもう収穫もなさそうだし、次に行ってみましょうか」

　エリカにうながされるまま向かった次の目的地で、護堂はまたも驚いた。そこは私立城じよう楠なん学がく院いん高等部。ふたりが通う学校だったのである。

「護堂ってば結構、勘かんがいいわよね」

　休日の校庭を歩きながら、エリカが言った。

　グラウンドでは運動部が活動していたが、他はいたって静かなものだ。

「普通以下だと思うぞ。……さんざん気が利きかないって文句もつけられたし」

　まさに数時間前、目の前の少女にやられたばかりである。

　しかし、当のエリカはフンと鼻を鳴らして、

「それは女性の扱いに関しての話。わたしが言うのは、魔術とか神様がらみの超自然にまつわる勘かんのことよ。大体、荒事全般については野生の獣けものみたいでしょう、いつも？」

　言われてみれば、そうかもしれない。

　カンピオーネになったことで得た超感覚は、普通なら知り得ない情報を護堂に教えてくれるときがある。だが、それが何だというのだ？

「ここで護堂の勘に期待して質問。さる筋からの情報なんだけど、ある人物が学校に妙な仕掛け——多分、何かの呪じゅ術じゅつを仕掛けたそうなの。その痕こん跡せきとか感じたりしない？」

「……いいや、全然」

　護堂は城楠学院の校舎、校庭、敷地内をぐるりと見回してみた。

　何も感じ取れない。休日はやっぱり人がいないなあと感想を抱いた程度だ。

「もっと真ま面じ目めにやってみなさい。精神を集中して、感性を研とぎ澄すませて。もしかしたら、あなたの霊視的中率はリリィより上かもしれないんだから」

「いや、それはないだろ。そもそも俺、霊視なんかできないし」

　騎士にして魔女であるリリアナの能力を、護堂は思い出した。

　ペルセウス戦で彼女がしてみせた霊視のお告げ。そして、万ま里り谷や祐ゆ理りが幾度も見せてくれた予見めいた才能。あんな特技、自分には皆かい無むのはずだ。

「霊視というのは、アストラル界——『生と不死の境界』にたゆたうアカシャの記憶を読み取る能力のことなの。あなたがときどき発揮する異常な勘の良さは、カンピオーネの超感覚でアストラル界をのぞいている可能性が高いと前々から思っていたのよ」

　エリカの言葉が、記憶の隅に引っかかる。

　生と不死の境界。なんとなく聞き覚えがある。もっとも、アカシャの記憶云うん々ぬんはさっぱりだったので護堂は聞き流すことにした。

「それを応用すれば、霊視に近いことができるかもしれないの。ちょっと試してみて。……あと、祐理が身近にいるせいで勘ちがいしているようだけど、欧州の魔女が持つ霊視力なんて当てにしてたら痛い目に遭あうわよ」

「そうなのか？　でも、リリアナは自分にも霊視ができるって言ってたじゃないか」

「まあね。でも、問題はその頻ひん度どなの。魔女たちが効果的な霊視を呼び込む率はせいぜい一割前後。でも、わたしの概算だと祐理はきっと六割超よ」

「そんなにちがったのかよ！」

「ええ。魔女たちが霊視を試こころみる場合、何十人も集まって人海戦術で臨のぞむのが普通なの。下へ手たな鉄砲もたくさん撃てば……ということね」

　護堂は納得した。そういえば、ペルセウス戦の霊視はアテナの恩おん寵ちようでかつてないほど上う手まくいったとリリアナもコメントしていた。

　エリカが出会った当初から祐理に執しゆう心しんだった理由が、これでわかった。

「だったら、万里谷に頼めばいいじゃないか」

「わたしが敢あえてそうしないところから察しなさい。これは政治が絡からむ問題よ」

「ある人物って……もしかして、何とか委員会の連中か？」

「惜しいわね。委員会は今回、彼女の邪魔をしたい側よ。ただし、その行動を黙認せざるを得ない、腹立たしい状況にある——そんなところかしら」

「彼女って……じゃあ清せい秋しゆう院いんかよ。万里谷たちも大変そうだなあ」

　そこまで言われれば察しはつく。護堂の詠えい嘆たんにエリカが肩をすくめた。

「わたしやリリィにだって、結構しがらみはあるわ。結社の本国から離れている分、あまり問題にならないだけで……。そういう観点では、護堂のまわりにいる女の子では祐理がいちばん繊せん細さいな立場なの。もっと気を遣つかわなきゃ駄目よ」

「あ、ああ。わかった」

　たしかに、自分にはそういう気き遣づかいが欠けていたかもしれない。改めなくては。護堂はそう思いながら、エリカのリクエストに応こたえてみることにした。

　何か奇妙な感覚を察知できないかと、校内をあちこち歩き回る。

「……うん。特に何もわからないな」

「役に立たない人ねー。やっぱり、戦いに関係のないことでは無理なのかしら」

　簡潔に報告すると、エリカに呆あきれられた。

　護堂も同感だった。勘がいいと言っても、ほぼ戦闘時に限定されるのだ。

　——戦闘時。そう思い至った瞬間、頭のなかで火花が散ったような気がした。

　目の前にある校舎の壁を眺めてみる。

　どうもここが気に入らない。そんな感想が湧わいてくる。敵。そう、言うなれば敵の匂においがかすかに漂っているような印象だ。

「この辺りがちょっとだけヤな感じがするな。それ以上はさっぱりだ」

「この壁が？　結界でも仕込んでいるのかしらね？」

　校舎の壁を前にして、護堂とエリカは話し込む。

　ふたりの会話への返答は、思わぬ方向から唐とう突とつにもたらされた。

「結界じゃないよ。詳しくは言えないけど、そこには恵那と天あまの叢むら雲くもがちょっと仕掛けを仕込んだんだ。……そこだけじゃないけどね」

　後ろを振り向く。

　校庭の方から、清秋院恵え那なが近づいてくるところだった。

　休日なのに制服を着込み、いつもの荷物――細長い布の袋を肩にかけている。

「八や雲くも立つ、出いずも雲や八え重垣がき、妻つま籠ごみに。八重垣作る、その八重垣を。……知ってる？　速ハヤスサノ須佐之男命オノミコトの呪まが歌うた。何日か前、この学校に忍び込んで、八カ所に書きつけたんだ。そのうち使う機会があると思って」

　親しみやすい雰ふん囲い気きの大やま和と撫なでし子こ。朗ほがらかな自然体。

　いつもと変わらぬ様子だが、護堂は妙なきなくささを感じた。

「今日、恵那はその仕込みを点検するつもりで来たんだよね。いざという時に役立たずじゃ困るから。でも、おふたりはどうしてここに？　デートじゃなかったの？」

　微妙に鋭くなった恵那の視線が、エリカに向けられる。『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』の異名を持つ少女は婉えん然ぜんと微笑んで、それを跳ね返してしまった。

「今まさにデートの途中なの。そのついでに恵那さんが用意していた悪戯いたずらの種を調べるつもりだったのだけど」

「そっか。ごめん、邪じや魔ましちゃったかな」

　和なごやかな言葉を投げ合うくせに、彼女たちの間には非友好的な雰ふん囲い気きが立ちこめているような――。護堂は眉まゆをひそめた。

「どんなゴタゴタがあったのかは知らないけど、妙な騒ぎを起こすのは勘かん弁べんしてくれよ」

「かしこまりました、旦だん那なさま……と言いたいところだけど、難しいかな」

　布袋を肩からおろした恵那は、片手で器用に口をほどいた。

「恵那は草薙さんの女になれって言われてきたんだけど、もうひとつ目的があるんだな」

「目的？」

「わたしを排除することよね、どうせ」

　エリカが皮肉っぽく口を挟はさむと、媛ひめ巫み女こは「正解」とうすく笑った。

　今まで見せたことのない表情だった。狩りをする肉食獣めいた、荒っぽい笑みだ。

「草薙さんは超重要人物だからね。そのまわりに外人さんがいるのは面白くないって、実家の連中が言うんだ。まあ、恵那はそんなのどうでもいいやって思うんだけど……」

　布袋が地面に落ち、鞘さやに入った大きな刀が露あらわになる。

「誰かがやらなきゃいけないお役目なら、避けて回っても仕方ないからね。それに、敵はイタリアの騎士さんたちだって聞いて、興味も湧わいたし。そうしたら、おじいちゃまが変に面白がったから驚いたけど」

「おじいちゃま。あなたに神刀を授けたという人ね？」

　この場にそぐわぬ言葉を、エリカが聞きとがめた。

「詳しいね、さすがエリカさん。うん、結構怖いじいさまでさ。媛巫女はもちろん、正せい史し編へん纂さん委員会の人たちも顔色をうかがってビクビクしてるよ」

　恵那が鞘から剣を抜き放った。

　白しろ銀がねの光を宿す刀身は神こう々ごうしくさえあり、堂々たる王者の威い厳げんに満ちている。

　緊急事態の発生。護堂とエリカはアイコンタクトを交わした。

（とりあえず、わたしが彼女の相手をするわ。護堂はしばらく様子を見ていて。あなたの権けん能のうなんか使ったら、あの子が死んじゃうもの）

（いや、それはそうなんだけど……。やりすぎるんじゃないぞ）

　不安に思いながらも、護堂はエリカにまかせることにした。

軍神ウルスラグナから奪った、草薙護堂の特殊能力。怪力、超スピード、稲いな妻ずま、太陽のかけらの投下など多彩かつ強力なものばかりだが、ひとつとして人間向きの能力はない。

敵が不死身の神様でなければ、どれも使う気にはなれなかった。

護堂が引き下がると、エリカの手に魔剣クオレ・ディ・レオーネが忽こつ然ぜんと顕あらわれた。

刀身に清せい冽れつな輝きを宿す、細身の長剣だ。

紅と黒ロッソネロの騎士がそれを構えると、恵那は楽しそうに言った。

「お休みの学校なら祐理を気にする必要もないし、気き兼がねなくいけそうだね。草薙さんがいるのはアレだけど、準備はしているからいいや。ここで腕比べにしよう！」

言うのと地を蹴けるのとが、ほとんど同時であった。

恵那が大きく踏み込みながら、壮そう麗れいな大だい刀とうを突き込んでいく！

それをサイドステップで避けたエリカは、逆にクオレ・ディ・レオーネによる突きを返して逆襲。しかし、恵那はひらりと蝙こう蝠もりのような身のこなしでかわす。

エリカは鋭く、恵那は獰どう猛もうに、おたがいをにらみつける。

次の瞬間、熾し烈れつな剣のぶつけ合いがはじまった。

軽く細いクオレ・ディ・レオーネで、エリカが休みなく突きを繰り出す。

まるで弾幕のような連続攻撃。

しかし、恵那は大刀の切っ先を右に左にと小刻みに揺らすだけで全て払いのけてしまう。

彼女の大刀は獅し子しの魔剣よりも遥はるかに長く、そして重いはず。

にもかかわらず、完かん壁ぺきな防御を披ひ露ろうしてみせる。しかも時折、カウンターの一突きを金髪の女騎士めがけて打ち込むのを忘れない。

この反撃をエリカは巧たくみに防いでいたが、かなりギリギリのタイミングもあった。

まさか、日本にもエリカと互角以上に剣を操る少女がいたとは！

意外な事実に驚きながら、護堂は必死に考えた。

せっかく注意したのに、斬きり合いが白熱しすぎている。

これではどちらかが大おお怪け我がするかもしれない。中断させるには、どうすればいい？　身に寸すん鉄てつも帯びず、下へ手たに自みずからの力を使うわけにもいかない男に残された選択肢は――。

「くそっ。どうせ死なないはずだし、やるしかないか！」

死に至る重傷から復活できる『雄お羊ひつじ』の化身があっても、即死すれば意味はない。『運がよければ死なないだけだ』と訴える理性を無視して、行動を起こす。

激しい攻防を繰り返すエリカと恵那。

彼女たちが振り回す剣と刀の間に、護堂は我が身を投げ出した。

「――護堂!?」「――草薙さん!?」

エリカと恵那が同時に刃を引き、間かん一いつ髪ぱつのところで悲劇は回避された。

彼女たちの反射神経、判断力、操刀技術のどれかがわずかでも劣っていたら、護堂はまちがいなく斬り刻まれていただろう。

「何てことをするの、護堂!?　バカをするにもほどがあるわ！」

「し、仕方ないだろ。おまえらを止める方法、これしか思いつかなかったんだから……」

珍しく激げっ昂こうするエリカに、護堂は震える体と声で答え

た。

　とにかく命を拾い、チャンバラも止めることができた。結果オーライだ。

「む、無茶するなー。でも、これで納得した。そういうことなんだ」

　恵那が勝手にうなずいている。納得？　何のことだ？

「あの奥手な祐理を惚ほれさせちゃうんだから、すごく男前なところがあるんだろうとは思ってたんだ。やっぱりあれ？　俺の女を守るためなら、命も懸かけるってヤツ？」

「そんなんじゃない。考えなしにやっただけだ。……それに、おまえも入っているぞ」

　護堂が否定すると、清秋院恵那は「え？」と首をかしげた。

「だからエリカだけじゃなくて、清秋院にだって怪我させるわけにはいかないだろ。大体、揉もめ事ごとを刃物で解決するなんて最低だ。話し合いとか、平和的な方法を選択しろ」

「そっか。恵那のことも『俺の女』に入れてくれてるんだ。ちょっと照れるな……」

「じゃなくて！　誰であろうと、目の前で斬り死にさせてたまるかってことだ！」

　珍しく恥じらう媛巫女に、強く訴える。

　しかし、当の彼女は感かん銘めいを受けた様子もなく、飄ひよう然ぜんと言った。

「やっぱり草薙さんがいると、じっくり腕比べはできないな。おじいちゃまの提案通り、例のやつをやるしかないか……」

　両手で天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎをかまえていた恵那が、左手だけ刀から離してポケットを探る。

　取り出したのは携帯電話だった。

「べつに電話をするわけじゃないよ。癖くせでさ、向こうと話をするとき、こういうのがないと上手くいかないんだよね。――おじいちゃま、思ってたよりもだいぶ早くなったけど、例のやつをお願いね」

　と、携帯に向けてささやきかける。

　エリカと護堂が不審がっていると、恵那はすぐに電話機を投げ捨てた。

　その直後、天が翳かげった。闇やみが辺りを支配する。

　雲でも出てきたのかと思って天を見上げた護堂は――仰ぎよう天てんした。

　中天に君くん臨りんしていた太陽が、真っ黒に塗ぬりつぶされていた。黒い円の周囲では、白いコロナが噴き上がる。これではまるで、皆かい既き日につ食しよくではないか！

　しかも、烈はげしい風が吹きつけてくる。

　全身を持っていかれそうなほど強く、肌を切るような冷たい風が。

「ちはやぶる宇う治じの渡わたりに棹さお取とりに――けむ人し我がもこに来む。我わが祀まつる神には非あらず！　ますらをに憑つくきたる神ぞ、よく祀るべし！」

　闇やみに閉ざされた世界で、朗ろう々ろうと恵那が謡うたう。

　その謡いに宿る言こと霊だまが世界を斬り裂いていくように、護堂には思えた。しかも、体には活力と闘志がみなぎってくる。――神か。神がすぐ近くまで到来したのか⁉

　護堂はさっきの壁を見つめた。

　かすかな敵の匂においをかぎ取った、あの一角。

　そこから膨ぼう大だいな神力が迸ほとばしっていたのだ。しかも、さらに七カ所――学院内のどこかから、同じほどの力が湧わき出ているのを感じ取った。

「天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎはね、速須佐之男命ハヤスサノオノミコトと日本武尊ヤマトタケルノミコト……ふたりの英雄ますらおが使った刀なんだ。でも、この人たちは敵をまつろわすだけの戦士じゃない。必要があれば敵をあざむき、たぶらかす智ち慧え者しやでもあった。欺あざむき、騙だます神。変へん幻げん自じ在ざいの神。盗みの神。——特にスサノオは、太陽すら欺き、隠してしまう神格。たとえ王様でも、ここまで仕掛けにはまったら逃げられないよ！」

　初めて聞く、恵那の厳おごそかな声。

　これから起こる何かを妨害するつもりか、エリカが媛巫女めがけて斬りかかる。

　だが、遅かった。護堂の足下はすでに闇やみと化していた。

　今まで土の地面だったはずの場所が、黒く染まってしまった。

「う、うわあああああああッ！」

　ずぶずぶと足が、体が、闇のなかに沈下していく。

　護堂は絶叫しながら抗あらがおうと必死になった。しかし、いくら手足を振り回そうとも何もつかめない。何も蹴り飛ばせない。

　結局そのまま、虚うつろな黒い空間に呑のみ込まれていくだけであった。

　護堂は闇のなかに落ち、完全に消失した。

　その瞬間、エリカはクオレ・ディ・レオーネで恵那めがけて全力で斬りつけた。

　しかし、天叢雲劍でみごと受け止められてしまう。

　獅し子しの魔剣といにしえの神刀を重ねて、ふたりの少女は鍔つば迫ぜり合いを開始した。

「あなた、護堂を一体どこに連れ去ったの⁉」

「わかんないなー、それは。王様を盗っていったのはおじいちゃまだから」

　いつもの優雅さを捨てて詰きつ問もんするエリカに、恵那が答える。

　そういえば、さっき媛巫女は言っていた。

　欺き、騙す神。変幻自在の神。盗みの神——これらはつまり、トリックスター！　エリカは『プロメテウス秘ひ笈きゆう』を思い出した。神力を盗む偸ちゆう盗とうの魔導書。あれと同じ性質の——しかし、あの書よりも数段強い神秘に護堂は連れ去られたのだ！

「まあ、王様は今頃、幽かくり世よのどこかにいるとは思うけど。おじいちゃまは現うつ世しよに戻ってこられないし」

「幽世？　まさかアストラル界——生と不死の境界のこと⁉」

「あー、そんな言い方もしたかな。そういうのは委員会の人の方が詳しいんだよね」

　飄ひよう々ひようと受け答えする媛巫女を、エリカは戦せん慄りつとともに見つめた。

　並の人間には扱えぬはずの神具を使いこなし——。

　生と不死の境界に住まう超自然の存在と心を通わす者——。

「そういえば、媛巫女は特殊な資質を持つ娘が多いのよね？」

「うん。恵那は神様の声を聞いたり、神様の力をすこし借りたりできるんだ。そう言えば、エリカさんにはわかるよね？」

　やはり降こう臨りん術じゆつ師し！　エリカは舌打ちした。

　霊視術の素養よりも、さらに希少な巫女の資質。そんな伝説的な能力者まで囲い込んでいたとは、媛巫女とは想像以上に厄やつ介かいな集団のようだ。

　問答に飽きたのか、恵那が鍔迫り合いの状態から飛びのいた。

「おじいちゃまとつながったせいか、あっちの御み霊たまが流れ込

んできちゃったな……」

　ぶつぶつとつぶやきながら、恵那が天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎを中段に構える。

　すると、剣の形状が変わっていった。

　今まで直刀だったのが緩ゆるやかに反そっていき、彎わん刀とうになってしまった。

　しかも、神々しいほどに白く輝いていた刃が黒く変色する。漆しつ黒こくの焔ほのおで刀身に灼やきを入れたかのように——禍まが々まがしい姿へと変へん貌ぼうしてしまった。

「知ってる？　この国の刀に反りを入れたのは、朝廷に仇あだなす夷い狄てきの鍛か冶じ師しなんだ」

　恵那が静かにつぶやく。

　処刑場を吹き抜ける、暗く冷たい涼風のように。

「刀に反りを入れると、斬る力が強くなる。その理ことわりに則のつとって、蝦夷えみしの匠たくみは刀を鍛きたえ、その技を奥おう州しゅうが受け継ぎ、そこから国中に広まっていった……。討ち果たした夷狄の力さえも取り入れ、利用する。天叢雲劍も、その性質を持っているんだ」

　漆黒の神刀をかまえて、恵那はどこか凄すごみのある笑みを浮かべた。

　神に仕える巫女というよりも、剣の鬼と呼ぶ方がふさわしい好戦的な顔。

「まつろわぬ夷狄の力を呑み込み、我がものとする——まつろわす劍。それが恵那の相棒、天叢雲なんだ。さあ、いざ尋常に勝負！」

　エリカは息を呑んだ。

　恵那の体から呪じゅ力りょくが消えていくのを感じたのだ。

　渾こん身しんの魔術を使うために、あるいはとっておきの権能を振るうために、己の呪力を最大限に高める魔術師やカンピオーネを

今まで幾人も見てきた。

　だが、恵那は完全に逆だ。己の力と存在をゼロに——無に近づけていく。

　代わりに媛巫女の器うつわを満たすのは、荘そう厳ごんなる神の気配。

「あなたのおじいちゃまがどちらか、訊いてもいいかしら？」

「え、どっちって？」

　きょとんとする恵那に、改めて問う。

「さっき言ったでしょう。その神刀を所有した神格は二柱はしら、速須佐之男命と日本武尊だって。あなたのおじいちゃまは、どちらなの？」

「スサノオの方！　みんな、御ご老ろう公こうなんて似合わない呼び方するけどね！」

　たしか嵐の神にして征服神でもある、鋼はがねの属性を持つ神だ。

　そんな神格に守護された、伝説的な神刀の所持者。これはかなり厳しい敵手だ。エリカは焦あせりとともに、護堂が消えたあとを見やった。

　例の黒い闇が、まだ地面にわだかまっている。

　彼女の愛する若きカンピオーネを呑み込んだ、漆黒の闇が——。

　無む謀ぼうとも思えるアイデアが誕生したのはこのときだった。だが、チャレンジする価値はあるように思える。『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』を決断させたのは、あの闇が消えれば追跡の手がかりも消えるという一事だった。

　勝算のない戦いは、可能であれば避けるのがエリカの信条。

　だが、これを避けたら絶対に後悔する。そう思った瞬間、踏み切っていた。

　護堂を呑み込んだ闇のなかに、エリカも飛び込んでいく。

「って、そうくるか——。さすがだねッ！　でも逃がさない！」

　なんて女。エリカは舌打ちした。

　自分が闇へ飛び込むのを見るや、恵那はすぐさまそれを追いかけてきたのだ。

　かくして、ふたりの少女はカンピオーネを捕らえた謎なぞの空間にそろって突入したのである。

第６章　幽世の邂逅

1

護ご堂どうはどことも知れない山のなかにいた。

あやしい闇やみのなかに呑のみ込まれたあと、気づいたらここにいたのだ。

緑したたる山の奥深く。

木や土の匂においがひどく濃い。しかも、そこは渓けい流りゅうのほとりだった。

これが晴れた日だったら、さぞ気持ちのいい山歩きになっただろう。だが、生あい憎にくと雨が降っていた。大きな雨粒がびしゃびしゃと体を叩たたく。

強い風まで吹いている。濡れた体から容よう赦しゃなく温ぬくもりを奪っていく。

しかも、護堂の体調は芳かんばしくなかった。

強烈な吐はき気け。悪お寒かん。頭痛。風か邪ぜでもひいたのかと不安になってきた。

雨風を避よけるためにも動いた方がいいのだが、そんな余力はなかった。だが三分ほどうずくまって吐き気を堪こらえていると、だいぶ楽になった。

「乗り物酔いみたいだな、まるで……」

　まだ頭痛は治まらないが、これならいけそうだ。立ち上がり、辺りを見回す。

　すぐそばを流れる渓流の水が、すっかり濁にごっている。流れも速い。雨で水量も増しているのだろう。渓けい相そうから察するに、かなり山奥のようだ。

　護堂は上流の方に小屋を見つけたので、そちらに移動をはじめた。

　とにかく雨風をしのぎたい。大雨のなか、川のほとりに建つ掘っ立て小屋など危険な気もするが、外にいるよりはマシだ。

　それにしても、エリカが心配だ。あと清せい秋しゅう院いん恵え那なも。

　彼女たちがどうなったのか不安になりながら、小屋にたどり着いた。

　時代劇にでも出てきそうな、簡素な掘っ立て小屋だった。ざっと見た限り、電気ガス水道のいずれとも縁がなさそうな造りだ。

　出入り口の引き戸が開けっ放しだったので、なかをのぞいてみる。

　小屋の主あるじらしい老人が、クラシカルな囲い炉ろ裏りの前であぐらをかいていた。

　優に一八〇センチを超える巨きよ躯くだった。粗末な着物を一枚しか着ていないので、歳とし不ふ相そう応おうなたくましさがよくわかる。頑強そうな筋肉は、たいていの壮そう者しやを打ち負かすだろう。

　顔の造作も偏へん屈くつそうで、この体格によく似合っていた。

「入れ、草くさ薙なぎ護堂。わざわざ呼び出しちまって悪かったな」

　いきなり名指しで呼ばれた。

　この時点でもう、護堂には彼の正体がわかっていた。

体に戦うための力がみなぎってきたからだ。目の前の老人は、まちがいなく神だ。

「オレの巫み女こが迷惑をかけているが、もうしばらく我が慢まんしてもらうぜ。あいつが南なん蛮ばんの小娘と一騎打ちをしたいって言うから、おまえさんだけわざわざ呼び出したのさ。ま、女は女同士、人間は人間同士、心ゆくまで勝負させてやろうや。なァ？」

「……あんたは何者だ？　どんな神様なんだ？」

　この問いに、老人はニタリと笑う。

　いかつい外見のくせに、奇妙なほど愛あい嬌きようのある表情だった。

「速須佐之男命ハヤスサノオノミコトと人はいう。ま、御ご老ろう公こうでもじじいでも、好きな呼び方をしろ。ただし、おじいちゃまだけはよせ。そんな阿あ呆ほな口を利きくのは、恵那のクソガキだけで十分だ」

　護堂の消えた闇へと飛び込み——。

　その果てにエリカがたどり着いたのは、どこかの川原だった。

　川幅はさほど広くはないが、流れが速い。向こう岸まで泳ぐとしたら苦労しそうだ。そして、この川の水はすばらしく美しく、澄み切っていた。

　東とう京きようの二三区内を流れる河か川せんだとは、とても思えなかった。

「ここはやっぱりアストラル界……？　生と不死の境界に入り込んでしまったの？」

　地面に膝ひざをつきながら、エリカは喘あえいでいた。

　空気がひどく濁にごっているようだ。呼吸をしても、きちんと酸素を吸収していないように思える。おそらく、肉体がこの世界に適応できていないのだ。

　だが、仕方のない話だった。

　地上からアストラル界への『世界移動プレーンウオーキング』は、極きわめて難度の高い魔術だ。しかも、事前に貴重な霊薬を服用しなくてはならない。

　これは、精神の働きを活発化させ、肉体をこの異世界に順応させる薬だった。

　肉体よりも精神、物質よりも霊体の方が優位な世界なのだ。

　アストラル界に足を踏み入れた魔術師は滅めつ多たにいない。異世界へ渡る魔術の儀式と必要な霊薬の入手は、おそろしく難しいのだ。

　エリカも初めての経験だったが、この世界の理ことわりを思い出し、対策を取りはじめた。

　とにかく、体内の呪力を最大限にまで高めてみる。

　呪力が尽きてしまったあとが心配だが、逡しゅん巡じゅんしている余裕はない。数十秒後、体の異状が治まってきた。呼吸も回復したので立ち上がる。そこで声をかけられた。

「さすがだね、エリカさん。もう幽かくり世よのなかで動けるようになったんだ」

　天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎをひっさげて、清秋院恵那が歩み寄ってくる。

　この媛巫女も同じ手段で身を守っているのか、苦しそうな気配はない。

「あなたもしつこい人ね。わたしは今すぐ護堂を追いかけたいの。邪じゃ魔ましないでくれる？」

「だったら、腕ずくで恵那を片づけないとダメだね。さあ、早くはじめよう」

　とっくにそのつもりだったエリカは、クオレ・ディ・レオーネを構えた。

　漆しつ黒こくの彎わん刀とうと化した天あまの 叢むら 雲くもの剣つるぎと恵那が、即座に襲いかかってくる。

　ふたたび激突する魔剣と神刀。

　また鍔つば迫ぜり合いになる——と思われた瞬間、クオレ・ディ・レオーネは刀身の半ば辺りで切断されてしまった！　エリカはとっさに横に跳んで、追撃を逃れた。

「獅し子しの鋼はがねよ。不ふ滅めつにして不ふ朽きゅうなる権けん威いの徴しるしよ！」

　エリカの言こと霊だまに応こたえて、断たれた魔剣の半身が宙を飛んで戻ってくる。

　結合、溶接。

　不滅の属性を持つクオレ・ディ・レオーネは甦よみがえったが、天叢雲剣の威力が増している。

　否いな、本来の威力を取り戻しつつあるのか。

「スサノオ——神刀本来の遣つかい手てである神格の加護で己おのれを満たし、人間には扱えないはずの神具を使いこなす……。そういう理屈だったのね！」

　エリカはつぶやいた。

　恵那の身に宿る、正体不明の神力。これはスサノオの神性のごく一部——もしかすると一万分の一にもならない程度——を借り受けたものだろう。

　だが、人の器うつわに収まる程度の量であっても、質はまぎれもなく神の力。

　だからこそ、天叢雲剣は恵那の剣技と意思に応えているのだ。

「おじいちゃまの力だけじゃないよ。この天叢雲も半分神様みたいなものだし、こいつの御霊も恵那に流れ込んでいるんだ。スサノオのまつろわす神としての性質は、天叢雲剣があたえているものだからね」

　征服者の象しよう徴ちようたる鋼の剣。この剣を獲得する神話が後あと付づけされたことで、スサノオは征服神の神格も得たのだろう。そうエリカは推測した。

「スサノオとかいう、あなたのおじいちゃま——彼のいそうな場所を教えなさい。そもそも彼は何者なの？　やっぱり『まつろわぬ神』？」

「本人いわく、そんなヤンチャはとっくに卒業したって話だよ」

　ニタッと笑う恵那を、エリカは険しくにらんだ。たしかにその通りだ。『まつろわぬ神』なら地上を漂泊し、大だい災さい厄やくを引き起こすはず。では、どのような存在なのか。

「そこのところを説明すると長くなるんだけど……話している暇はないかな」

　恵那が申し訳なさそうにささやく。

「いつもはもっと余裕があるんだけどね。幽世で神がかりになったせいか、おじいちゃまと天叢雲の御霊がすごく強いや。まともに話をするのは、もう無理そう……だから、今のうちにあやまっておくね」

「あやまる、ですって？」

「うん。こうなった恵那は強くなりすぎて、すごく卑ひ怯きようだから……」

　ぼんやりと告げながら、恵那がゆらりと体を揺らす。

　ぎくしゃくとした、人形のような動き。今までの俊しゆん敏びんな身のこなしとはまるで異なる。

「天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎよ。願わくば我が身を贄にえとし、荒ぶる御み霊たまを鎮しずめ給たまえ」

　言霊が巫女の唇くちびるより洩もれ出る。

　儚はかなく敬けい虔けんなささやき。そして、その瞳に宿る凶きよう猛もうな殺気と闘志。

命いのち懸がけの戦いを飄ひよう々ひようと楽しんでさえいた剣客の目ではなかった。立ちふさがる敵は全て打ち倒し、殲せん滅めつさせねば気が済まない鬼おにの瞳ひとみ。

様子の変わった恵那が、ぎくしゃくと漆しつ黒こくの神刀を構える。

「ちはやぶる神の斎い垣がきも越えぬべし——今は吾あが名の惜しけくもなし」

呪まが歌うたが唱となえられた瞬間、エリカは驚きよう愕がくした。

彼女の体をアストラル界の環境から保護するはずの呪力が、引き抜かれていったのだ。

しかも、その呪力は天叢雲劍に吸い込まれていく！

——夷い狄てきの威いをも奪い、我がものとする劍。こんな使い方もあったとは。

舌打ちしながら、エリカはくずおれた。全身に力が入らず、呼吸もせわしなくなる。この世界に到着した直後の状態に戻ってしまった。

神々の魂たましいに憑ひよう依いされた恵那の前で。まさしく絶体絶命の窮きゆう地ちであった。

2

神を相手におじいちゃま呼ばわりとは、恵え那なは想像以上に大物だったようだ。

ため息をつきながら、護ご堂どうは質問した。

「あんた、やっぱり『まつろわぬ神』なのか？」

「いいや。まつろわぬ者じゃァない。そんな遊びには、大昔に飽あ

きちまったよ」

「神話の縛しばりを逃れた神様は、みんな『まつろわぬ神』じゃないのかよ？」

　以前、エリカから聞きかじった知識だ。

　だがスサノオ（！）と名乗った神は、フンと鼻を鳴らした。

「そのくくりは大筋じゃまちがっちゃいねえ。普通の神は、神話のなかにだけ存在するもんだ。神話から抜け出して地上にさまよい出たのが『まつろわぬ神』だな」

　彼らは地上に存在するだけで、未み曽ぞ有うの災さい厄やくを引き起こす。それゆえ、彼らと対決しうるカンピオーネを魔王と崇あがめる人々がいる。それが護堂の認識だったのだが――。

「オレはな、かつて『まつろわぬ神』であった者さ」

　スサノオが嗤わらう。こちらの内心を見抜いたような表情だ。

「千年も地上をほっつき歩いていたら、さすがに飽きがきてなァ。隠いん居きよすることにしたのさ。まあ昔はずいぶん暴れたもんだが、歳としを取って丸くなったわけだ」

　不良かヤクザじみた発言はともかく、齢よわいを重ねた元『まつろわぬ神』。

　その自じ称しように護堂は瞠どう目もくした。アテナのような連中が最後にどうなるのか、前々から疑問に思っていたのだ。まさか、そんな引退の仕方があったとは。

「でも隠居って、どういうことだよ？」

「『まつろわぬ神』は何かの拍ひよう子しに死なない限り、神話のなかには帰れないからな。仕方ねえから、オレみたいなのは眠りについたり幽かくり世よに隠居すんのさ」

「幽世だって？」

「おお。今いる、この場所のことよ。知ってるだろ？　おまえさんたちだって、仮親のぱんどらに呼び出されたりするって聞いたぜ」

「……いいや。全然知らないな」

　微妙な引っかかりを感じながらも、護堂は首を振った。

　頭が痛い。この山に来てから悩まされていた頭痛が、またひどくなってきた。

「ははは、悪い。そりゃオレが真っ当じゃない方法で連れてきたせいだな。だから幽世での記憶が取り戻せないのさ。多分、さっきから頭が痛んだりしてんじゃねえか」

「そういえば、さっきも何か言ってたな……全部あんたの差し金かよ！」

　護堂が激げつ昂こうすると、老いた英雄神はくつくつと笑った。

「おおよ。昔は姉貴を穴ぐらに閉じ込めさせたり、いろいろ悪さをしたんだぜ。何かを隠したりチョロまかすのは得意なのさ」

　どういう意味だ？　護堂はいぶかしむ。

　スサノオという神の正体について考え込んだ——途端に、頭痛がひどくなった。

　速須佐之男命ハヤスサノオノミコト。もともとは出雲いずもの土地神。

　だが数あま多たの神々と習合を繰り返し、多くの神話を獲得していった結果、典型的な英雄神へと変質していく。暴風、嵐の神格を基盤にしながら、蛇へび殺ごろしの鉄剣を獲得。

　鉄剣——つまり草くさ薙なぎの劍つるぎは、彼を鋼はがねの征服神に変容させる鍵だ。

　また、スサノオにはトリックスター＝文化英雄としての属性があり、姉たる太陽神・天照大神アマテラスオオミカミを天あまの岩いわ戸とに追いやった挿そう話わはその好例だ。『太陽を隠す／盗む』神話は、環かん太たい平へい洋よう圏けんに普ふ遍へん的に見み出いだせるトリックスターの伝承である……。

　脳内に湧わき上がる、スサノオについての知識。

　しかも、護堂は右腕に『剣』が宿るのを感じて、絶句した。

「は！　さすが智ち慧えの剣を奪ったヤツだな。オレの昔話を聞いて、すぐ武器を造ったか！」

　知ろうと思っただけで、どうして？

　スサノオを斬きり裂さく言こと霊だまの獲得。しかし、頭が割れそうなほど痛い。これでは眼前の神と戦うことになったとしても、勝利は難しいだろう。

　予想外の椿ちん事じに戸惑いながら、護堂は首をかしげた。

　これではまるでウルスラグナ——この『剣』の真の遣つかい手てみたいだ。

「な、何でこんなことができたんだ……？」

「そりゃァここが幽世だからよ。おまえらの住む現うつ世しよとちがって、ここには宇宙開かい闢びやくのときから起こった全ての出来事、これから起こりうる全ての可能性なんぞが書き記しるされているって話だぜ。然しかるべき力を持つ者は、そいつを取ってこれるのさ」

　オレにはできんがな、と断りながら老ろう神しんは語る。

　護堂はさっき聞いた話を思い出した。生と不死の境界にたゆたうアカシャの記憶——それを読み取るのが霊視の力だと。つまり、幽世というのがその領域なのか。

　その環境と『戦士』の能力が化学反応を起こした結果……？

　だが、頭痛がますますひどくなってきた。脳に焼きごてを入れられている気分だ。

　おそらく、霊視の真ま似ね事ごとをした代だい償しようだ。やはり、こういう作業は祐ゆ理りにまかせた方が良いようだ。護堂は苦痛と共に思い知った。

「そんなことより、俺をここから帰してもらえないか。俺の連れ——エリカと、あんたの巫み女こだっていう清せい秋しゆう院いんがヤバイことになってるはずだ。あいつらのところに帰りたい」

「言ったじゃねえか、あいつらの邪じや魔まをさせないために呼んだって」

　頭痛をこらえながらの懇こん願がんに、元『まつろわぬ神』はククッと嗤わらった。

「もうしばらく、ゆっくりしていきな。何なら酒でも出してやるぜ」

　このクソじじい、しらばっくれるつもりか？

　護堂が眉まゆをひそめた途端に、べつの声が話しかけてきた。

「女どもをご案じ召されていると？　ははは、うわさにたがわぬ色好みでござりますな」

　重厚なスサノオの声とはちがう、嗄かれた声こわ音ね。

　あわてて声の方を向く。小屋の隅に、いつのまにか第二の人物が座していた。

　黒い僧そう衣いをまとっている。だが、とても人間には見えない。彼の肌はカラカラに干ひ涸からび、肉らしい肉は皆かい無むだった。完全に削そげ落ちている。

　これはまさしく即そく身しん成じよう仏ぶつ。ミイラそのものだと、護堂は息を呑のんだ。

「そのように愛めでていただけるとは、我らも新たな側そば女めを送った甲か斐いがあるというもの。須佐の御老公の巫み女こ、少々変わり者ゆえ、お気に召していただけるか不安でござったが……。それとも、あの南なん蛮ばんの小娘の方がご心配ですかな？」

　黒衣の即身仏の口ぶりには、かすかな皮肉のトゲが潜ひそんでいた。

　へりくだっているのは上辺だけで、かなりの反骨精神の持ち主だとうかがえる。

「羅ら刹せつの君よ、娘たちの姿をお観みせいたしましょう。しばしの間、お待ちくださいませ」

　さらに、第三の声。今度は女性の声だった。

　干涸びた僧がすわる場所とは反対の方に、護堂は視線を転じた。

　そこには絶世の佳か人じんが端たん然ぜんと座していた。身につけている衣類は平へい安あん貴族の姫君がまとっていそうな、色あざやかな十じゆう二に単ひとえだ。しかし、彼女はどこの出身なのだろう？

　その瞳ひとみは澄すんだ玻は璃りの色。その髪の毛は深い亜あ麻まの色。その肌はきめの細かい象ぞう牙げ色。

　そして、彫りの深い可か憐れんな美び貌ぼう。かなり日本人離れした容姿だ。

　玻璃の瞳の姫君の前には、水すい盆ぼんが置かれていた。

　なみなみと水も張ってある。姫君ともども、いつのまに顕あらわれたのか――。

「あ……あんたたちは何者なんだ⁉」

　護堂は戦せん慄りつを覚えながら質問した。

　スサノオとちがい、即身仏の僧と姫君には闘争心が刺激されない。だから、神ではないはずなのだが……。落ち着きのない護堂に、老いた英雄神が語る。

「この幽世はよ、人でも神でもない輩やからの溜たまり場ばなのさ。特に今集まっているのは、現世との関かかわりをいまだに捨てられねえ半はん端ぱ者ものどもよ。まあ、オレらも長いこと向こうにいたから、しがらみがいろいろあんのさ」

「要するに、後こう見けん役やくの古ふる狸だぬきでございますよ」

　干涸びた黒衣の僧が口を挟はさんだ。

　見たところ歯も完全に抜け落ちていそうなのに、器用にしゃべっている。

「この国の呪じゆ法ほうを司つかさどる者どもが地上の雑事にかま

け、眠れる虎とらにしてやられぬよう口うるさくするのが我らの役目。もっとも、時に御身のような存在が世に出ることもございます。そうしたときにも口を出し申すが」

「……眠れる虎？」

　その言葉に護堂がひっかかったとき、姫君が訴えた。

「ご覧らんなさいませ、羅刹の君。あなたさまの側そば女めたちにございます」

　彼女の前の水盆に、なんと映像が浮かび上がっていた。

　あわてて護堂はのぞきこんだ。水のなかで、ふたりの少女が戦っている。クオレ・ディ・レオーネを携たずさえるエリカ・ブランデッリと、大刀を振り回す清秋院恵那。

　恵那の刀はだいぶ様変わりしていた。直刀から彎刀に、色も黒くなっている。

　ふたりの勝負は、あっけない形で決着がついた。

　天あまの 叢むら 雲くもの 劔つるぎの切っ先を向けられて、いきなりエリカが倒れ込んだのだ。

「恵那のガキめ、幽かくり世よに来てやがる。バカか、あいつは。こんなところで神がかりをしたら、しくじるに決まってるだろうが。オレと天叢雲の御み霊たまに体を取られてやがる」

「神がかり？」

　スサノオの罵ののしりを、護堂は聞きとがめた。

「おお。あいつの媛巫女としての力よ。己を空くうにして、ちはやぶる神の御霊をたくわえる器にできるのさ。ただし、しくじると己の心を失っちまうわけだ。……あんなふうにな。今のあいつは、オレたちの御霊に引きずられてやがるのよ」

「ああなった巫女は、半なかば神の遣つかいのようなもの。相手の小娘も気の毒ですなあ」

　スサノオと黒衣の僧が、無責任に見物している。

怒りにまかせて護堂は立ち上がった。もう穏おん便びんに頼むような真ま似ねはしない。

「俺をあそこまで案内しろ。できるだけ早く、大至急だ」

割れそうなほど頭が痛むのは治まらない。

だが護堂は必死で堪こらえながら、右腕を——『剣』の宿る手をスサノオに向けた。

逆らえばただで済ますつもりはなかった。

「エリカを助けなくちゃいけない。それに、清秋院だって危険なはずだ。あいつらを助けに行くから、俺をここから出せ。あそこに連れていけ！」

しかし、この脅きよう迫はくをスサノオはつまらなそうに聞き流し、黒衣の僧は「ほほう、これはこれは」と茶化すようにつぶやいた。

「ははは、善ぜん哉ざい善ぜん哉ざい。そのお言葉、女どもが聞けばさぞ喜びましょう。まこと『王』の威い名めいに恥じぬおっしゃりよう、感服いたしましたぞ」

誠意のない誉め言葉に、護堂は僧をにらみつけた。

くそ、このミイラをぶちのめせる化身はないのかと歯ぎしりする。

「羅刹の君よ。ここに映りました土地を頭に思い、往ゆこうと念じなさいませ。それだけで十分にございます。この幽世では、現世とはいささか旅の作法も異なるのです」

玻は璃りの瞳の姫君が、つつましい口調で言ってくれた。

ハッとして彼女の美び貌ぼうを見つめる。

どこの生まれかも定かでない佳人は、護堂に深々と頭を下げた。

「あなたさまの仁じん徳とくを以もつて、娘らをお救いくださいませ。衷ちゆう心しんよりお願い申し上げまする」

「言われなくても！　ありがとう、助かります！」

　護堂は即座に礼を言った。

　彼女がウソを告げているとは、不思議と思わなかった。

　危険を察知するカンピオーネの超感覚がそう告げている……ような気がしたのだ。

　護堂は教えられた通り、水面に映っている風景を思い描いた。ふたりの少女が向き合っている場所、美しい川の流れる幽世の何ど処こか。

　次の瞬間、護堂の姿は小屋のなかから消え失せた。

　だから、以下のやりとりは若きカンピオーネが知る由よしもない会話である。

「あの御ご仁じん、女にはだいぶ甘いと見えますな。妾めかけの窮きゆう地ちにいかなる振る舞いを見せるかと思えば、あそこまで我を失うとは。ははは、期待以上ではござりませぬか」

「まあな。恵那のガキがこっちに来たせいで、どうなることかと思ったがよ」

　干ひ涸からびた僧がほくそ笑み、スサノオが不機嫌そうに毒づいている。

「おなごを利用して羅刹の君のご気質を試ためすなど、これきりにすべきでしょう。わたくしはいささか不愉快に存じております、御ご坊ぼう、御老公」

　玻璃の瞳の姫君に責められても、男どもは泰たい然ぜんと聞き流すだけであった。

3

　このままでは斬きられる。ゆっくりと歩み寄る清せい秋しゆう院

いん恵え那なと天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを見つめながら、エリカは絶望しかけた。今の弱った体で打てる手は——。

　必死で考えても、妙案は浮かばない。どうしようもないのか。

「待て、清秋院！　刀を納めろ！」

　聞き慣れた声、見慣れた姿の少年がエリカと媛ひめ巫み女この間に割り込んできた。

　草くさ薙なぎ護ご堂どう。彼女が助けにいかねばと思い定めていた少年である。

「護堂、あなた無事だったの……？」

「どうにかな。ここは俺が何とかするから、すこし休んでろ」

　かすれ声で訊たずねると、背中しか見せないまま少年は答えた。

　誰のせいで追い詰められたと思っているのだ。本当にバカな人ねと訴えかけて、エリカは諦あきらめた。気力と体力の限界が来ていたのだ。なじる代わりに、安あん堵どの吐と息いきを洩もらす。

『——神殺しよ、貴様の言葉に従うわけにはいかぬ』

　恵那が唇くちびるを動かさずに、機械のような声で言う。

　いぶかしむエリカと身がまえる護堂を前にして、彼女はつづけた。

『——神々の敵である貴様は、すなわち神の佩はい刀とうたる我の敵でもある。その貴様の命めいに従うなど恥ち辱じよくもいいところゆえな』

「おまえ……清秋院じゃないな」

　護堂の決めつけに、ふたたび冷れい徹てつな声が答えた。

『——いかにも。我が主と巫み女こは、我を天あまの叢むら雲くもと呼ぶ。見知りおくがいい』

「天叢雲劍！　スサノオの武器、草くさ薙なぎの劍つるぎのことだな！」

　恵那であって恵那でない者、神刀に操られた媛巫女に護堂が叫ぶ。

　彼の周囲にまたたく無数の光を見て、エリカは驚いた。これは『剣』の言こと霊だまだ！

「スサノオは『鋼はがね』と縁の深い神！　彼の領土だった須佐は、砂鉄の産地として有名な土地だ。そして彼は暴風の神でもある。古代では、鉄を鍛きたえる作業に強風はつきものだった！　風が火を煽あおり、強め、その猛火が鉄を溶かすからだ！」

『剣』の輝きが流星群のように動き出し、恵那を襲う。

　標的となった彼女は、無言で地を蹴けった。風のような速さ——人間の脚力とは思えない走力で駆け、襲いかかる『剣』から逃れようとする。

　だが、さすがに追いつかれてしまう。

　あの人形のような身のこなしで神刀を振るい、『剣』を払いのけようともした。しかし、通じない。光球を斬り裂くはずの鋼が逆にはじき返されてしまう。

　あれはやはり天叢雲劍を斬り伏せる言霊なのだと、エリカは確信した。

『——神とその眷けん属ぞくを討うつ言霊。さすが神殺し、厄やっ介かいな武器を持っておる』

　またしても機械じみた声。

　不利を認めたのか、恵那——否いな、天叢雲劍は媛巫女の体を後方に跳躍させた。

　人間大のバッタかコオロギがいれば、同じほどのジャンプをしてみせるかもしれない。あっというまに数十メートルの距離を取られてしまった。

『——幽かくり世よへの滞在で我が巫女の肉体もだいぶ傷いたんできたな。この局面は、仕切り直す方が賢けん明めいか。神殺しよ、先に現うつ世しよへ戻り、待っておるぞ』

恵那の体を操り、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎは自みずからを地面に突き立てた。

彼女たちの足下が黒く染まり、闇やみへと変わる。

これは自分たちをアストラル界に引き込んだ『門』のはず。驚くエリカを尻しり目めに、恵那と神刀は闇に呑のみ込まれて姿を消した。

「あの子、どうしてあんな真ま似ねができるのかしら……？」

「今の清秋院と天叢雲劍は、スサノオの劣れつ化かコピーみたいなものだからな。あのクソじじいの力を真似する程度ならできるんだよ。だから、さっき造った『剣』が通じたんだけど」

説明しながら、護堂がこめかみを押さえている。

ひどく頭が痛むようだ。心配してエリカはあわてて駆け寄った。

「どうしたの、護堂？」

「スサノオを倒す『剣』——無茶な造り方をしたせいか、使うとメチャクチャ頭が痛むんだ。これ以上動き回るのは、ちょっと無理だ……」

どうやら、護堂の方もいろいろあったらしい。彼も限界に近い模様だ。

エリカは深く息を吐き出した。地上へ逃げた清秋院恵那も気がかりだが、最大の懸けん案あんはアストラル界に置き去りにされた現状だ。はたして脱出は可能なのだろうか……？

甘あま粕かす冬とう馬まから携帯電話に連絡が入ったのは、夕方六時頃だった。

「……恵那さんが行方不明？　護堂さんとエリカさんもいっしょに？」

七なな雄お神社で突然の報しらせを受けて、万ま里り谷や祐ゆ理りは驚いた。

『ええ。実は、私どもの方で恵那さんに監視をつけていたんですがね』

　物ぶつ騒そうな報せに、祐理は眉まゆをひそめた。委員会がそこまでする理由は何なのだろう？

『休日なのにみなさんの学校へ向かった恵那さんが、そこでエリカさん、草薙さんとバッタリ遭そう遇ぐう。三人まとめて失しつ踪そう……という、とんでもない筋書きです』

　甘粕が順を追って詳細を語りだした。

　その口ぶりから、監視役は彼自身だと察せられる。そもそも異様に勘かんの鋭い媛巫女筆頭をつけ回すなど、隠おん行ぎよう術じゆつの達人である甘粕以外には難しいはずだ。

「裏にいるのは、やはり」

『古老の方々でしょうねェ。他に考えられませんし。一体、何を企たくらんでいるのやら』

　正せい史し編へん纂さん委員会でさえ顔色をうかがう、古老たち。

　彼らは人でない超自然の存在だ。精せい霊れい、半はん神しん、聖せい僧そう、神しん人じん、大だい呪じゆ術じゆつ師し、怨おん霊りよう……さまざまに言い伝えられる、人を超えて不死に近づいた者たち。現世の理ことわりを外れたため、幽世で生きることを選んだ身の上なのだという。

　祐理は、恵那を守護する御老公のことを思い出した。かつて『まつろわぬ神』だったともいう恐るべき神霊。天叢雲劍を所有する、いにしえの神格。

　カンピオーネの拉ら致ちなど、古老のなかでも彼ぐらいにしかできない芸当だろう。

　しかし、そんな暴挙を行う理由が、祐理にはわからない。

　これでは駄目だ。もっと学ばなくては、もっと洞どう察さつ力りよくを身につけなくては。エリカにも負けないほど聡そう明めいに、恵那の先導など必要ないほど能動的になりたい。

　祐理は決意しながら、申し出た。

「これから学校に参ります。護堂さんの行方ゆくえを視てみるつもりです」

『実は、それをお願いするつもりでおりました。わざわざすいませんねェ』

　うれしそうに委員会随ずいーいちの調査員が言う。

　だが、つづいて祐理が切り出した条件については、渋い声を出した。

『うーん。そいつは上う手まくない選択だと思いますよ。時期尚しよう早そうです』

「いいえ。必要な措そ置ちだと私は信じます。甘粕さん、あまり良い言い方ではありませんが、これは私の協力を得るための条件なのだとお考えください」

　媛巫女が『媛ひめ』と呼ばれるのは伊だ達てではない。

　たしかに正史編纂委員会は、自分たちの上位に立つ組織である。だが媛巫女の血脈とそれに対する崇すう敬けいは、千年にもわたって受け継がれてきた伝統なのだ。

　甘粕たち委員会の人間が、媛巫女に下した手てに出るのはその権威があるためだ。

　祐理は初めて、己の立場を利用するつもりだった。

　約一時間後、城じよう楠なん学がく院いんの校庭に三人は集まった。

　万里谷祐理。甘粕冬馬。そして、リリアナ・クラニチャール。

　陽ひはだいぶ傾いていたが、沈みきってはいない。いわゆる誰彼時たそがれどきだ。そんな曖あい昧まいな暗さのもとで、銀髪の女騎士は甘粕をにらみつけた。

「草薙護堂が、清秋院恵那のパトロンに拉ら致ちされたそうだな」

「そんなに凄すごまないでくださいよ。今回は私たちだって被害者みたいなものです。……だから呼ばない方がいいって言ったのに」

　ぼそりとつぶやく正史編纂委員に、祐理は首を横に振った。

「リリアナさんの魔術と知識は、このような事態には必ず有用になるはずです。なんと言いましても魔女の力は他の方では持ち得ないものですし……」

　卓越した『魔女術』の遣つかい手て。

　実のところ、それがリリアナ・クラニチャールの最も貴重な資質である。

　武芸ではエリカとほぼ同等。霊視の力では圧倒的に祐理が上。

　しかし、この魔女術はリリアナにしか使えない。鳥獣と意思を通わせ、使役する。空を鳥のごとく飛ひ翔しようし、水中を魚のように泳ぎ回る。森の草木や花を育はぐくみ、霊薬を調合する――それらは、魔女たちが最も得意とする分野なのだ。

「ま、祐理さんが是ぜ非ひにと言うのであれば、これ以上の反対はいたしません。リリアナさんにも立ち会っていただきましょう。……では、早速はじめてみましょうか」

　甘粕にうながされて、祐理は改めて『現場』を見渡した。

　護堂、エリカ、恵那の三人が失踪した校庭の一角。すぐ目の前には校舎の壁がある。

　――ぞくり。背筋に震えが走る。

　すさまじいほどの呪法の痕こん跡せきを見出したのだ。

　リリアナも感じ取ったのだろう。目をすがめて校舎の壁をにらんでいる。

「万里谷祐理、ここで何があったか視みえるか？　残念ながら、相当に強い力が使われたとしか、わたしには読み取れないんだが……」

悔くやしそうに言われて、祐理は目を閉じてみた。

視覚ではなく、五感を超えた霊的資質で『視る』ためだ。その瞬間に幻視が来た。

——天に君臨する太陽が、漆しつ黒こくに変へん貌ぼうする。まるで日につ食しよくだ。

——鋼の大刀を携たずさえた暴風の神が顕あらわれ、豊ほう穣じようの大地を灰色の荒野に変えていく。

「やはり、速須佐之男命ハヤスサノオノミコト……」

ヴォバン侯こう爵しやくの一件以来、ひさしぶりに体験した幻視だった。

まぶたの裏に描き出された光景から、祐理は何が起きたのかを感かん得とくした。

「護堂さんたちを連れ去った方、その方法、そして何処いずこに行かれたかが視えました」

全身を酷こく使しいしたような疲労を覚えながら、祐理は言った。

リリアナは興味津しん々しんの表情。しかし甘粕は、どこか疲れた表情だった。

「もしかして甘粕さんも察していらっしゃったのですか？」

「天下のカンピオーネをさらった御ご仁じんですからね。見当はつけていました。霊視をお願いしたのは、確証を得たいと思ったからなんですよ。……身内の恥をさらす話ですし、やっぱり部外者にはご退席願いたいのですがねェ」

「いいえ。リリアナさんのお智ち慧えが必要なのは、これからのはずです」

と、恨うらめしげな視線を向ける甘粕に主張する。

そして祐理は、会話に交まざれなくて憮ぶ然ぜんとしているリリアナに頭を下げた。

「お願いがあります。幽世——生と不死の境界にさらわれた護堂さん、そしてエリカさんと恵那さんを救う方策をお教えください」

　一通りの事情を聞き終えた魔女にして大騎士は、難しい顔をした。

「かつて『まつろわぬ神』だった神霊だと？　この国にはそんな怪物が居着いていたのか！」

「できることなら、とっとと成じよう仏ぶつでも解げ脱だつでもしてほしいんですけどね。それもかなわぬまま、千年以上も居座られています。正直に言って、迷惑な話ですな」

「あ、甘粕さん、その言い方はちょっと……」

　不ふ謹きん慎しんな言いぐさをたしなめながら、祐理は魔女の回答を待った。

　護堂たちが幽世に囚とらわれた以上、救出には向こう側への遠征が必須となる。その術を心得ているのは、今いる者のなかでは銀髪の魔女だけのはずなのだ。

「アストラル界に移動するためには、魔術の儀式と然しかるべき薬が必要だ。儀式のやり方はわたしも知っているのだが、問題は薬だな……」

　説明しながら、リリアナの表情が曇くもる。

「調合の仕方も知っている。だが、材料がない。貴重な薬材がいくつも必要なんだ。持ち合わせも残念ながらない。実家から送ってもらわないと」

「買いに行かれてはどうでしょう？　そういうものを扱うお店が東京にもあるそうですし」

　甘粕たち正史編纂委員から、祐理は聞いていた。

　呪術に必要な道具や触しよく媒ばいを隠れて売る店があり、ときどき監査に行っていると。

　しかし、リリアナは『まずい』とばかりに表情を引きつらせた。

「……実は、どこにどんな店があるとか全然知らないんだ」

「え？」

「いや、その。草薙護堂のお世話を焼くことで忙しくて、東京近辺のそういう場所とか関係者とかは全然チェックしてなかったり……」

　リリアナがうつむきながら、恥ずかしそうに告白する。

　左右の人差し指を突っつき合わせながら頬ほおを赤らめる姿は、妙に可愛かわいらしい。いつもの凛りりしさとは大ちがいだ。だが、祐理は『本ほん末まつ転てん倒とう』の四文字を思い浮かべた。

「で、でしたら、甘粕さんに案内を頼みましょうっ」

　とりあえず、無難な解決策を口にしてみる。しかし現実は非情だった。

「いや、無理でしょう。難度Ｅの上位魔術に必要な薬材や触媒なんて、どこの店でもお取り寄せ商品ですよ。ネット通販なら『納期未定』と出るところです。飛び込みで駆け回っても、手に入りっこないですって」

「そ、それは品しな揃ぞろえが悪すぎだろう！」

「そんなものを常備しているクラニチャール家が異常なんですよ！」

　現実を語る甘粕に、リリアナが食ってかかっている。

　さすがにイタリアから送ってもらう時間はない。その間に最悪の事態へ発展してしまう。

　べつの方法を考えようと、祐理が決意した瞬間だった。

　奇妙なあやしさを感じたのだ。……甘粕から。

　前に、絶対面白いと薦すすめられた推理小説を読んだことがあ

る。

　その一〇ページ目で登場した人物の名前にも、同じあやしさを感じた。ずっと気にしながら読み進めていたら、その人物がやはり犯人で落胆したものだ。

　以来、あらゆるミステリーものを避けてきた祐理は、はっきりと言った。

「甘粕さん、何か隠していらっしゃいますね？」

「……はて。とんと覚えがありませんな。気のせいでは？」

　正史編纂委員会のエージェントは、微妙に目を逸そらした。

　だが、かまわずに追及をつづける。思いつくまま言ってみることにする。

「何となく沙さ耶やの宮みやのお名前が思い浮かびます。もしかして、あの家と関わりが？」

「沙耶宮家？　何だ、それは」

「正史編纂委員会は、沙耶宮家の指導で運営されている組織です。呪術についての造ぞう詣けいが深いお家柄で、数代前のご当主は欧おう州しゅうにも留学されて、あちらの魔術も学ばれたと——」

　口を挟んできたリリアナに説明しながら、祐理は思い出した。

　ヴォバン侯こう爵しゃくとの一件。あのとき訪れたのは、青あお葉ば台だいの機密文書館。

　あそこには甘粕のようなエージェントが日本各地から蒐しゅう集しゅう・没収した魔導書が保管されている。そういえば、委員会が集めてくるのは書物だけではない。

「もしかして、甘粕さんたちが没収した品々のなかにリリアナさんの言うお薬があったりするのですか？　それが沙耶宮のお屋敷に保管されていたりとか……」

「ははは、まさかそんな。適当なことを言わないでくださいよ」

「適当かどうかは、調べてみればわかる」

　とぼける甘粕の前で、リリアナが愛剣を召しよう喚かんした。

　魔剣イル・マエストロ。最高の鍛か冶じ師しと魔術師の手で造られたサーベルだ。

「その屋敷とやらに乗り込んで、わたしが直に探してみよう。なければ、あなたたち委員会の施設を片っ端から探ってみるだけだ」

　こちらの意図を話の流れから察したのか、リリアナが凛々しく言ってくれた。

　倫理的には不適切な、しかし堂々たる宣言。

　祐理は感心した。脅きよう迫はくとはこう行うべきなのか。なるほど勉強になる。

「……ほんと、呼ばない方がよかったですねェ。ま、白状すると必要な薬材の在あり処かには心当たりがあります。おっしゃる通り、沙耶宮のお屋敷です。でも、いろいろ事情がありまして、あの家のコレクションには手をつけたくないんですよ」

　ついに甘粕が、ため息まじりに告白した。

　親しい人々の救出に近づいたと知り、祐理の心は大いに浮き立った。

4

　幽かくり世よ、アストラル界、生と不死の境界。

　さまざまな呼称を持つ謎なぞ空間で、護ご堂どうは途方に暮れていた。

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎと、あの刀に操られた恵え那なが逃げたのはずいぶん前だ。体感では一時間ほど経たった程度に思えるが、当てにならない。この世界の時間経過が地上と同じであ

る可能性は低そうだからだ。あのあと、護堂の頭痛はすこし休むと治まったのだが——。

　エリカの体調は悪くなる一方だった。

　苦しそうにハァハァと息を荒らげ、玉の汗を流す。さわってみると、体が異様に熱い。かなりの高熱を出しているようだ。体力も失ったのか、動き回ることもできなくなった。

　川原かわらに立っていた大樹の木陰に横たわり、ぐったりとしている。

「こうなったら、さっきの山に戻るしかないか……」

　護堂は独りごちた。エリカを助けるための知識も技術も持たない以上、誰かの助けを借りるしかない。そして、この謎空間にいる知ち己きはあそこにいる三人（？）だけだ。スサノオとミイラのような坊さんはともかく、あの姫君の親切心には期待してもいいかもしれない。

「なあ。この世界って一体、どんな仕組みになってるんだ？」

　エリカの体調を案じながらも、護堂は訊たずねた。

　ここから脱出して彼女を救うためにも、知っておきたい情報だったのだ。

　どこまでも流れていきそうな美しい川。

　本当に見渡す限りの野原。

　地平線の彼方かなたまで、この景観がひたすらつづくだけ。何の変化もない。

　スサノオたちがいた山小屋とは、似ても似つかぬ場所だ。あそこからこの川原まで一瞬で飛んだとは、自分でも信じがたい旅程だった。

「……スサノオ神がいた場所と今いるここは同じ水平線上に存在していないの。本当なら接点がないはずの不連続な異空間や結界。それらが寄り集まって、アストラル界は形成されているわ。あなたはその間を空間転移して移動したのよ……」

　この世界については書物で学んだだけだがと前置きしてから、エリカは語った。

　いつもより語り口に精せい彩さいがない。彼女の体力は着実に奪われつつあるらしい。早くどうにかしてやらねばと焦あせりながら護堂はうなずいた。

「つまりマンションみたいなものか。隣り合う部屋同士は壁で仕切られているけど、廊ろう下かや階段を使って行き来できるんだな」

　無数の独立空間が蜘く蛛もの巣のように結びついた、広大な世界。

　嵐の神でもあるスサノオがどれだけ風雨を呼ぼうとも、被害を受けるのは彼がいる『部屋』だけなのだ。存在するだけで災さい厄やくになる『まつろわぬ神』が隠居できるわけだ。

「……でも『戦士』の化け身しんになったばかりだから、しばらく『剣』は使えないわ。スサノオ神のもとへ行くのは、もっと時間を空けてからの方がいいんじゃないかしら」

「ダメだ。それじゃエリカの体が保もたないだろ」

　ウルスラグナ一〇の化身。

　草くさ薙なぎ護堂が古代ペルシアの軍神から簒さん奪だつした権能には制約が多い。

　一度使用した化身は一日経たたないと再使用できないというのも、そのひとつだ。

　あの老ろう神しんたちと出会ったときのことは、すでに報告済みだ。切り札のない状態でスサノオと対面するのは避けるべきだというエリカの訴えに、護堂は首を横に振った。

「まあ何とかなるさ。気にくわない連中ばかりだったけど、親切そうな人もいたし」

　護堂はエリカの体を抱き上げ、背中におぶった。

　さっき教わった方法を試ためしてみる。あの山小屋の風景をイメージし、往ゆこうと念じた。

――その直後、護堂とエリカは砂浜に立っていた。

美しい紺こん碧ぺきの海が眼前に広がり、静かなさざ波がこちらへ押し寄せてくる。

「な、何だよ、これは！」

「イメージが甘いせいね……。護堂はカンピオーネだけど、専門の訓練を受けたわけではないから……。多分、きちんとした魔術の素養がないと上う手まく移動できないんだわ……」

「さっきはエリカたちの居場所に、ちゃんと来られたんだぞ！」

「……それはきっと景色を見せてもらえたから……。実際に目で見ながらイメージするのと、記憶を頼りにイメージするのとでは難易度が大きくちがうもの……」

背負われたまま説明するエリカ。

だが、その口調が徐々に途切れ途切れになってきた。護堂は恐怖した。このままでは彼女の身が危ない。次は上手くやらなくては！

ふたたびイメージを固める。山だ。今度こそスサノオのいる山に向かうのだ。

次に護堂たちが訪れたのは、禿はげ山やまのまっただなかだった。

赤茶けた岩肌。乾いた風。青く澄み渡った空。鷲わしやコンドルなどの猛もう禽きん類るいが飛んでいても違和感なさそうだ。あの緑したたる深山とは正反対の景色だった。

「くそっ、もう一度だ！」

三度目のイメージ、三度目の転移。今回は自然のなかではなかった。

白い空間。周囲の全てが白かった。

ただ白いだけの空間が地平線の果てまでつづいている。

カチカチ。カチカチ。しかも、変な音が聞こえてくる。時計の針

が進む音だ。

　エリカを背負ったまま、護堂は辺りを見回した。

　すると、その視線の先に古びた置き時計が現れた。だが、背後からカチカチという音がもうひとつ発生する。振り返る。今度は銀の懐中時計が出現。そして左からカチカチ。音の方を向くと大きな時計塔が……。

　針の音を聞くたび、新たな時計を発見する。これを数十回も繰り返すことになった。

「……駄目よ、護堂。あなた、完全に行き先を見失っているわ……」

　か細いエリカのささやきにたしなめられた。

　護堂は大きく息を吐き出した。どうやら自分は袋ふくろ小こう路じに入り込んだようだ。もう一度チャレンジしてみよう。落ち着いてイメージ。今度こそと願いをかけて転移。

「……やっぱり駄目みたいね……」

　エリカの疲れた声を聞きながら、護堂は舌打ちした。

　ふたりは今、石造りの街にいた。

　イタリアの田いなか舎街まちにでも来たのかと思うほど瀟しよう洒しやな、ゴシック様式の街並み。

　軒のきを連ねる小さな家々、レンガを敷き詰めた道や広場。ここが地球上なら、この辺一帯が世界遺産に指定されてもおかしくない風景だ。

　ただし、人間の姿がない。見渡す限り誰もいない、無人の街だ。

　ハァハァ。おぶっているエリカの呼吸がせわしない。

　だいぶきつくなってきたようだ。度たび重かさなる転移が負担をかけた可能性もある。

　ちょうどいいことに、小さな公園が近くにあった。護堂はそこに

入り、エリカを芝生に下ろした。自分も隣にすわる。ゴミ箱でもあれば蹴けり飛ばしたい気分だ。

「くそ、参ったな。このままじゃ八方ふさがりだ」

「……ねえ護堂、ひとつお願いがあるの」

　ドキリとした。珍しくエリカがあどけない声だったせいだ。

　彼女がこんな声を出すのは、せいぜい寝起きのときぐらいのはずなのに。明らかにいつもより弱っている。

「もうすぐ最さい期ごになるかもしれないし、キスとか熱い抱ほう擁ようとかを期待してもいい……？」

「バ、バカ言うな。最期だとか縁起でもないッ」

　前半も後半も受うけ容いれがたい発言だ。護堂は言下に退しりぞけた。

　しかしエリカは淡々と首を横に振って言う。

「これは高確率でありうる未来よ……。わたしにはもう、この体を自力で治す術すべはない。アストラル界から自力で脱出する策もない。このピンチを救ってくれる第三者の居場所にもたどり着けない……。完全に手詰まりなのよ」

　護堂は反論の言葉を呑のみ込んだ。

　スサノオたちのもとへ転移できないのは、まさに自分の不ふ手て際ぎわなのだ。

「だから、ここからは未来に備えて行動しましょう。わたしがいなくなったあとのことも指示しておきたいし……」

「あのな、そういう遺ゆい言ごんみたいな話は冗談でもするなよ！」

「冗談なんかじゃないわ。八方ふさがりだって言ったのはあなたじゃない？」

　あげ足を取られて、護堂は沈黙した。

　その通りだ。自分でもわかっているのだ。スサノオたちのもとにも帰れない以上、もう打てる手はない。言われるまでもなく承知しているのだ。

「じゃあ、改めて言うわね。キスして、強く抱きしめて。……何ならシチリアでのつづきもしてほしいのだけど、ダメ？　まだ決心がつかない？」

　いたずらっぽく笑いながらの問いかけ。

　エリカは護堂の手に自らの手を重ねていた。いつものように理り不ふ尽じんな怪力は込められていない。腕力を増強するほどの余分な呪じゆ力りよくも、体力自体も残っていないのだ。

　だが、それでも尚なおからかうような表情を作る彼女は、切ないほど可愛かわいらしかった。

「だったらせめて、わたしのことを本当はどう想おもっているのか教えてほしいわ……。いつもみたいに逃げ出したりごまかしたりせずに、はっきりしてくれる……？」

　エリカをどう想っているのか。そんなことは決まっている。

　これで最期になるかもしれないと彼女は言った。認めたくない。認めるわけにはいかない言葉だ。だというのに、護堂の理性はその正しさを認めてしまっている。

　怒りと焦あせり、そして彼女を失うかもしれないという恐怖がこみ上げてくる。

　護堂は重ねられていたエリカの手を握りしめた。

　顔を寄せる。彼女の魅み惑わく的な唇くちびるに、自分の唇を近づける。そして覆おおいかぶせて――。

　キスを交わす。

　しばらくそのままでいた。

「……初めてあなたの方からキスしてくれたわね、護堂」

　数十秒後、唇を離すとエリカにささやかれた。

こんなピンチだというのに、ひどく幸せそうな満ち足りた顔だ。

それを見て、護堂の心は激しくざわついた。

彼女を愛いとおしく想う気持ち、彼女を失うことへの恐怖、どうにかしなくてはという焦り、激しい怒り。それらが渾こん然ぜん一いつ体たいとなって押し寄せてきたのだ。

そして、そのなかで最も強い感情は——怒りだった。

彼女を自分から奪い去ろうとする状況への怒り。無力な己おのれへの怒りだ。

「あ……痛いわ、護堂。もうすこしだけ力を抜いて……」

思わず手に力をこめたら、エリカに懇こん願がんされた。

彼女の華きゃ奢しゃな手を握りっぱなしだったのだ。だが緩ゆるめる気にはなれなかった。むしろ、さらに力を強くする。エリカは嫌がらずに受け容いれてくれた。

逆に歓よろこぶように目を細め、微笑ほほえみ、こちらに寄り添い、体重を預けてくる。

この娘は今、草薙護堂に身も心も委ゆだねきっているのだ。

それを理解した途端、護堂のなかで怒りが最大限に高まった。エリカの手を離して立ち上がり、天をにらむ。

その向こうにいるかもしれない神々。バカげた悲劇を生み出そうとする運命。

そういった超常の存在をにらみつけ、怒りを燃やす。

大切な人との永遠の別れに涙を流す？　バカな。悲ひ嘆たんに暮れながら残された生を精一杯生き、恋を語る？　バカな。愛しい人を亡くしたあとは身も世もなく嘆き悲しみ、心に傷を負ったまま生きつづける？　ますますバカな！

それは『王』の行動ではない。神殺しの魔王がする振る舞いではない。

何より、俺に受け容れられる生き方ではない！

護堂は獰どう猛もうに双眼をぎらつかせた。これが神々との、同じ王者との戦いであれば、心中で燃えたぎる闘争の喜き悦えつに微笑するところだが、今はそんな気分ではない。

神と出会えば神を殺し、仏ほとけと出会えば仏を殺す。

納得できない運命があれば、神をも殺す権能と闘志を以もつて、粉々に踏み砕く。

それができなくて、誰が魔王などと呼ばれるものか。誰に断ってエリカを奪うつもりなんだ。誰の女を連れていくつもりなんだ！

「……護堂？　どうしたの、怖い顔をして？　何だかいつもとちがうわ？」

隣でエリカが不審がり、すこしだけ怯おびえている。

だが無視する。この娘を慰なぐさめ、愛いとおしんでやるのは後まわしだ。

今はムカつく運命を、彼女を奪い去ろうとする全てを迎え撃ち、叩きつぶしてやるのが先決なのだ。何ど処こに往ゆけばいい？　誰を倒せばいい？

俺が戦えばいいのは、何処のどいつだ。絶対にただでは済まさない——!!

痛みが襲ってきたのは、この瞬間だった。

脳に焼きごてでも突っ込まれたかのような激痛。

これはさっき、スサノオの知識を獲得したときの痛み。霊視の負ふ荷かによるものだ。

なぜ、このタイミングで？　あのときは『戦士』——神の知識を『剣』へと変えるウルスラグナの化身が活性化したからだろう。

だが、この状況で力を発揮する化身はないはず。……いや。

それともあるのか。エリカを救い、エリカを守るために有効な化

身があるというのか？

　そこに思い至った瞬間、変化が訪れた。

　視みえたのだ。頭痛と引き替えに、新たな力の用法を霊視することができたのだ。

　ヴォバンとの決闘以来の感覚。比類なき全能感が体と精神を駆かけ巡めぐる。今の俺なら全てをつかめる。全てを手に入れてみせる！

「エリカ……絶対におまえを手放さない。だから、約束しろ」

　ウルスラグナ第五の化身を掌しよう握あくした護堂は、言こと霊だまを吐き出した。

「必ず俺のそばに……命がなくなろうと、世界が終わりを迎えようと、この世の神様全部とケンカすることになろうと、最後まで俺のそばにいると誓え」

　ただの言葉ではない。神より簒さん奪だつした力を宿らせた聖句。

　そして、永遠を誓約させる傲ごう慢まんな王者の勅ちよく命めい。

　その威に間近で接したエリカは、華か麗れいな美び貌ぼうを歓喜で恍こう惚こつとさせた。

「あなたまさか、あの化身に目覚めたの？　ついにウルスラグナの全てを掌握したのね!?」

「ごちゃごちゃ言わなくていい。誓うのか誓わないのか、今すぐに決めろ！」

「もちろん誓うわ！　世界が滅ぶその日まであなたの隣にいると、わたしの全てを懸かけて！」

　厳しい叱しつ咜たに、エリカは即座に叫んだ。

　今まででで最も華はなやぎ、最も従順そうな、心からの笑顔と共に。

彼女の誓約を聞いて、護堂は深くうなずいた。

輝く一五歳の少年。

サルデーニャ島で出会った聖なる軍神が選んだ姿。

英雄として聖者として、人々を導みちびき庇ひ護ごするウルスラグナ第五の化身。

この力を掌しよう握あくした今なら、この娘を必ず守れる。そのためにも、彼女には今ここで草薙護堂の庇護者なのだという印を刻みつけ、加護と祝福を授けなければいけない。

華きや奢しやなエリカの肢し体たいを、護堂は芝生の上に押し倒した。

すこし乱暴な振る舞いだったが、どちらも気にしない。今のふたりは王とその庇護者。支配する者と支配される者であった。

護堂は横たわる少女の上に覆おおいかぶさり、ふたたび唇を奪った。

「——ん。んんっ」

喘あえぐエリカの唇を存分に味わい、貪むさぼる。

本当なら弱っている彼女の体を気き遣づかい、慈いつくしんでやるべきところなのだが——。

もう止められそうにない。護堂はそのまま突き進むことにした。エリカの唇に唇を重ね、唇でなぞり、舌を彼女の口内に差し入れる。

舌で彼女の舌を探す。捕らえた。絡からませる。向こうも応こたえる。絡ませ合う。絡み合う。

ぴちゃぴちゃと粘ねん膜まく同士で睦むつみ合う音が聞こえる。

護堂の体の下では、華奢なくせに出るべきところはひどく肉付きのいいエリカの肢体が激しく息づいていた。

やわらかで弾力に富む、不思議な感触。そして何より熱い。

　彼女との密着が生み出す心地よさと、幾度も幾度も繰り返すキスが生み出す陶とう酔すい感かん。

　たがいが吐き出す息の熱さも、生々しく感じることができる。

　エリカが乱れる様子を見、エリカが喘あえぐ小さな声を聞き、エリカの匂においをかぎ、エリカの唇と舌と唾だ液えきを味わい、エリカのやわらかさを肌で感じ——。

　五感の全てが、脳と全身を蜂はち蜜みつにひたすような愉ゆ悦えつをあたえてくれる。

　だが、護堂の目的はこの陶酔を得ることではなかった。

「エリカ、これからウルスラグナの——俺の力をおまえに流し込む。かなりきついはずだけど、耐えろよ。いいな？　我慢できるな？」

「ええ、わかったわ。必ず耐えてみせる。……お願い、護堂」



けなげな誓約にうなずき、護堂はまたキスで彼女の唇をふさいだ。

唇も舌も、唾液も歯も、口内でふれることのできる部位は全て慈しむつもりで接せつ吻ぷんする。

そうしながら護堂は、エリカとの間に道のようなものが開くのを感じた。

目には見えない呪じゅ術じゅつの道。ここを通せば、最強の『加護』を向こうに伝えられる。

護堂は己の下腹部に意識を向けた。

東洋医学で臍せい下か丹たん田でんと呼ぶ場所。体の最さい奥おうともいうべき部位。

ここから己の呪力を上昇させる。その過程でただの呪力を『加護』へと精せい錬れんする。

下腹部から腹へ、胸へ、喉のどへ、そして口へ。

背骨を沿うようにして上昇させた呪力を、己の唇からエリカの唇へ流し込む。

この力を至し純じゅんの『加護』に変えるのは、彼女に対する想いだ。この娘を守り、力を授さずけたいと願う、草薙護堂の心だった。

「感じる……あなたがくれるものを感じるわ、護堂」

うっとりと目を閉じて、エリカがつぶやいた。

キスしたままの会話。唇の震えも、その柔らかさも甘さも、全て感じ取れてしまう。

だが、これはまだ手はじめ。本番ではない。

体内で精錬した『加護』をエリカに注ぎ入れる。この流れを護堂は加速させた。

「————!?」

エリカが短く、苦く悶もんの呻うめきを洩もらした。

とっさに唇を放す。涙目になった彼女はせわしなく喘あえいでいた。

「エリカ、もし耐えられないようなら……」

「ううん、大丈夫。つづけて。今のは急だったから、びっくりしただけ。次はきちんと我が慢まんできるから、早く先に進みましょう……？」

明らかな強がり。だが護堂は気づかないふりをした。

エリカ・ブランデッリの情愛も肉体も、全て草薙護堂のものだ。この少女に苦痛と忍耐を強しいる行為は、己にのみ許された特権なのだ。

自分以外の何者にもエリカを苦しませることは許さない。

だから、今ここで彼女を苦しめる。その苦痛とひきかえに最強の『加護』をあたえる。

護堂は彼女の目を見つめた。熱いまなざしが返ってくる。うなずき合うふたり。そのままもう一度、深く交わり――。

「くっ――！　大丈夫、つづけて……！」

苦痛に体をのけぞらせるエリカ。

その肢し体たいをしっかりと抱いて支え、その手を握りしめて励ます。ぐっと握り返された。その力の強さで、彼女の苦しさが想像できる。

護堂はもう遠慮せず、ウルスラグナの『加護』を一気に送り込んだ。

「あ、ああああああッ！」

エリカが叫ぶ。だが止やめない。躊ちゆう躇ちよしない。

ついに彼女の体の最奥へと『加護』が到達した。下腹部の要所たる臍下丹田に。

「――――――！」

　エリカの叫びがかすれ、声にならなくなった。

　護堂の手を握りつぶしそうなほど強くつかみ、血が出るほど深く背中に爪つめを突き立てる。その痛みを堪こらえながら、護堂はエリカと唇を合わせつづけた。

　彼女の方がもっと苦しいはずだ。だから、痛みはまったく気にならない。

　聖なる軍神の加護。

　輝ける英雄があたえる勝者の印。

　護堂の送り込んだ呪力の波動が、エリカの心身を一時的に強化していく。

　アストラル界の環境にも短時間で適応してしまうカンピオーネの頑強さが、あらゆる負傷に打うち克かとうとする無む尽じん蔵ぞうの生命力が、戦闘に際して己を最高の状態に向かわせる闘争本能が、エリカ・ブランデッリのなかに宿ったのだ。

　エリカはようやく力を抜いた。

　全身が汗で濡れているものの、その美貌にもう苦痛の影はない。

　護堂の手をしっかり握りしめたまま、彼女はしっとりと微笑んでくれた。

　その微笑みに、疲れた笑顔で応える。だが、これはとても気持ちのいい疲れだ。

　護堂は彼女から離れた。熱くやわらかなエリカの肢し体たいを名な残ごり惜おしく思う気持ちは正直あったのだが、さすがにこれ以上くっついているのはまずい……。

　ところが、すかさずエリカも身を起こした。

　満面の笑顔で、無防備にしなだれかかってくる。彼女の重みが心地よい。

だが護堂は理性を総動員して訴えた。

「ま、待て。儀式はもう終わったんだ。ウルスラグナの加護はおまえの体にきちんと宿っているはずだ。だから、これ以上は必要ないわけでだな……」

「そんなことは百も承知よ。これは護堂の愛情へのお返し。おとなしく受け容れなさい」

今度はエリカに押し倒されてしまった。

もうすっかり回復したのか、彼女は護堂からマウントポジションをあっさり奪ってみせた。

「あ、愛じゃないだろッ。友情とか心配とか、もっとこう——」

「いいえ、愛よ。わたしにはわかるわ」

唇が降りてくる。ひさしぶりの、エリカからのキス。

それを振り払おうと護堂は力を入れかけて……途中でやめた。なぜか、そんな気分ではなくなったのだ。そのままの体勢をしばらく維い持じ。

ようやく唇を放したエリカは『合格』を伝えるように笑いかけてきた。

第７章　天叢雲剣

1

　番ばん町ちよう皿さら屋や敷しき。幽ゆう霊れいが皿を数えて「一枚足りない」とつぶやく、あの怪談。

　舞台となった千ち代よ田だ区の番町界かい隈わいは、江え戸どの昔から直じき参さん旗はた本もとや大だい名みようなどが屋敷をかまえた高級住宅街である。

　その三番町に、沙さ耶やの宮みや家は邸てい宅たくをかまえていた。皇こう居きよにも程近い辺りだ。

　オフィスや高級マンションなどが並ぶなか、表通りから隠れるような場所に沙耶宮家の邸宅はあった。大たい正しよう時代に建てられたという洋館である。

　地所を考えれば相当な資産のはずだが、とにかく印象が悪い。

　老ろう朽きゆう化かが著いちじるしいうえに、幽霊屋敷じみた暗さ、あやしさがにじみ出ているせいだ。

　甘あま粕かすの運転する車で連れてこられた祐ゆ理りは、不安になってきた。

　何か不吉なものが居着いていそうな――いやな気配を感じたのだ。そういえば、沙耶宮家に来たのはこれが初めてだった。

「もう連絡はしてありますので、参りましょう。こちらへどうぞ」

　甘粕が先に立ち、屋敷の入り口を目指す。祐理とリリアナもそれ

につづいた。

　駐車場から玄関まで、庭のなかを二分ほど歩く。

「……想像していたよりも狭い屋敷だな。正せい史し編へん纂さん委員会を統すべる氏族クランの当主が住む場所にしては、手て狭ぜまじゃないのか？」

　屋敷を見回しながら、リリアナが言った。

「土地柄を考えれば十分に破格な物件ですって。実は世せ田た谷がやにもっと広い家もあるんです。ここは沙耶宮家当主のための別邸ですよ。現在の主である馨かおるさんは次期当主ですがね」

　勝手知ったる様子で、甘粕は玄関を開ける。

　出迎えてくれたのは、フォーマルな執しつ事じ服ふくを着た若い男性だった。

　熟じゆく練れんしたホテルマンのような立ち居振る舞いの彼と小声で話したあと、甘粕は奥へと歩き出す。その背中を祐理たちも追っていくと、書しよ斎さい風ふうの部屋に到着した。

「どうしたんだい、今きよう日子こさん？　急に電話をかけてきて。明日？　ごめん、明日はもう約束が入っていてね。ははは、まさか。デートなんかじゃないよ。変なことを疑うんだな」

　聞き覚えのある美声。

　書斎では、ちょうど沙耶宮馨が携帯電話を切るところだった。

　甘粕と祐理、そしてリリアナに気づいた馨が早速話し出そうとしたところで、また携帯が鳴った。液晶を眺め、「失礼」と言って電話に出る。

「ひさしぶりだね、晴はる美み。うん、ぼくも元気さ。すまない、これから大切な話をするところでね。一度切ってもいいかな。……ああ。来週の約束、ちゃんと覚えてるよ。じゃあまた」

　短く話して、馨は電話をオフ。その直後にまた着信音。

「……今度はどなたですかね？　清きよ子こさんですか？」

「いいや、綾あや乃のだ。でも、あとにしよう。みなさんがせっかく来てくれたことだしね」

肩をすくめる沙耶宮家次期当主に、甘粕は苦い口調で諫かん言げんした。

「馨さん。あなたに好意を抱く女性へご自分の性別をおっしゃらないのは、どうかと思いますがね。だまされているとも知らない彼女たちがかわいそうじゃありませんか」

「なに、カミングアウトしても『それでもかまわない』って娘は多いんだよ、意外と」

この媛ひめ巫み女こは、恵那とは異なる意味で問題児だった。

馨にあこがれ、そして恋こい焦こがれる女性はあとを絶たないらしい。しかも彼女はそれを面白がって、そういう女性たちと積極的につきあうのだ。

「リリアナさんにご紹介しましょう。こちら、沙耶宮馨さん。われわれ正史編纂委員会・東京分室の室長にして沙耶宮家次期当主。そして媛巫女のおひとりでもあります」

「……媛巫女だって？」

リリアナが目を大きく見開いた。

意外だったのだろう。白いシャツにネクタイ、そこに男物のスラックスを合わせた姿は、美しくはあったが可か憐れんな乙女おとめとは程遠い。

馨は気品あふれる優美な笑顔で、欧おう州しゆうからの客人に挨あい拶さつしてみせた。

「はじめまして、リリアナ・クラニチャールさん。これでもそこにいる祐理や、清せい秋しゆう院いん恵え那なの同どう僚りようなんだ。巫女姿が想像できないって、よく言われるけどね」

馨は手振りでソファを示し、リリアナと祐理に勧めてくれた。

ふたりがすわるのを待ってから、自分も向かいの席に腰を下ろす。甘粕はその背後で控えるように立ったままだ。

「祐理とリリアナさんの要望は、さっき電話で聞いた。結論から言えば、条件次第では協力してもかまわないよ」

「いいんですか、馨さん？　先々代が文句を言いますよ」

「それはたしかに厄やつ介かいだろうけど、相応のメリットが望めるなら惜しみはしないさ。ま、その辺りはこれからの話し合い次第かな」

　話し込む主従の間に、リリアナが口を挟んだ。

「腕ずくで奪っていくという手もあるぞ」

「それはよくないね。恵那に会ったんだろう？　ぼくら委員会の関係者にも、大騎士の武芸と魔術に対抗できる人材はいる。考えなしに暴れるのはおすすめできないな」

　リリアナはフンと鼻を鳴らして、発言を控えた。

　この場所での戦いだけならともかく、幾人もの精せい鋭えいに追われる身になれば勝機はない。それは承知しているのだろう。結局、この国は彼女にとってアウェイなのだから。

「今ここで襲われても、甘粕さんが楯たてになってくれるだろうしね」

「断っておきますが、給料分以上の忠ちゆう誠せい心しんを期待されてもお応こたえできかねます」

「…………ま、それはともかく」

　間かん髪はつをいれない甘粕の相づちに、馨はコホンと咳せき払ばらいをした。

「リリアナさん、それに祐理。そろそろ本題に入ろう」

　祐理は思わず身がまえた。男装の巫女の曲くせ者ものぶりは、よく知っている。マイペースな恵那でさえ「苦手！」と言って、避けて回る相手なのだ。

「そうだなあ。たとえば、こちらが必要な資材を提供する代わりに、リリアナさんが本国に帰還する……なんてのはどう？」

「そんな条件、呑のめるわけがないだろう！」

　リリアナが憮ぶ然ぜんとして突っぱねると、馨はにこりと笑う。

　人好きのする、さわやかな笑顔。これは彼女の武器のひとつだった。

「いやね、草くさ薙なぎさんのまわりに欧州の方々がこれ以上増えるのは、やはり芳かんばしくないんだ。今回、恵那が介入してきた口実もそれだし。《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》はともかく《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》のリリアナさんには、正直なところ自じ粛しゆくしてもらいたいのさ」

「エリカならよくて、わたしだけなぜだ!?」

「うーん。こう言うと君はきっと怒るだろうけど、大人の話ができない子だから」

　今度は意味ありげに言う。

　少年にも少女にも見える美び貌ぼうが、物もの憂うげでミステリアスな影をまとう。

「ぼくはエリカさんとなら、有意義な会談や取引ができると確信しているよ。だが来日してからの行動を聞く限り、君はそうじゃないな、リリアナ・クラニチャール」

　相手の急所を抉えぐり、論戦を挑いどむ。馨が本腰を入れてきた。

「この三カ月、われわれはエリカさんの存在を黙認していた。彼女はぼくら——特に、ぼくらが送り込んだ祐理との共存を受け入れていたからね。たとえば前回のサルデーニャ旅行だって、エリカ嬢がその気なら、祐理を日本に置き去りにすることもできたはずだし」

　そういえば護堂と祐理（と正史編纂委員会）の動向は、完全に把は握あくされていたのだ。

　祐理は夏休みのことを思い出した。今にして思えば『護堂との仲を進展させたい』と発言しながら、エリカはしっかりと祐理を受け入れる体勢を整えていた。

「ところが、リリアナさんはねえ……。日本に来るなり草薙さんにべったりで、うちの祐理やエリカさんにも非友好的だ。何か適当な理由があれば排除しかねない印象すらある」

「主にとって害となる奸かん臣しんを退しりぞけるのは、騎士としての務めだ！」

　リリアナの武人らしい反論。しかし、馨は上品に微苦笑した。

「だけど、草薙さんは君だけの主に非あらず。エリカ嬢の、うちの祐理の、そして全世界の魔術師の『王』であるわけだ。ぼくの言う意味がわからないのなら、リリアナさんはせいぜい彼の近この衛え騎き士ししか務められない器うつわだな。そうじゃないかい？」

「近衛の何が悪い？　それこそ王に仕える騎士の本ほん懐かいではないか！」

「うん、べつに悪くはない。ただ、君が護衛や雑用にいそしむ間、ぼくとエリカさんで宰さい相しようの座を争っているだろうけど。あと、ぼくの推おす祐理とエリカさん自身のどちらかが彼の第一夫人になるはずだ。それでもいいのかい？」

　男装の媛巫女が悪戯いたずらっぽく問うと、リリアナは驚きよう愕がくに目を見開いた。

「正史編纂委員会は、草薙護堂への臣しん従じゆうを計画しているのか!?」

「十分にありうる未来、とだけ言っておこうか。目下、検討の最中……なんてね。ま、そうなれば、あの小うるさい古老の方々だって恐るるに足りなくなるし」

　冗談めかして馨が言う。しかし、祐理はハッとした。今の言葉——特に最後の一言に、冗談以上の意味を感じたからだ。

「だからといって、わたしに本国へ帰れなどとは」

「あれはあくまで例。ぼくが提案したいのはね、いずれ同じ『王』を主に仰あおぐかもしれない者同士、持ちつ持たれつで行こうってこと。リリアナさん、よかったら祐理の面倒も見てやってくれないか。君だって、ぼくらのような盟めい友ゆうがいた方が楽だと思うよ」

「わたしに正史編纂委員会と組め……そう言いたいのか？」

「返事は今すぐでなくてもいいから、考えてみてくれないかな。あと、これは私見だけど、エリカさんに対抗したいのなら、君はそういう根回しも覚えた方がいいと思う」

「それはまあ……。いいだろう。あなたたちとの共闘路線を検討しようじゃないか」

　リリアナの譲歩に、馨は人好きのする笑顔に戻った。

　もともと《青銅黒十字》の騎士を追放するつもりなどないのだろう。

　強力なライバルでさえ盤ばん上じようの駒こまとして使うのが馨のやり方だ。今の会話は、そのための布ふ石せきなのだ。祐理はどきりとした。リリアナのあとは、まちがいなく自分の番だ。

「さて、祐理。君にもすこし意識の改善をお願いしよう」

　やはり来た。馨が穏やかな声で話しかけてきた。

「ぼくらは今まで名目だけの愛人役を君に頼んでいた。ただね、恵那が派は遣けんされたことでもわかるだろうけど、状況はすくなからず変化している」

　なめらかな語り口。それを聞き流しながら、祐理は考えた。

　霊感が働いているのか、馨の要求したいことは何となくわかっていた。

　恵那もエリカも、何より護堂がいない。そして正史編纂委員会と沙耶宮馨の思惑がうっすらと見えている。この状況下で、万ま里り谷や祐理は何と応えるべきか。

「ぼくも無ぶ粋すいな真似は好きじゃないからね。本人同士に恋愛感情がないのに、無理に愛人縁えん組ぐみさせようなんて野や暮ぼをするつもりはなかったのさ。ただそろそろ……」

「大丈夫です」

　覚悟が決まった。きっぱりとした言葉で、馨をさえぎる。

「私と護堂さんの仲は、ただのお友達同士で終わりはしないでしょう」

　決然と顔を上げ、性別不詳の美貌を真っ向から見つめる。

　珍しく馨は、真剣そのものの表情になった。ちなみに横でリリアナが「ええっ⁉」と、ソファの後ろでで甘粕が「おおっ」という顔をしていた。

「わ、私があの方のつ、妻となるかはわかりませんが、近い関係にはなるはずです」

「それは君の霊視？　それとも欲求？」

　ぶしつけな馨の質問。それに顔を赤らめながら答える。

「両方……だと思います。護堂さんとは初めてお会いしたときもただならぬ間柄になる予感がしましたし、今だってあの人の安あん否ぴを思うと……居いても立ってもいられません」

　最初、草薙護堂と出会う前。

　凶きよう悪あく無む惨ざんなカンピオーネとの面談を想像していた祐理は、震え、おののいていた。

　だが会ってみるとなぜか心がほぐれ、遠慮する気持ちがすっかり薄れた。天下の魔王を相手に口うるさく説教までするようになった。

　あの頃から、奇妙な相性の良さは感じていたのである。

　そして今、姿を消した彼の安否を考えると——。

　おなかの底にズンと沈ちん殿でんするような不安と恐怖。必ず救ってみせる、そのためにも自分は変わってみせるという決意。そして、無事な彼ともう一度会いたいと願う切なさ。

　それらが渾こん然ぜん一いつ体たいとなった、不可思議な想いがこみ上げてくる。

　この想いにまかせて、行けるところまで行こう。その覚悟を祐理は決めていた。

「なるほど。じゃあ、草薙さんに貞てい操そうを捧ささげたりとかも？」

「さ、沙耶宮馨！　ああ、あなたは何を!?」

「は、はい。い、今すぐとかは言えませんが、将来的にはおそらく、きっと、必然的にそうなるのではないかと……」

「万里谷祐理もどさくさにまぎれて、何て発言をしているんだっ!?」

　リリアナを無視して祐理が己おのれの意思を伝えると、馨は苦笑した。

「そこまで言われたら、ぼくの方から言うことはないな。十分だよ、祐理」

「あ、あの、もうひとつ言わせてください」

　ふたたび人々の注視が向けられる。それに耐えながら、祐理は口を開いた。

「私は、護堂さんにどこまでもついていきます。委員会のみなさんがあの人に害が及ぶような要請をされても、応えることはできません。あの人が委員会と距離を置こうと決心されるのなら、私もそれに従います。そのことをお忘れなきようお願いします！」

　勢いにまかせて宣言してしまった。



　馨と甘粕は『おいおい、これは』『参りましたね』とばかりに顔を見合わせ、そして主人の方はすこしだけ茶化したげな表情をしながら、謹きん厳げんに言った。

「肝きもに銘めいじておくよ、媛。じゃあ甘粕さん、嫁入りのご祝しゆう儀ぎ代わりに例の物を」

「あー、やっぱり私が蔵へ行くんですか。仕方ないですねェ……」

　蔵という言葉が出た途端だった。

　ガタッ！　書斎の机が揺れた。そして本棚もガタガタ揺れ出す。

　地震ではないようだ。部屋の隅ではピシッ、ピシッと鋭い破裂音が発生している。

　祐理はリリアナと目配せし合った。どうやら魔女である彼女も感じたらしい。――この館やかたに居着く、人ならざる住民の存在を。

「あの、馨さん……これは一体？」

「もうわかった？　さすがに鋭いね、君たち。いや、必要だっていう薬とかは、我が家の蔵でコレクションしてきた、先祖代々の蒐しゆう集しゆう品ひんのなかなんだ。あれに手をつけようとすると、曽ひいじいさんとかがうるさいんだよ。じたばた騒ぎ出しちゃって」

「馨さんの曽おじいさま――先々代の沙耶宮ご当主！」

　沙耶宮惟これ道みち。欧州に留学して彼かの地の魔術も学び、正史編纂委員会の創設者となった。明めい治じ生まれで、昭しよう和わの四〇年代に死去したはず。

　彼のプロフィールを思い出して、祐理は絶句した。ということはつまり。

「沙耶宮家の歴代当主は、みんな蒐集癖がひどいんだ。病やまいが高じて、死んだあともこうしてコレクションを見張るくらいでね。まあ、蔵を探りに行く甘粕さんがいろいろ恐怖体験して死にそうになる程度の害しかないから、気にしなくてもいいよ」

「だから、明らかに給料分以上の仕事をさせるのはやめてくださいよ、本当に！」

「いいじゃないか。忍者って滅めつ私し奉ぼう公こうするものだろう？」

「その呼び方が、不当に極悪な労働環境をわれわれに強しいる温おん床しようなんですよ！」

　主従の口論と幽霊屋敷の発見に、祐理とリリアナは目を丸くした。

　だが、これで護堂たちを救出する準備ができる。

「なら早速、アストラル界へ渡る儀式の準備をしよう。……実を言うと、わたしも一度しかやったことのない高等魔術だから、ちょっと心許ないところはあるんだが」

　リリアナが迷いを振り捨てるように告白した。

「最善を尽くしてみるので、みんなにも協力をお願いしたい」

「そういうことなら、ひとつ提案。餅もちは餅屋、幽かくり世よのことなら巫女のなかでも祐理にまかせた方がいいよ。その方がいろいろスムーズに進むはずだ」

　馨が発言しながら、こちらを見つめる。

　この言葉に、祐理はそうかと納得した。自分の霊視は、西洋の魔術師たちが言う『虚空アカシヤの記憶』を幽世から引き出すことで成立する能力なのだという。だとすれば、向こう側で最も的確な行動を取れる者は——。

2

　一方、幽世に囚とらわれたふたりはボケっと過ごしていた。

　場所は変わっていない。無人の街にある無人の公園である。護ご

堂どうは芝生のなかにすわりこみ、その膝ひざを枕まくらにしてエリカは自じ堕だ落らくに寝っ転がっている。

「こんなふうに何もしないままでいいのかな……」

「仕方ないわよ、何もできないんだから」

　悩む護堂に対して、エリカは剛ごう胆たんに割り切っていた。

「わたしたちが行ゆくえ方ふ不明めいになったと知れば、祐ゆ理りやリリィが捜そう索さくをはじめるわよ、きっと。今はあの子たちが見つけてくれるのを待つしかないわ」

「見つけられるかな？」

「不可能ではないわ。祐理の霊れい視し、リリアナの魔術が合わされば……。でも時間はかかるでしょうね。そうなると不安なのは『少年』の加護がどこまで保もつか」

　冷静に分析しながら、エリカは護堂の膝枕に頬ほおをすり寄せる。

「当分は大丈夫そうだけど、無限に持続するとも思えないし……。だから護堂、わたしたちがすべきなのは今ここで愛を確かめ合うことよ」

「何でそうなる!?　もっと建設的に時間を使うべきだろ！」

「わたしの知識と魔術じゃ、この状況を打開できない。護堂の権けん能のうもいっしょ。ほら、もう待つしかないじゃない？　悔くいのないようにしましょう、おたがいに」

　膝の上のエリカが、顔を護堂に向けてきた。

　どきりとした。彼女がかつてないほど幸せそうな、満ち足りた表情だったのだ。

「さっきの護堂、素敵だった……。あんなふうに荒々しくて、わたしに命令までして……ふふっ、たまにはああいうのも新鮮でいいわね」

「そ、そうか。いや、おまえがいいならいいんだ」

　焦あせりを押し隠しながら答える護堂。

　あの暴走はウルスラグナの権能に影響された結果だと信じたい。儀式の最中、自分とエリカは相当に倒とう錯さくした状態だったように思える。

「あのね、さっきもらった加護のことだけど」

　護堂の焦りにも気づかず、エリカが己おのれの下腹部を愛いとおしそうに撫なでた。

「ここにね、すごく温かくて力強い、命の塊かたまりみたいに宿っているの。これを感じるだけで、とても幸せな気分になれるわ。……何だか、わたしたちの子供がおなかにいるみたい」

「こ——!?　そ、その表現は不適切だと思う！」

「あら。感じているのはわたしなんだから、反論は受けつけないわ。ねえ、あなたの本当の赤ちゃんも欲しいっておねだりしてもいい？」

「よくない！　寝言は寝てから言え！」

　エリカの要求を突っぱねながら、護堂は決心した。

　大切な誰かに危機が迫ったとき、その者を守る『少年』の加護。だが、その行使に際してはあんな行為に耽ふけらなければいけない……。

　禁じ手だ。『少年』の化身は二度と使ってはならない禁じ手とするのだ！

「もう。さっきの男らしさ、もうすこし見せてくれたっていいじゃない」

　拗すねたようにエリカが言う。

　しかし、そのくせ護堂の膝の上で無防備な顔のままだ。反則的なまでに可愛かわいい。

　こいつとこのままふたりきりで、本当に耐えきれるのか。いっそ誘惑に流されてもという心の訴えを無視するのがこんなに難しいと

は。

　護堂の不安と焦しよう燥そうが、狂おしいほどに高まったときだった。

「——護堂さん、エリカさん！」

　聞き慣れた可か憐れんな声。

　顔を上げる。そこには巫み女こ装しよう束ぞくに身を包む万ま里り谷や祐理の姿があった。

　ようやく再会できた、懐かしい知ち己きの顔。しかし護堂は、気まずさでいっぱいだった。こんな体勢、こんな会話をしているときに彼女と会ってしまうなんて！

「祐理！　やっぱりわたしたちを探しに来てくれたのね⁉」

　今までの甘やかさから一転。いつものきびきびした声でエリカが呼びかける。護堂の膝の上から、ようやく身を起こした。

「は、はい……。ですがおふたりとも、その格好は一体……はしたないです！」

　とがめるように祐理が叫ぶ。

　護堂は忸じく怩じたる思いでうつむいた。文字通り、顔向けできない場面だ。

「いいじゃない、ちょうど長い間ふたりきりだったのだし。でも……そうね。わたしも今回、いい目を見過ぎたかもしれないわね。次はあなたをかまってあげるよう、護堂にきちんと言っておくわ。これでは駄目かしら？」

　ところがエリカは極上の笑顔で切り返すのだから恐れ入る。ダメに決まっているだろうと護堂は心のなかで突っ込んだのだが。

「つ、次は私…………。エリカさん、そんなことをおっしゃらないでください。ま、まだ心の準備が……できていません……」

　熱に浮かされたような口調で祐理はつぶやいた。

　そして、ちらりと護堂の方を見て、すぐに目を逸そらしてしまう。何だろう、これは？　護堂はいぶかしんだ。祐理の様子が今までとちがう。

「ど、どうしたんだ万里谷のヤツ……」

「ま、あの子もいろいろ受け入れる準備ができてきたのよ。その下地はもともとあったわけだし。あなたの方もいいかげんに、きちんとしなさいね」

　訳がわからないまま護堂がつぶやくと、エリカが小声で答える。

　準備？　下地？　どういうことなんだ？

「あなたをここへ送り込んだのはリリィ？　よく薬とか調達できたわね」

「はい。正せい史し編へん纂さん委員会の援助を受けて、どうにか準備できました。儀式を行ったリリアナさんは、本当はご自分が来たがったのですが……。私の方が幽世では便利ですので」

「そうね。霊視の力が強い祐理なら、この世界の情報を抜き出し放題だものね」

　いつのまにか、ふたりが実務的な話に入っていた。

　ここでは祐理の方が便利？　不思議がる護堂に、エリカが説明してくれた。

「あなたも経験済みのはずよ。知りたいと思う情報を、即座に霊視するあれ。祐理ならこの世界に到着してすぐ、わたしたちの居場所を霊視できるのよ。しかも、そのイメージを使って瞬時に飛んでくることも容易なはずよね。そうでしょう？」

「はい。ただ、ここではあまり霊視を行わない方が安全そうです」

　周囲をうかがいながら、心配そうに祐理が言う。

「現うつ世しよよりも私の力が強くなるのはたしかなのですが……。ほんのすこしでも歯車が狂うと危険な状況に陥おちいりそうな――いやな感じがします」

　神がかりが進みすぎた恵那のことを、護堂は思い出した。

「だったら、早く脱出した方がいいな。実は、清せい秋しゆう院いんが地上へ帰っているはずなんだ。万里谷が今言ったみたいに、あいつは普通じゃなくなっている。スサノオと天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎの力に体を乗っ取られているんだ。助けなきゃいけない」

「え!?　恵那さんが、幽世で神がかりに失敗したのですか!?」

　驚いた祐理は、すぐに真剣な表情になった。

「でしたら、一刻の猶ゆう予よもありませんね。……みなさん、私のそばにお寄りください」

　護堂とエリカは、言われた通りにした。

　遥はるか彼方かなたへ向けて祈るように、祐理が目を閉じる。彼女の周囲に青い光が満ちていく。

　これが自分たちを地上に連れ戻す道みち標しるべなのか。

　そう思った直後、護堂の体は天高く放り上げられた。さっきまで立っていた幽世の地面はあっという間に遥か下方になっていた。

　気づけば、護堂たちは見慣れぬ屋敷の庭にいた。

　元の世界に帰ってきたのか？　何時間ぶりかは不明だが、すっかり夜になっている。向こうに皇居の偉い容ようが見えた。ということは、千ち代よ田だ区の中心部に近いのか。

　古めかしい洋館の敷地内。きっと金持ちの住居なのだろう。

　ふと地面を見れば、複雑怪奇な図形や文もん様よう、解読不能な呪じゆ文もんらしきアルファベット、象しよう形けい文も字じなどが几き帳ちよう面めんに描かれていた。

　これはおそらく魔術の痕こん跡せきだ。周囲を見回す。

　すぐそばにはエリカと、疲れた様子の祐理がいる。そして、リリ

アナ・クラニチャールがこちらへ駆け寄ってくるところだった。

「草薙護堂！　よくご無事でお帰りになられました！」

　妖よう精せいにも似た銀髪の魔女が涙ぐんでいる。感動の面おも持もちだ。

　彼女にも心配かけたようで申し訳なく思いながら、護堂は第二、第三の人物に気づいた。

　背広姿の甘粕冬馬、そして驚くほどの美形が庭先にいたのだ。

「ご無事で何よりですよ、草薙さん。ご帰き還かん、お喜び申し上げます」

「甘粕さん！　ちょうどよかった、清秋院の居場所を知りませんか!?」

　地味な風ふう貌ぼうのエージェントに問いただした瞬間だった。

　冷たい風が吹き出し、たちまち強風になる。しかも雨まで降り出してきた。

　——嵐の到来が近い。護堂は戦うための活力が体に宿るのを実感した。これは神に近しい者が引き起こしている現象のはずだ。

「これ、清秋院恵那と天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの仕し業わざよね」

「わかるのか、エリカ？」

「ええ。護堂からウルスラグナの加護を授かったせいか、なんとなくだけど」

　いつのまにか、ここにいる全員の視線が護堂とエリカに注がれていた。

　祐理、リリアナ、甘粕、そして初対面の美形。

　最後の人物は性別不詳だった。美少年にも美少女にも見える、美しい顔立ちだ。彼もしくは彼女が微笑みながら会え釈しゃくする。

「沙さ耶やの宮みや馨かおると申します。そこにいる甘粕の上司

で、祐理や恵那と同じ媛ひめ巫み女こですよ」

「媛巫女？」

「よく驚かれます。それはそうと、今あなたがたは恵那と天叢雲劍の仕業だとおっしゃられましたね？　詳しく状況を教えてくださいますか？」

　どう見ても同年代なのに、甘粕の上司。沙耶宮馨の自己紹介に違和感を覚えながら、護堂が成り行きを説明しようとしたとき。

『――それは後まわしにしてもらおう。神殺しがようやく現世に戻ってきたのだからな』

　あの傍はた迷めい惑わくな少女と同じ声。

　だが、決して彼女のものではない静かな口調。

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎと清秋院恵那の肉体が、屋敷を取り巻く塀へいの上に立っていた。雨に濡れた恵那の姿は、操り人形のように虚うつろな印象だった。

　祐理か甘粕でも見張っていたのか、神刀の超感覚で神殺しの帰還に気づいたのか。

　いずれにしてもタイミングのいい登場だ。

　護堂は決心した。このまま神がかりが解けないままでは、恵那の身が保もつまい。ぶん殴ってでも正気に戻さなくては……。だが、どうやってぶん殴ろう？

　ウルスラグナ一〇の化身。どれも強力すぎるため、人間相手に使うのはためらわれる。

　護堂が迷っていると、リリアナが進み出た。

「草薙護堂、わたしにおまかせください。要はその女を取り押さえればよいのでしょう？　彼女の横暴ぶりにはわたしも腹を据すえかねていたところです」

「リリィ、今のあの子はあなたひとりの手には負えない相手よ。わたしも戦うわ」

　こちらはもちろんエリカだった。

　クオレ・ディ・レオーネとイル・マエストロ。

　ふたりの騎士たちの手に、それぞれの魔剣が顕あらわれる。そして、彼女たちの肩から下を覆おおう色あざやかな戦衣も呼び出された。

　紅と黒ロツソネロのケープと、青と黒ネラツズーロのケープ。

　彼女らテンプル騎士たちがバンディエラと呼ぶ、勇猛たる騎士の旗印であった。護堂の右に紅をまとうエリカが、左に青をまとうリリアナが並び立つ。

　紅と青の騎士を前にして、太た刀ちの媛巫女は唇を動かさずに言った。

『——神刀たる我と我が巫女に、人間ごときが挑いどむつもりか。慮りよ外がい者ものめ』

　巫女ではなく、それを操る神刀の侮ぶ蔑べつ。

　だが戦意は刺激されたらしい。恵那の体が塀へいの上から外の道路へと飛び降りた。広い場所を求めてか、そのまま大通りの方へ走り去っていく。

　糸に操られる人形じみた動きのくせに、異常な足の速さだった。

　エリカとリリアナも飛ぶような速さで追いかける。

　あわてて護堂も走る。見覚えのある風景から、千ち鳥どりヶ淵ふちの近くだと察しがついた。

　墓ぼ苑えん入り口の交差点。その向こうには木々の生い茂る遊歩道。首都高。そしてもちろん、千鳥ヶ淵のお堀。皇こう居きよを取り囲む石垣。桜の木々。

　護堂たちが追いついた頃、二対一の戦いは千鳥ヶ淵の緑道ではじまっていた。

　皇居のお堀沿いに造られた、数百メートルの遊歩道。染そめ井い吉よし野のをはじめとする桜の木々が列をなしており、春にはみご

となな桜並木となる場所だ。

「今って何時なんですか!?」

「深夜一時のちょっと前ですな。天下の往来とはいえ、人通りはあまりないはずです」

　叫ぶような問いに、甘粕が答える。

　全力疾しつ走そうした護堂に、この青年は易やすやすとついてきたのだ。

（ちなみに、祐理はとっくの昔に振り切っている。馨は追いかけるそぶりさえ見せず、甘粕に追えと指示するだけだった）

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎに操られる恵那との戦いで、エリカは一度完敗した。

　二対一とはいえ、そんな相手と渡り合えるのか。だがカンピオーネの権能を使えば、恵那を殺しかねない。ジレンマに苦しみながら、護堂は勝負の行方を見守る。

「エリ、エリ、レマ・サバクタニ！　主よ、何なに故ゆえ我を見捨て給たもう！」

「ダヴィデの哀あい悼とうを聞け、民たみよ！　ああ勇士らは倒れたる哉かな、戦いの器は砕けたる哉！」

　なんと、紅と青の騎士たちはいきなり切り札を出した。

　どちらも無む双そうの勇士にして英雄王であったダヴィデの詠よんだ詩の一節らしい。

　神すら傷つける最強の秘ひ儀ぎ。エリカが幽世で使わなかったのは、あそこで呪じゆ力りよくの消しよう耗もうが激しい術は危険と判断したのだろう。

「我が力なる御方よ、我を助け給え、急ぎ給え！　剣より我が魂こん魄ぱくを救い給え。獅し子しの牙きばより救い給え。野牛の角より救い給え！」

　絶望に満ちたエリカの慟どう哭こくが響く。

　これこそが『ゴルゴタの言こと霊だま』。イエス・キリストもゴルゴタの処刑場で最さい期ごに詠うたいかけ、力尽きたという凶まが歌うたにして賛歌。

「殺あやめし者の血を呑のまずして、ヨナタンの弓は退かず！　勇士の油を喰くわずして、サウルの剣は虚むなしく還かえらず！　ああ勇士らは戦いのなかに倒れたる哉！」

　悲哀に満ちたリリアナの鎮ちん魂こん歌かが響く。

　これこそが『弓の歌』。英雄ダヴィデが旧主サウルと盟友ヨナタンの死を悼いたみ、万ばん感かんの悲しみと嘆なげきを込めた哀あい悼とうの歌。

「我は主の御名を告げ、世界の中心にて御身を讃たたえ、帰き依えし奉たてまつる！」

「サウルの剣よ、鷲わしよりも速く獅し子しよりも強き勇士の器よ。今こそ我が手に来たれ！」

　憎悪と絶望の言こと霊だまが、エリカの魔剣に宿った。

　いにしえの英霊の言霊が、リリアナの魔剣に宿った。

　最強の武器を使わなくては勝てない。彼女たちにその判断を下させた敵も、機械のような声で呪まが歌うたを口ずさんでいた。

「かけまくもゆゆしきかも、言ことはまくもあやに畏かしこき──」

　これを謡うたうのは天叢雲劍か、それとも恵那なのか。

　唇が動いているところを見ると、後者なのかもしれない。判然としないまま、謡のリズムに乗って媛巫女の肉体は傀かい儡らいのように動く。

「明あ日す香か乃の真ま神がみ之が原はら尓に久ひさ堅かた能の天あま都つ御み門かど乎を懼かしこくも毋定賜而さだめたまいて」

　横よこ薙なぎに振り回される天叢雲劍を、エリカはクオレ・ディ・レオーネで受け止めた。

　だが、体ごと吹っ飛ばされる。斬ざん撃げきの威力を殺しきれなかったのだ。

　もっとも、同じ展開で幽世では愛剣を両断されている。今回は持ち堪こたえた。魔剣にゴルゴタの言霊が宿ったおかげだろう。

「神かみ佐さ扶ぶ跡と磐いわ隠がくり座ます八や隅すみ知し之し吾わが大おお王きみ乃の所き聞こ見しめ為す」

　エリカを吹っ飛ばした神刀は、次いでリリアナを襲う。

　青の騎士は天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎをイル・マエストロで巻き取ろうしたのだが、上手くいかなかった。やはり、エリカ同様吹っ飛ばされてしまった。

「背そ友とも乃の國くに之の真ま木き立たつ不ふ破わ山やま越こえ而て狛こま劔つるぎ和わ射ざ見み我が原はら乃の行かり宮みや尓に安あ母まも理り座いま而して」

　ぎくしゃくとした人形の手さばき、足さばき、体さばき。にもかかわらず、恵那の振り回す神刀は速く、鋭く、着実に騎士たちを追い詰めていく。

　バラバラでは二対一でも負けると悟ったのだろう。ふたりは声を掛け合った。

「不本意だが、連れん携けいするしかなさそうだ。攻めと守り、どちらがいい？」

「わたしが防御をするから、リリィは攻撃を。隙すきがあったら弓を使いなさい！」

「いいのか？　当たれば、あの巫女も無事では済まないぞ!?」

「向こうがあんな力を使うのですもの、仕方ないわ。でも、できるだけ剣を狙ねらいなさい！」

「承知！」

　ふたりの騎士がくっつき合うようにして並ぶ。

　体を半身にして、エリカが左でリリアナが右。そして、同じ速さ

で前進をはじめた。

　今までのようにすばやく、バラバラに攻撃するのではない。

　神刀が斬きりつけると、それをエリカが巧たくみに剣で防ぐ。反撃はしない。

　一対一の戦いで防戦一方になると、相手は勢いづいて攻め込んでくる場合が多い。敵の勢いを止めきれず、かえって劣れつ勢せいになるものだが——。

　今回は、防御に専念するエリカに代わって、リリアナが攻め返す。

　こちらは防御を考えず、攻撃一辺倒。その鋭さと勢いを、天叢雲劍でさえ今までのようにいなすことができなかった。

『…………』

　神刀も媛巫女も無言。だが、明らかに警戒を強めていた。

　エリカとリリアナは陣形を組んだのだ。防御と攻撃に役割を分担。たがいの位置を臨りん機き応おう変へんに入れ替えながら、ふたりそろっての正面突破を敢かん行こう。

　二対一でも圧倒的に優位だった媛巫女が、はじめて押され出した。

　紅と青の騎士たちは、いざとなると抜群の連携を見せるようだ。護堂は舌を巻いた。

「エリカ！　弓の用意をするから、しばらく持もち堪こたえろ！」

「わかったわ！」

　相棒を庇かばうようにエリカが前へ。その背後でリリアナは魔剣を消し去った。その代わりに、彼女の左手のなかに青き光の長弓が顕あらわれた。——ヨナタンの弓！

　ペルセウス戦のときに護堂は聞いていた。

『弓の歌』は、サウルの剣かヨナタンの弓のいずれかを造り出す術

なのだと。

　前者はエリカが『ゴルゴタの言こと霊だま』を宿らせた剣と同じく、神をも斬り裂く刃。

　後者は呼び出した言霊を矢に変えて撃うつ。

　撃てる回数は呪力の残量によって変わるが、一度か二度。これを外すと、せっかくの切り札が無駄になってしまう。ペルセウス戦で見せた数本の矢を同時に撃つ技は、必中を期すために幻げん影えいを混ぜて眩げん惑わくしたのだという。

　その切り札の召しよう喚かん。リリアナはここで勝負をかけるつもりなのだ！

　――しかし、それを見抜いたのは媛巫女たちも同様だった。

「天あめの下した治おさめ賜たまい食おす國くに乎を定さだめ賜たまう等と鶏とり之が鳴なく吾あ妻ずま乃の國くに之の御み軍いく士さ乎を喚めし賜たまい而て千ち磐は破やぶる人ひと乎を和や為わ跡せと不ま奉つろ仕わぬ國くに乎を治おさめ跡と！」

　夷い狄てきを打ち払う呪まが歌うた。そして、恵那の体が天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを振りかぶる。

　風が渦うずを巻く。

　恵那の足下から渦巻く風が吹き荒れ出す。小型の竜巻となる。

「リリィ、早く！」

「わかってる！　ヨナタンの弓よ、鷲わしよりも速く獅し子しよりも強き勇士の器うつわよ――！」

　リリアナの右手に、四本の青き光の矢が顕れた。

　その瞬間、天叢雲劍が水平に薙なぎ払われた。それをエリカのクオレ・ディ・レオーネが止めようとして、跳ね飛ばされる。

　しかも、恵那の足下から発生した竜巻がエリカとリリアナの体を呑のみ込んだ。

「きゃあああああッ！」

「わあああああああッ!?」

　そろって悲鳴をあげて、竜巻に吸い上げられる騎士ふたり。

　天に舞い上がり、地面に叩たたき落とされる！　リリアナの手から青き弓と矢が消失した。気を失ったようだ。エリカの方もしたたかに打ちつけられたように見える。

「エ、エリカさん、リリアナさん――!?」

「芳かんばしくない戦況ですよ。どうします、草薙さん」

　息を切らして追いついてきた祐理が、決定的な場面を見て蒼そう白はくになった。その隣で冷静に問いかけたのは甘粕だ。護堂は彼女たちを無視して、恵那の前に走った。

『――ようやく参ったか、神殺しよ』

　唇を動かさないまま虚うつろな目で媛巫女がささやく。

　護堂は舌打ちした。たしかに強い。

　しかし、いくら天叢雲劍が神刀とはいえ、操っているのは人間の体だ。強すぎるわけではない。カンピオーネの直感が、敵の器を見切っていた。

　神刀に乗っ取られた清秋院恵那は、人間の魔術師を凌りよう駕がしている。

　ナポリで遭そう遇ぐうした竜。サルデーニャ島で目撃した神獣たち。彼らに近いレベルだろう。

　だが『まつろわぬ神』に比べれば、たいした脅きよう威いではない。

　たとえば『駱駝らくだ』を使えば、かんたんに撃破できるはず。しかし、護堂の権能をまともに喰くらえば、恵那の体は無事では済まない。

　非常時には非常時にふさわしい行動を取るべき。だが、そうは

言っても……。

「護堂、あなたが出るまでもないわ。ここはわたしにまかせてくれる？」

　声をかけられた。

　立ち上がろうと必死にあがく、エリカの呼びかけだった。

　クオレ・ディ・レオーネを召喚の魔術で呼び寄せて、杖つえ代がわりにしている。

「このままやられっ放しじゃ、エリカ・ブランデッリの誇りに傷がついてしまうわ」

「いいから、そのまま寝ていろ。おまえだってもう限界だろう！」

「いいえ——勝負はまだこれから……わたしが華麗に逆転する第二章の幕が開こうとしているのよ？　邪じゃ魔まをしないで……！」

　ついにエリカは、完全に立ってみせた。

　言葉遣づかいこそ気取ったものだが、彼女らしくもない激情を露あらわにした宣言。

　燃えるような瞳で恵那を見み据すえている。対する媛巫女は、あいかわらず人形のような目と表情でそれを受け止める。

　止めるべきか、戦わせるべきか。もちろん止めるべきだ。

　そこは迷わなかった。これ以上やったら死んでもおかしくない。エリカに勝ち目がないとわかっている以上、力ずくでも戦わせるのを止めなければ——。

　……待て。本当に勝ち目はないのか。

　さっきの神刀の一撃で、リリアナは吹き飛ばされて意識を失った。

　だが、エリカは持ち堪こたえている。今までさんざん消耗して、打ちのめされて、リリアナよりも弱り切っていたくせに。彼女を守っている力があるのか？　——そうか！

護堂がその正体に気づいたとき、エリカと目が合った。

彼女の下腹部に視線を向ける。

ハッとした表情で、エリカがそこに手を当てる。彼女も気づいたようだ。

「忘れていたわ。今のわたしには、護堂から授さずかった加護がある。……我が魔力の淵えん源げんたる　《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の印に請こう。我に栄誉ある騎士の武ぶ勲くんを約束し給え！」

呪力を込めた言霊が、彼女の唇から滑り出る。

同時に変化が起きた。

エリカのまとう紅と黒のバンディエラが、長いマント状の上衣コートとなり、彼女の膝にまで届く。その裾すそが勢いよく翻ひるがえるさまは、翼を広げる猛もう禽きんにも似ていた。

そしてクオレ・ディ・レオーネ。

細身の長剣だった獅子の鋼はがねは、その形状を槍やりへと変えていた。

鋼鉄製の逆さか棘とげのような、中世騎士物語で見る馬上用の長なが槍やり。あれのサイズを縮めて二メートルほどにした、歩兵用の片ラ手ン槍スだ。

この槍が彼女の右手に。左手には、楕だ円えん形けいの鉄てつ楯じゆんが収まる。

真紅と黒の戦衣をはためかせ、騎士の槍と楯で武装したエリカの雄姿は、十字クローチエの紋章を冠する聖騎士パラデイーノと呼ぶにふさわしいものだった。

「え？　どうしてエリカさんに、護堂さんの——ウルスラグナの力が!?」

祐理が驚きよう嘆たんした。霊視の力で変化の原因を見抜いたらしい。

　だが、驚いたのは護堂もいっしょだ。まさか『少年』の加護が、ここまでの変化をもたらすものだったとは——。これはチャンスだ。

「いけるか、エリカ？　清秋院のヤツをぶちのめせるか？」

「もちろん！　今のわたしなら、あの女に二度と後れを取ったりはしないわ！」

　その確約が、第二幕のはじまりだった。

　ぎこちない足さばきのくせに、異様なほど速く恵那が踏み込んでくる。その勢いに乗って、八はつ相そうの構えから袈け裟さ懸がけの一刀を振り下ろす。

　それをエリカは、楕だ円えんの楯たてでがっちりと受け止めた。

　漆しつ黒こくの神刀と楯が、激しくぶつかり合う。両者の接点では火花が散り、強烈な神力がほとばしる。まさに互角の押し合い。

　しかしエリカには、まだ槍ランスが残っている。

　渾こん身しんの一突き。それが届く前に、恵那の体はイナゴのごとく後方へ跳んだ。

　そこでエリカも地を蹴けった。

　退がる恵那に向けて、駿しゆん馬めのように突進。すかさず槍で突きまくる。

　怒ど濤とうの連打。何十発と打ち込まれる穂先から、恵那は地面を転げ回って逃れる。その寝転がった体勢から、追いすがるエリカの脛すねを薙なぐ一ひと太た刀ち。

　エリカは抜群の反射神経で横にステップ。

　今の脛すね切りで追撃を断った恵那も、間かん髪はつをいれずに立ち上がる。

「すごいですね。天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎに操られる恵那さんとあの立ち回り、まさに鬼神ですな」

感心したように言うのは甘粕だった。

祐理も、そして意識を取り戻したリリアナも驚嘆のまなざしで戦いを見守っている。

「草薙護堂……あれが最後の化身、『少年』の効能なのですね。すさまじい御力です。とはいえ、エリカへ先に使われたことには文句を言いたい気分ですが」

祐理の介かい抱ほうを受けながら、悔くやしそうにリリアナが言う。

あの加護を授ける方法は絶対秘密にしよう。そう誓いながら護堂がうなずいたとき。

驚いた。なんと恵那がいきなり笑い出したのだ。

「ハッ！　は、はははははは！　素敵だね、エリカさん。参ったな、神がかりが行きすぎた恵那と同じくらい強くなれるだなんて、思わなかった！」

ひさしぶりに聞く能天気なソプラノ。

天叢雲劍が出させていた、今までの冷徹な声ではない。

修しゆ羅ら場ばすら飄ひよう々ひようと楽しんでみせる、可憐な剣客本来の声音だった。神がかりが解けたのかと護堂は期待したが、すぐに勘かんちがいだと悟った。

彼女に宿るスサノオと天叢雲劍の気が、より一層ふくれ上がったからだ。

「いいね。今度こそ、真っ向勝負をしよう！　ここから仕切り直しだよ！」

叫ぶ恵那の手中で、漆しつ黒こくの神刀が稲いな光びかりを発し出す。

パチパチと火花が散り、蒼あお白じろく放電する天叢雲劍。まつろわす神――征服神の属性を持つ鋼の神力、嵐の申し子にして須佐さの王たるスサノオの神力が高まっているのだ。

恵那はその豪刀を手足のように操り、青せい眼がんに構える。

今までは、神の魂たましいと力によって操られる状態だった。感情は皆かい無むだった。

だが、勝負の楽しさを思い出した恵那は、感情をも取り戻した。

そのうえで天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎと同調している！

「さっきはこれで勝てたけど、今度はどうかな？　奪え、天叢雲！」

恵那が神刀の切っ先をエリカに向けた。そこから放たれた不気味な波動が、女騎士に絡からみつく。水盆のなかでも観た、呪じゅ力りょくを奪う攻撃だ。

「無駄よ、もうその手は通じないわ！」

エリカは紅と黒の上衣コートの裾すそをつかみ、バサリとなびかせた。

その一振りで、神刀の波動は払いのけられる。あの布には今、カンピオーネと同等近い魔術への防御力がありそうだ。

恵那は不敵に唇くちびるを歪ゆがめ、上段に神刀を振り上げた。

いびつだが強力な、人形めいた動きではない。磨き抜いた剣術の構え。

エリカも楯で体を守りながら、槍の穂先を恵那に向ける。正面突破の構え。



——真っ向勝負。

恵那が宣言した通りに、ふたりともその準備を済ませたのだ。

同時に駆け出す。激突する。

神刀が振り下ろされ、槍が突き出される！

天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎがエリカの肩口を斬きり裂さいた。だが、刀身の根本に近い部分で。

クオレ・ディ・レオーネが恵那の肉を抉えぐる。ただし、左の脇腹をかすめただけ。

共に、不十分な形での攻撃。

エリカの突進が速すぎて、天叢雲劍はいちばん斬れ味の良い箇所で女騎士を斬り伏せられなかったのだ。恵那の獣けもののような身のこなしに、エリカの放った一突きはギリギリ紙一重のところで避けられてしまったのだ。

だが、この交こう錯さくはまだ完了していなかった。エリカが突進をやめていなかったためだ。

たしかに槍の一突きはかわされた。

だが楯を前面にかざしたまま、体ごとぶつかっていく。今度こそ正面突破！

恵那の華きや奢しやな体は、車に撥はね飛ばされるようにして吹き飛んだ。

「くは——ッ!?」

「これが騎士の流儀……正々堂々たる敵陣突破の作法よ。思い知ったかしら？」

地面に叩きつけられた恵那。息を荒らげながら勝ち誇るエリカ。

だが、勝った方もすぐに膝ひざをついた。

バンディエラもクオレ・ディ・レオーネも本来の姿へと戻ってい

く。限界が来たようだ。

「まあね。思い知ったよ……降参」

　天叢雲剣を杖つえにして恵那は立ち上がりかけ……諦あきらめた。

　神刀を握ったまま道路に寝転がる。動けないようだが、満ち足りた顔だった。

　古き良き昭しよう和わの青春映画で、川原の決闘が終わった直後のノリだ。護堂が呆あきれて肩をすくめたとき、ふと気づいた。

　恵那の出現と共に発生した風と雨。まだ弱まっていない。それどころか強くなった？

　轟ごう々ごうと強風が唸うなり、大きな雨粒がばしゃばしゃと道路と護堂たちを叩く。

「――万里谷！」

「護堂さん、まだです！　まだ天叢雲剣は戦うつもりです！」

　とっさに祐理へ訊たずねた瞬間に、即答が返ってきた。

　神刀へ駆け寄ろうとする。すぐ叩き折るつもりだったが――遅かった。

　天叢雲剣が、いきなり巨大化した。

　刃渡り一メートル程度だった刀が、どんどん膨ぼう張ちようしていく。しかも変形まで遂とげる。

　……高い。背の高さは目算で二〇メートルほどか。

　漆黒の刃が胴となり、手となり、足となる。天叢雲剣は今や巨人になっていた。

　鉈なたのように分厚い剣。その切っ先を天に向け、垂直に構えた形状の胴体。

　その刀身の左右に接げられた二振りの刀。これが両腕だ。肘ひじに当たる箇所にはご丁てい寧ねいに関節まであり、曲げられるよう

だ。

　そして足。胴や手よりも分厚く、がっしりとした鋼で造られている。

　胴の長さに比して、かなりの短足だ。決してスタイルはよくないが、もとより異い形ぎようの巨人なのだ。しかし、全体としてはひどく鋭い印象だった。

　刃の巨人。天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎはふれるだけで斬り裂かれそうな、刃の巨人と化した。しかも、その右肩に該当する辺りの刀身部分には、恵那の体が埋め込まれていた。

「王様……」

　天叢雲劍のなかから、か細い声が洩もれてきた。

「無事か、清秋院？　そこから逃げられそうか⁉」

「いやー無理みたい……。体に力が入らないや。ちょっとお願いしてもいいかな？」

　今度こそ神がかりは解けたらしく、いつもの調子だった。

「助けが欲しいなら、すこし待ってろ。今どうにかしてやるから！」

「いやいや。そこまで面倒はかけられないよ……」

　護堂の呼びかけに、達たつ観かんしたような声で返事をした。

　その間にも刃の巨人——天叢雲劍は短い足を動かし、歩き出した。その進行方向はこちら、草薙護堂のいる場所だ！

「天叢雲は、まだ王様と戦う気まんまんだからね。こうなったらさ、王様の力でさっさと倒しちゃってよ。そのぐらい軽いでしょう？　恵那のことは気にしなくていいよ……」

「気にするなって何だよ、そりゃ⁉」

「もともと恵那が悪いんだしね……。好き勝手やったし、でも最後に面白い勝負もできたし、あんまり思い残すこともないから、気に

せずやっちゃって。じゃあね」

　それを最後に、恵那の声は聞こえなくなった。

　代わりに、天叢雲劍がどんどん接近してくる。向こうは刃の巨人となっていたが、足が極端に短い。しかも脚部に関節はないようだ。膝でいざるような歩き方だった。

　護堂は居合わせる面々を見回した。

　さっきの激闘で力尽きたエリカ。『少年』の加護も消え、呪力も体力も使い果たした。だが、それでも護堂を守るつもりか立ち上がろうとしている。

　恵那の一撃で昏こん倒とうしたリリアナ。ふらつく体でイル・マエストロを呼び出し、戦う準備をしようとしている。

　祐理は、恵那を取り込んだ神刀に気き遣づかわしげな視線を向けていた。

　そして甘粕は「いやはや参りましたな」とつぶやき、ひとり冷静だった。とはいえ、彼に暴走する天叢雲劍を打ち負かす力などあるわけがない。

　とりあえず、ここを離れよう。皆を巻き込んではいけない。

　決断した護堂は一気に走り出した。

　天叢雲劍は足も短く、歩き方も効率が悪い。いくら図体がでかくとも、あれなら振り切るのもかんたん——と思ったのだが。

　脇わきをすり抜けていくと、劍の怪物は意外にすばやい動きで振り返った。

　イヤな予感に駆られたため、護堂は背後を気にしながら走る。おかげで予感の正しさを確認できた。天叢雲劍は、右腕に当たる刀を振り下ろしてきたのだ。

　シュン。空を切り、雨さえも斬り裂く音。

　刀があと数十センチ遠くに届いていれば、護堂の体はまっぷたつに両断されていた。

　なんという剣の鋭さ、そして間合いの広さだろう！

「ダメだよ、王様……。天叢雲に手加減するつもりなんかないんだから、とっとと壊さなきゃ……。早くして。追いつかれちゃうよ？」

　また恵那の声。気を失ってはいないようだが、それを聞いている暇はない。

　護堂はもう後ろを見なかった。

　全力で前方へとダッシュ。絶対に追いつかれてはいけない！

　千ち鳥どりヶ淵ふちに沿って疾しつ走そうする。向こう側には皇居が見える。お堀を飾り立てるような木々が目立つ。名物の桜の木だ。

　十分引き離したようなので、護堂はようやく立ち止まった。

　刃の怪物となった天あまの 叢むら 雲くもの 劔つるぎはぎこちない歩みで追ってくる。はっきり言って遅い。逃げつづけるのは難しくないだろう。だが、それは問題を先送りにするだけだ。

「草薙さん、もうやっちゃうしかないですよ。恵那さんも言ってたでしょう？」

　不意に横から呼びかけられた。

　そちらを見て驚く。なんと甘粕が、息さえ切らさずに立っていたのだ。

「ど、どうやって追いついたんですか？」

「ずっとあとを追って走ってました。私、足は結構速いんです。それより、あいつのことです。暴走して巨大化した神刀なんて野放しにしたら、一体どうなるか……」

　もっともらしい文句を甘粕が口にする。

　だが護堂は、おそらく敢あえて無視されている問題点を指摘した。

「清秋院を巻き込んでもいいんですか？　あいつと刀はくっついているんですよ!?」

「仕方ないと思いますよ。彼女の言った通り、自じ業ごう自じ得とくです。この状況なら私の上司・沙耶宮だって、正史編纂委員会の責任者として認めますよ。やむを得ない処置だったって」

　やむを得ない処置……本当にそうなのか。いや。護堂は否定した。

　自分はまだ為なすべきことを行っていない。何も試ためしていない。そんな状況で、やむを得ないなどと言って、割り切れるものか！

「だったら、俺が言いたいことはひとつです。とりあえず、清秋院を助けます。そのあとであの化け物を始末します。それでどうですかね？」

「ほお。そんな都合のいい秘策があると？　一体どのような？」

「そんなのはありませんよ。やりながら考えます！　危ないから下がって！」

　護堂の言葉に、甘粕が「えー？」という顔をする。

　だが、かまっている余裕はない。護堂は接近する天叢雲劍に集中した。

　ヤツはまたも右腕代わりの刀を振り上げていた。それがみごとな太た刀ち筋すじで落ちてくる。

　あざやかな斬り下ろし。長大な刃が頭上に迫る。——速い！　あんな図体のくせに、太刀さばきの迅じん速そくさが尋常ではない。

　だが、それゆえにこれが使える。高速で攻撃されたときのみ行使できる化身。

　護堂は『鳳おおとり』を行使した。

　周囲の全て、己を取り巻く世界が減速するなか、草薙護堂だけが加速する。

　本来なら自分の頭をかち割るはずの巨大な鋼を余裕で避けて、その刀身の上に飛び乗る。跳躍力も身軽さも飛躍的に向上するのだ。

　そのまま易やすす々やすと腕代わりの刀を駆け上り、肩に埋まった恵那のもとへたどり着いた。

　囚とらわれの媛巫女は「我が人生に悔いなしー」と言いたげな、弛し緩かんした表情だ。

　こいつ、人にここまで苦労させておきながら、なんてお気楽な……。ちょっと呆あきれながら、護堂は恵那の肩を掴つかんだ。

　力を込めて、引っぱる。がっちり抱え込まれていたが、すこし動いた。

　よし。またも渾こん身しんの力で引っぱる。やった。みごと引きずり出すことに成功した。

　この期ごに及んでも、恵那はぼーっとしたままだ。まあ護堂が加速状態なので、これは仕方ない。制服姿の巫女さんを抱えたまま、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの背後に飛び降りる。

　本当なら、後ろから一撃喰らわせてやりたいところだが。

　残念ながら『鳳』のウルスラグナに、こいつを倒す破壊力はない。諦あきらめた。

　前方を見ると、祐理がこちらへ駆けてくる途中だった。

　息を激しく切らしており、ちょうど立ち止まって呼吸を整えていたようだ。もっとも加速状態の護堂には、ほとんど静止しているように見えた。

　エリカとリリアナも後ろから追いかけてくるところだった。

　さすがにダメージを負った騎士たちよりは、祐理の方が速かったらしい。護堂は彼女のすぐそばに恵那を下ろした。さて、あとは天叢雲劍をどうするか。

　方法は思いついたのだが、はたして上う手まくいくか。護堂は次の化身を行使した。

　加速状態が終わり、普通の感覚が戻ってくる。

「くっ、やっぱりダメか。む、胸が――！」

　心臓を押さえながら、護堂は膝をついた。前屈みに倒れ込む。

『鳳』の化身を使ったあとは、心臓を襲う激痛に苛さいなまれる。しかも、このあとはしばらく身動きできなくなるはず。見通しが甘かったか。

「……ご、護堂さん、どうしてここへ!?　恵那さんまで!?」

「あれ、天叢雲に捕まってたはずなのに？　王様に祐理、何でいるのさ？」

　媛巫女たちの声が聞こえる。

　しかし、護堂はそれどころではない。痛みに耐えるので精一杯だった。

　いつのまにか巫女ふたりに左右から抱きかかえられ、すわり込む体勢になっていた。

「『鳳』の化身を使われたのですね？　それで恵那さんを……」

「あ、ああ。もうすこし体が保てば、あの刀野郎もぶち壊せたんだけど無理そうだ。ふたりとも、早く逃げろ……」

　察しのいい祐理にうなずきながら、護堂は指示を出す。

　心臓の激痛は耐え難いほどだった。せめて巫女たちだけでも助かってくれれば――。

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎは、見失った護堂の姿を求めて右う往おう左さ往おうしていた。あの調子なら、自分さえ連れていかなければ逃げられるのでは。

　だが、すぐそばにいる恵那が静かに言い出した。

「いいや、逃げないよ。こうなったのも全部、恵那のせいだからね。それに天叢雲はうちの相棒だし……。恵那があいつを足止めするから、逃げるのは王様たちだよ」

「バカ！　清秋院が捨て身になっても、たいして時間稼かせぎにはならないだろ！」

　正論を言い立てたが、太刀の媛巫女は決心を変える様子はない。

　くそ、せっかく助けたのに——と護堂が舌打ちしたとき、祐理が決然と口を開いた。

「護堂さんがもうすこしだけ動ければいいのですね？」

　凛り々りしい表情で問いかけてくる。

　その毅き然ぜんたる美しさに、護堂も恵那も口論の言葉を呑のみ込んだ。

「あ、ああ。あとすこしだけ集中できれば……」

　精神集中と気合い。それがなければ、あの化身を使いこなすことはできない。しかし、胸の痛みのせいで気力を振りしぼれなかった。あと一歩で勝てるというのに！

　そう歯は噛がみしたとき。

　いきなり祐理が顔を近づけてきた。いや、顔だけじゃなくて唇も。

　一時的接触？　唇と唇が？

　護堂は現状を認識した。自分は今、祐理にキスされている！

　甘い吐息とともに呪力が吹き込まれる。胸の激痛が和やわらいできた。どうして？

「そうか。王様たちには体内からじゃないと術をかけられないって、こういう意味なんだ！」

「は、はい。今、手当ての術をお口から吹き込んだのですが……」

　羞しゅう恥ちに打ち震える祐理と恵那のやりとり。

　護堂は呆ぼう然ぜんとしながら、無言で天叢雲劍の様子を眺めた。

　ついにこちらの居場所に気づいたらしく、あのいびつな歩き方で前進をはじめたところだった。距離にして、あと二〇メートルほどか。

「わかった！　じゃあ王様、よくわからないけど恵那も協力する。だから勝って！」

「え、恵那さん!?　そんな、恵那さんまでなさる必要は……！」

　まただ。今度は清秋院恵那が唇を寄せてきた。

　今日三度目のキス。



　チュッと合わせた唇の間から、軽快なそよ風にも似た空気が送り込まれる。

　痛みがだいぶやわらいだ。その代わりに手足の指先が硬直してくる。体にきちんと力が入らない。『鳳』の副作用である行動不能状態がはじまったのだ。

　だが、今なら間に合う。利用できる。

『猪いのしし』の化け身しんの能力――あの黒き巨獣を異界より召しよう喚かんする能力を！

「背を砕き、骨、髪、脳のう髄ずいを抉えぐり出せ！　血と泥とともに踏みつぶせ！　鋭く近寄り難き者よ、契約を破りし罪ざい科かに鉄てつ槌ついを下せ！」

　声を限りに叫んだ直後、遊歩道が黒く変色した。

　そこから容よう貌ぼう魁かい偉いな黒き『猪』が飛び出す。巨大な物体を破壊したいと願ったときのみ呼べる化身。もちろん、今回の標的は巨大化した天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎだ。

　体長約二〇メートルの怪獣じみた巨体は、異形の劍にも引けを取らない。

　舞台は千鳥ヶ淵。長大な刃状の巨人と『猪』の怪獣決戦。

　巨人の鋭利かつ重厚な刃は、黒き巨獣の分厚い皮と筋肉さえ斬り裂いた。だが、それはささやかな抵抗に過ぎないことがすぐに判明した。

　破壊力の差がケタちがいだったのだ。

　青黒い血を流しながら『猪』は歓喜の咆ほう哮こうをあげ、全体重を乗せて突進。あちらの刃に負けず劣らず鋭利な牙きばを突き立て、圧倒的な重量でぶちかまし、蹴けりつけ、踏みつける。

　あげくに超音波が混ざっているらしい咆哮を口から発する。

　それらの猛攻を喰らって、天叢雲劍は何度も何度も吹っ飛ばされていった。

　どう見ても大人と子供のケンカだ。『猪』の圧勝である。

「神様や俺たちが直じかに操るのと神様の遣つかい程度じゃ、ここまで差がつくんだなあ……」

　護堂はしみじみとつぶやいた。当分の間、身動きできそうにない。

　ここから逃げて、惨状から目を背そむけることもできなかった。

　千鳥ヶ淵のなかに吹っ飛ばされた天叢雲劍を追って、『猪』もお堀に飛び込む。そのまま水上対決に移行。皇居を囲む石垣を体当たりで突き崩したり、巨大な劍の斬ざん撃げきで薙なぎ払ったりと、やりたい放題だ。

　今、現在進行形で千鳥ヶ淵は形を変えつつあった。

　お堀のなかで巨獣と巨劍が激突するたび水柱が跳ね上がり、水しぶきが舞う。

　お堀自体も砕かれ、抉えぐられ、斬り裂かれと蹂じゆう躙りんされ放題。

　春を迎えるたび人々を楽しませてきた桜たちも、大被害をこうむっていた。へし折られ、押しつぶされ、寸断され……東京の桜名所がひとつ、消滅しつつあった。

「すごいよ、草薙さん。王様の力って、こんなにすごかったんだねェ！」

　恵那にキラキラした目で言われてしまった。その隣で祐理と護堂は深々とため息をつく。

「ごめん、万里谷。こんなことになっちまって……」

「い、いえ。これは不ふ可か抗こう力りよくみたいなものですし……私もいっしょに罪を償つぐないますからっ」

「結局、こうなったわけね。ま、落ち着くところに落ち着いたってところかしら」

「まあ、いくら神の造り給たまいしものとはいえ、カンピオーネと

直接対決すればこうなるのは自然の成り行き。仕方のないことだ」

　破壊劇の進む間に合流したエリカとリリアナが、感心したようにつぶやく。

　どちらもまったく罪悪感を感じていない口調であった。

　その一方で、甘粕はいつのまにか姿を消していた。この件を闇やみに葬ほうむるべく、いち早く動き出したのかもしれない。

　かくして、惨劇の首謀者たちが見守るなか、黒き『猪』は嬉き々きとして天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを破壊し、千鳥ヶ淵を蹂じゆう躙りんし、勝利の咆哮を天高く捧げるのであった。

終　章

　人ならざる者たちの住まう、生と不死の境界。肉体よりも霊が重きをなす世界。

　そこで三人の老人たちが集つどっていた。

　彼らが居合わせる場所は、美しい庭園に建つ東あずま屋やだ。

　従じゆう僕ぼくなどひとりもいないはずなのに、ここは丹たん念ねんに手入れされている。

　だが、不思議なことではない。生と不死の境界を構成するのは、折り重なる幾多の空間。それらの空間は、支配者の好みに合わせて如い何か様ようにも変化する。

　須す佐さの老ろう神しんが嵐吹く深しん山ざんを住まいとするのは、単に彼の好みなのである。

「さて、かの羅ら刹せつの君の評定と参りますか。あの御ご仁じんがおなごにどのような振る舞いを見せる男か……それを見み極きわめるため、此こ度たびの騒ぎを起こしたのですからな」

　音おん頭どを取ったのは黒衣の僧そう正じようである。

　即そく身しん成じよう仏ぶつ。苦行の果てに肉の束そく縛ばくを捨て、不死へと近づいた者だ。

「わたくしにはよき殿方、よき大おお王きみであらせられると思われます。いずれ眠れる御子がお目覚めのときは、必ずや地上の庇ひ護ご者しやとなってくださるでしょう」

　と主張したのは、玻は璃りの媛ひめ。

玻璃色の瞳ひとみを持つ傾けい城せいの美び姫きは、実のところ齢よわいでは僧正を遥はるかに凌しのぐ。

ちなみに、この瀟しよう洒しやな庭園は彼女の支配する空間であった。

「媛、決めつけるのもいかがなものかと。あの御仁、少々粗そ忽こつの気けがひどいように思われますな。此度も、もっと上う手まい片づけ方がいくらでもあったでしょうに」

「そのような瑣さ事じ、時が解決してくれましょう」

僧正の反論を、媛は真っ向から否定した。

「お忘れか、御坊。かつて御子を苦しめたのは、やはり女を救う者でありました。草くさ薙なぎさまの娘たちへのお振る舞い、恃たのむに足たる器量の証あかしとお見受けいたします」

「ふむ。ならば、御ご老ろう公こうのご裁定やいかに？」

「ちゃっかりオレの劍をかすめ取る辺り、油断ならねえヤツなのはたしかだなあ」

最年長の老神が他ひ人と事ごとのように言う。

「巫女はくれてやるつもりだったが、劍までとは言ってねえ。粗忽なのはまちがいねえが、あの油断ならねえところは買いだろう。とはいえ、すぐに決める必要もねえさ」

「様子を見る——ということでしょうか？」

媛の問いに、速須佐之男命ハヤスサノオノミコトは鷹おう揚ようにうなずいた。

「おう。あの迷惑なガキが目覚めるとは、まだ決まっちゃいねえんだ。草薙とかいう小僧の器、これからじっくり吟ぎん味みすることにしようぜ」

「結局、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの所有権は草薙さんのものになった……それでいいのかな？」

千ち代よ田だ区く三さん番ばん町ちようの沙さ耶やの宮みや邸てい。

その書しよ斎さいでアームチェアに揺られながら、沙耶宮馨かおるはつぶやいた。

「恵那さんはそう主張してますが、真しん偽ぎは不明です。あの騒動のあと発見された天叢雲劍は、依い然ぜんとして強大な神力を秘めたまま。しかし、この劍の担にない手てたる恵那さんにも行使できず、本来の所有者である御老公のもとにも戻らない。それが現状です」

答えたのは甘あま粕かす冬とう馬ま。

主従が見つめるのは、馨のデスクに置かれた鞘さや入いりの大だい刀とうだった。

天叢雲劍。刀でありながら征服者の神格を持ち、速須佐之男命の従属神でもある存在。

「恵那の神がかりがきっかけで暴走した天叢雲劍は、独立した神と言える状態だった。それを倒した草薙さんに、神としての権能を奪われた……ありそうな話ではあるけどね」

一度は打ち砕かれた神刀を眺めながら、馨は言う。

対して甘粕は決めつけるのを避け、慎しん重ちような姿勢を崩さなかった。

「第二の権能になったのではないかもしれませんよ。『俺より強いヤツの仲間になった』って少年マンガのノリかもしれませんし」

「外側は直ったけど、中身は壊れたままってのもあるかな？」

「一気にシラける展開ですが、あり得る話です。派手にやられましたからねェ」

ともあれ、ここで詮せん索さくしても真相はわからない。

有能だが忠ちゆう臣しんとは言い切れない側近に、馨は軽い調子で言った。

「ま、危ない物だし、恵那に返すのも示しがつかない。うちの蔵くらで預かることにしよう。ああ、暫ざん定ていの持ち主に渡すって選せん択たく肢しもありなのかな？」

「一応打診しましたが、断られました。銃じゅう刀とう法ほう違い反はんをする気はないと」

「……草薙さんって、妙なところで普通っぽいことを言うよね。変な人だなあ」

「向こうは多分、馨さんにそれを言われたくないでしょうなァ」

　リリアナ・クラニチャールは小さく首をかしげた。

　彼女の前では、草薙護堂と万里谷祐理がのんびりと昼食を楽しんでいる。だが、ふたりの親密さが前よりも増しているような……。気のせいか？

　清せい秋しゅう院いん恵え那なと天叢雲劍が引き起こした騒動は、すでに数日前。週も改まり、ふたたび学校もはじまった。そんなある日の昼休みだった。

　いつものように、屋上での昼食。

　そしてリリアナも、いつも通り草薙護堂のためにランチを用意した。

　今日は本場バレンシア風のパエリアと何種類かの果物、チーズ、ピクルスなど。しかし、今日はその隣となりに黒くろ塗ぬりのお重がふたつも鎮ちん座ざしていた。

　ひとつめには鮭さけの炊き込みご飯。散らした三つ葉の緑があざやかだ。

　ふたつめにはたくさんのおかず。サワラの西さい京きよう焼やき、胡ご麻ま豆どう腐ふ、つくね団だん子ご、ゴボウとコンニャクの煮物、自家製とおぼしき漬け物各種などなど……。

　味も抜群にいいが、それだけでなく華やかだ。見ているだけでも楽しめる。

　リリアナは自分のランチを収めている地味なタッパーと比べて、不安になった。味は負けてない。だが、これでは印象で劣おとるかもしれない。

　これらのお重を持参したのは、媛ひめ巫み女こ・万里谷祐理だった。

「やっぱり万里谷は、料理が上う手まいなー」

　紙皿に取り分けた炊き込みご飯を味わいながら、草薙護堂が言った。

「うちのじいちゃんに食わせても、きっと合格点を出すよ。あの人、やたらと口が肥えてて、和食には特にうるさいんだけど、これなら絶対に大丈夫だ」

「まあ、ありがとうございます。でも、おじいさまは合格でも、護堂さんの方は……？」

　賛辞されているのに、祐理が心配そうに訊たずねる。

　護堂の反応と感想が気になって仕方なさそうな、心細げな表情だ。

「その、もしかしてお口に合わなかったりとか——」

「ないない。そんなこと、あるはずがない。すごく美う味まいよ」

「そうですか。安心しました。……でも、お口に合わないものとかお嫌いなものがあれば、おっしゃってください。覚えておきますから」

「そんなこと言わないよ。こんな昼飯なら、何だって美味いに決まってるって」

　安あん堵どして控えめに微笑ほほえむ祐理。気安く応じる護堂。

　リリアナは確信した。このふたり、前はこれほどスムーズに対話していなかった。おたがいにもっと遠慮がちだったはずだ。それが解消されている……！

「護堂さん、お好きなものがあれば、お取りいたしますよ？」

「いいよ、そんなの。それくらい自分でできるから、変に気を遣つかわないでくれよ」

「でも、私の方がお重に近いですから……そうした方が早いです」

　取とり箸ばしと紙皿を持った祐理が問いかけると、一度拒こばみかけた護堂はすぐに「それもそうか」と言って、二、三リクエストを出した。

　それを聞いたリリアナの心は、激しい焦あせりに蝕むしばまれた。

　自分が同じ指示を求めても、最近の彼は「しなくていいから！」と強く拒むのだ。

　いつものように給仕や身の回りの世話をしようとしたら、周囲の人々が注ぐ視線を気にして逃げ出そうとしたりもする。

　男の尊そん厳げんがどうとか俺はヒモじゃないとか意味不明なことを言いながら。

　それなのに、なぜ万里谷祐理は――！

「リリアナさんも何か欲しいものが？　よろしければ、お取りしますよ？」

「い、いや、大丈夫だ！　気にしないでくれ！」

　祐理にしっとりと微笑みかけられて、リリアナはあわててごまかした。

　育ちのよいお嬢さまらしい、善意に満ちた笑顔。

　かつてない落ち着きが、今の彼女にはある。何がこの変化を生み出したのだろう？

「北風と太陽の差、というところかしら」

　エリカ・ブランデッリが隣でぼそりとつぶやいた。

　またしても昼食を持たずに現れた彼女は、祐理とリリアナが持参したお弁当を要領よくパクついている。

「祐理の強みは、護堂と妙に価値観やリズムが合うところよね。ふたりの関係がある一線を越えれば、自然とこうなるのは予測できていたわ。ま、最近はぎくしゃくしていたからあれだけど、こんな感じになるときは前から結構あったし」

　訳知り顔で『紅き悪魔デイアヴォロ・ロツソ』は言う。

「ど、どういうことだ、エリカ？」

「目の前で起きている通りよ。護堂に警戒心とか一切持たせないまま、祐理は彼の懐ふところに入り込んで『女』として振る舞えるの。わたしやリリィには無理な芸当よね」

「つ、つまり我が主がわたしを警戒していると言いたいのか!?　何て侮ぶ辱じよくだ！」

　エリカだけに聞こえる小声で文句を言う。

　だが憐あわれむような冷笑を返されて、リリアナは慄りつ然ぜんとした。

「リリィ、欲求と本能にまかせるだけでは、この戦いの勝者にはなれないわよ。あなたが『都合のいい女』で満足するならべつだけど」

「な、なんだって!?」

　わたし、あなたよりも彼のことをきちんと理解しているの。

　そう言いたげに勝ち誇るエリカの顔が憎らしい。だが、たしかにまずい気がする。草薙護堂と万里谷祐理の仲なか睦むつまじさは問題だ。

　彼を守護する騎士として、このふたりの間に割って入るにはどうすればいい？

　いや待て、そういえば沙耶宮馨に共闘路線を検討すると言ったばかり。ならば、この状況を見守らなければいけないのだろうか……。

　悶もん々もんとリリアナが悩んでいると、いきなり草薙静しず花かが叫んだ。

「もう！　お兄ちゃんも万里谷さんも、さっきからイチャイチャしてイチャイチャして、さらにイチャイチャして！　いいかげんにしてくれる！　バカみたい、みっともない！」

　苛いら立だたしげなツッコミ。

　ところが護堂と祐理は、きょとんとした顔で妹もしくは後輩を見つめた。

「イチャイチャって……普通に飯を食べてるだけだろ？」

「ええ。静花さん、変なことをおっしゃらないで、落ち着いてお昼を食べましょう？」

　さとすように言われて、静花はわなわなと肩を震わせていた。

「ううっ……その息の合いっぷりでイチャついてない？　何よ、長年連れ添った夫婦みたいにして、いやらしい！」

「夫婦ってバカ、変な冗談を言うな！」

「そうです。わたしたちが夫婦だなんて、まだ……」

　反論しながら顔を見合わせたふたりは、同時に恥ずかしそうにうつむく。

　その連携のみごとさにリリアナが衝撃を受けたとき、新たな少女が屋上に登ってきた。

　雑念を振り払い、エリカと目配せし合う。――闖ちん入にゅう者しやは清秋院恵那だった。

「恵那さん！　もうお体の方はよろしいんですか？」

「うん、何とかね。いやーみなさん、今回はご迷惑をおかけしました」

　祐理に答えながら、大やまと和なで撫子しこ風の媛巫女は歩み寄ってきた。

　彼女の肩には今、天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎはない。すこし違和感のある姿だった。

聞けば、このところ頻ひん発ぱつしていた激しい風雨も彼女が原因らしい。アストラル界にいるスサノオ神と交信したことで、かの神の力が嵐を呼び込んだのだという。

まさか、ここまで傍はた迷めい惑わくな娘だったとは。リリアナは鋭く恵那をにらんだ。

「で、今回の不始末を反省することになったから、しばらく実家で謹きん慎しんさせられるんだ。その前にご挨あい拶さつだけでもと思って……」

恵那の言葉に、静花だけが『どういうこと？』と首をかしげている。

妹に説明する気はないのだろう。護堂が「まあ気にすんな」とすばやく言った。

「いろいろ大変だったけど、たいした——ええと、俺たちにはたいしたことはなかったから、べつにいいって。次に会ったときは仲よくやろう」

途中で言い直したのは、千ち鳥どりヶ淵ふちの惨状を思い出したのだろう。

草薙護堂は天下無む双そうのカンピオーネでありながら、奇妙なところで繊せん細さいなのだ。

「うん、もちろん。この次は絶対に仲よくするよ。約束する！」

「ああ、頼む。——エリカもそれでいいか？　もう手打ちってことでさ」

「仕方ないわね。護堂がそう言うのなら、特別にその子の狼ろう藉ぜきは忘れてあげる」

王の指示に、エリカも肩をすくめている。

これで別れの挨拶はおしまい。そう思ったとき、唐とう突とつに恵那が艶つやっぽい表情になった。

「……でさ、これからは恵那も草薙さんの『女』ってことでいいんだよね？」

「おおお、俺の何だって？」

「お兄ちゃん！　この人またすごいこと言ったけど、今度は何!?」

　静花が叫び、エリカ、祐理、リリアナがそれぞれの想おもいを抱えた沈黙で見守るなか、護堂は困惑していた。

「だってさ、恵那はもともとそのつもりで来たんだし。あんなふうに助けられたら惚ほれ込んだりもしちゃうし。それに、天叢雲も草薙さんに取られたでしょう？　あいつは恵那の相棒なんだから、恵那もいっしょにもらってくれなきゃ！」

「ち、ちがうっ。あんな危ないものを取った覚えはない！」

「でも事実そうなったわけだし。……H、とかはまだ怖いけど、チューとかなら全然いいよ。またいっしょにしよう？　ね？」

「ちち、チュ……って！　どういうことなのお兄ちゃんッ!?」

　恵那に迫られ、静花に詰きつ問もんされるなか、草薙護堂は助けを請こうようにこちらを見る。

　よし、ここは彼の信頼を勝ち取る好機。

　リリアナはコホンと咳せき払ばらいして、冷静に話しだした。

「草薙護堂。ハレム入りを望む娘がいるのに邪じゃ険けんにするとは、あなたらしくもない。いつものように、王の威厳を持って受け入れればよいのです。静花さんには、あとでわたしが言って聞かせましょう。おまかせください！」

　不本意ではあったが、断だん腸ちようの思いで寛かん容ようなところを見せようとする。

　だが彼女の主は頭を抱えてしまった。

「そ、そんな誤解を煽あおるようなことを言うなよリリアナ！」

「護堂、その女はダメよ。さんざん痛い目に遭あわされた恨うらみは忘れてもいいけど、彼女が護堂のそばに来るのは認めがたいわ」

「そうですっ。恵那さんも慎つつしみのないことを言って、護堂さ

んを困らせないでください！」

　本格的な秋へと季節が向かうなか、草薙護堂の周囲でかしましい騒ぎが収まる気配は当分なさそうだった。

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

Ｖ　剣の巫女

著者　丈月　城

２０１２年２月16日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！
Ｖ　剣の巫女」

２０１０年７月11日発行の第５刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

〒１０１－８０５０

［電話］

０３－３２３０－６０９５（編集部）

０３－３２３０－６３９３（販売部）

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　有限会社ワイズネット